白銀の狼と金色の雌狐

怜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
白銀の狼と金色の雌狐

【Ｎコード】
Ｎ９４８５Ｎ

【作者名】
怜

【あらすじ】
ある集団に騙され、
左目…自分の存在…全てを奪われた狼
記憶を失い…生きる為に人を騙し続ける雌狐
そんな二人の物語。

白銀の狼（前書き）

こんな駄作ですがよかったら見てやってください（＾ｏ＾）／

ｂｙ作者

白銀の狼

ー満月の夜ー

ザシュッ…！

ー今日も人を斬る音が聞こえるー

男「ぐ…あ…！」

一人の男が倒れる。

その男に声をかけるもう一人の銀髪の男。

？「安心しろ…急所は外しておいた…。」

低く…重みのある声…

男「その強さ…やはり…お前が…！！」

息も絶え絶えに倒れた男は続ける。

男「白銀の狼…！！」

風に男の銀髪が揺れ、男の前髪に隠れていた隻眼が光った。

ーその容姿と眼はー

ーまさに…ー

ー血に餓えた狼ー

ーその男の名は……ー

ー夜月　我狼ー

白銀の狼（後書き）

お楽しみいただけたでしょうか？

文的にもまだまだ何も分からない所ですが…もしよかったらまた見てください♪

でわでわ失礼しました。

ｂｙ作者　怜

過去

我狼は常に1人だった。

生まれつき瞳の色が薄い灰色だったと言うこともあったが、

彼は特に気にしていなかった。

ある日を境に…

『何故俺が…！？』

ー彼は危険な存在だ…ー

『父さん…！母さん…！！優奈…！！』

ー消さなくてはいけない…ー

『何で…！？何でだぁぁぁぁぁ！！？』

ー運命なんだよ…ー

ー遠い…昔の話…ー

我「夢…か。」

我狼は呟いた。

我「現実な訳…無いな…。」

事実、今自分が居る場所は真夜中の森の中。

見えていた両目も今は隻眼となっている。

夢の中での自分は１８、１９位の年だったか。

我（１０年も昔の話しか…。）

再び眠りに着こうとした我狼だったが…

？「まてー！！」

？「逃がすなー！！」

我「……（汗）」

眠れなかった。

過去（後書き）

主人公おっさん！（爆）

まさかの２０代後半（笑）

さてさて…追いかけられている人物は…一体…？

次回もお楽しみに♪

出会い（前書き）

遂に登場！！金色の雌狐？

出会い

我（…山賊か。）

声の正体は柄の悪そうな山賊達。

こちらには気付いて無い様で何やらギャーギャーわめいている。

山賊「居たぞ！！」

1人の山賊が声を上げる。その視線の先には…

我（子供…？）

フードを被っているが前髪の金髪が見え、顔も大分見えている少年が走っていた。

その手には大きな袋。

山「奪い返せ！！」

山賊達が少年に群がる。

少「離せ！離せよ！！」

山「やっと見つけたぜクソガキ…！！」

少年は必死に抵抗するが大人の力に敵うわけもなく。

少年は最後のあがきとでも言うように声を振り絞った。

少「だいたいお前らが村の金を奪うからだろ！？」

我（…なるほど。）

山賊ならよくある話だ。

おおかたこの少年がいた村が襲われたのだろう。

我「やれやれ…。」

助けるつもりなど無かったが、これ以上自分の眠りを妨害される訳にはいかないので、渋々立ち上がった我狼であった。

出会い（後書き）

はい。

我狼さん立ったね（笑）

そういう時は最初から行こう（笑）

あ、忘れてましたが我狼のふさがってる目は左目ですよ☆

次回は…ちょっぴり戦闘モードになるかなぁ？↑オイ。

ま、お楽しみに～♪

戦闘♪↑（前書き）

先に謝っておきます…。

すいませんm（＿＿）m

おふざけが過ぎました。

こんなんでよかったらどうぞ見ていって下され…m（＿＿）m

by作者

戦闘♪↑

立ち上がった我狼が向かったのはリーダーっぽい男。

その男に～？

裏拳☆

ゴスッ

男「おぶっ！！」

ドシャア！

一発で倒れるリーダーっぽい男。

少「え…！？」

倒れた男と急に現れた銀髪の男に驚く少年。

なんとか理解しようと頑張るが時間は待ってはくれない。

部「てめえ！リーダーに何て事しやがる！！」

倒れた男の部下らしき男が我狼に向かって叫ぶ。

だが我狼は…

我「貴様らのリーダーなど知らん。」

我「人の眠りを妨害する奴に一発見舞ってやっただけだ。」

一刀両断。

まあ山賊達は怒る訳で。

部「ふざけんなぁぁぁ！！」

突っ込んで来る訳。

怒らした本人は大して気にしていない様で。

我「下がっていろ。」

隣の少年に声をかけ、山賊達を…

ドガッ！！

バキッ！！

ズドッ！！

ゴカッ！！

部「ひぃぃぃぃ！！」

追っ払っちゃいました☆

戦闘♪↑（後書き）

はい。

前書きで言ったとおり…おふざけが過ぎました（汗）

一応ギャグも入っているので…（ー．ー；）

まだ見ていてくれているそこのあなた！！

こんな駄作ですが…

どうぞよろしくお願いします…。

ｂｙ作者

夜明け

山賊が消えた所で一気に静かになった森の中。
我狼が少年に声をかける。
我「大丈夫か？」
唖然としていた少年は我狼の言葉に我に帰る。
少「あ…うん。」
少「ありがと…」
我「ならば良い。」
そっぽを向いて言う少年。
素っ気なく返事をする我狼。
だが…
少「…？」
少「無い…！！」
少年が異変に気づく。
我「？　どうした？」

少年の様子に気付いた我狼。

少「無いんだ…袋が…」

少年の声が心なしか声が震えている。

我「お前が持っていたやつか？」

少「ああ…。多分…山賊の奴らが持っていったんだ…！！」

少年の蒼い瞳とペンダントが揺れる。

少「取り返さなきゃ…！」

ダッ！

バシッ！

走りだしかけた少年の腕を我狼が掴む。

少「何するんだよ！！」

噛みつくように叫ぶ少年

我「お前では勝ち目は無い。」

少「う…。」

素っ気なく、だが幼い少年にとっては重い一言。

少「でも…あれが無くちゃ…村は…！」

少年の眼が変わった。

少「俺の命で村が救えるなら本望だ！！」

我「！　おい！」

そう言うと我狼の腕を振り払って走り出す。

まだ１３、１４歳位だろうか…まだ幼い背中を見送りながら我狼は呟く。

我「全く…無茶をする子供だ。」

ため息をつく。

我「だが…」

我（あの眼…）

少年の瞳を思い出す。

恐怖と不安を帯びた眼だが…

それ以上の覚悟を帯びた眼だった。

我「気に入った。」

夜が…明けていった。

夜明け（後書き）

しまった…（汗）

まだ少年の名前が出てない！！

次回までには…出せるかなあ…？

次回はちょっとギャグ入るかもしれません（笑）

でわでわ（＾ｏ＾）／～～

ｂｙ作者

調査

翌日、我狼は少年が走り去った方向に村があることを知り、その村に向かった。

～村入り口～

我「ここか…。」

小さいとも、大きいとも言えないが平和な村だった。

だが…

我「…む？」

我「これは…。」

入り口の門に少年が身につけていたペンダントを見つける。

我「…ここに居ることは間違いないな。」

確信を得た我狼だった。

と言っても建物が沢山ある村なので村人に聞き込みをする事にした。

村「よお、兄ちゃん。旅人かい？」

態度が軽そうな村人が話しかけてきた。

我「そうだが…今は捜している人物がいる。」

我「金髪で…女の様な顔をした子供を見なかったか？」

我狼は少年の特徴を並べ、村人に尋ねたが…

村「金髪…ねぇ…。」

村人は眉をひそめる。

我狼は何かあると悟ったが、少年が持っていたペンダントをつきだしながらもう一度聞いた。

我「見なかったか？」

ペンダントを見た瞬間村人の眼が見開かれた。

村「兄ちゃん…『金色の雌狐』に会ったのかい？」

先ほどの軽そうな顔つきでは無く、真剣な顔つき。

我「…『金色の雌狐…？』」

調査（後書き）

変な所で切っちゃった…（汗）

次回は…金色の雌狐の正体が明らかに…！

お楽しみに～♪

（＾ｏ＾）／

ｂｙ作者

正体（前書き）

そういえば…

前々回ギャグ入れるって言ったのに入れてない！（。д。；；）

ギャグ待ちだった人すいません…。

今回もだいぶシリアスです…（汗）

ギャグで短編書こうかなぁ…。

長々とすいません！

どうぞごゆっくりと…

ｂｙ作者

正体

我「…『金色の雌狐』…？」

我狼は村人に聞き返す。

だが…村人は聞いてない様子。

村「こいつぁ、驚いた！」

我「…おい。（汗）」

村「ああ！悪い悪い！」

我狼が言葉をかけるとやっと気づいた。

村「『金色の雌狐』っていうのはこの村にいる盗人の事だよ！」

我「盗人…？」

今度は我狼が眉をひそめる。

村「そう！名前も分からなくて、唯一分かってるのは、金髪で女顔。」

村「あいつに騙されると誰しも狐につままれた様な顔になるからそう呼ばれてるんだ！」

村人が説明を終えると我狼は

我「そうか…。」

と言って黙り込む。

村「それにしても驚きだなぁ！」

村人がペンダントを見ながら言う。

我「なにがだ？」

我狼が問うと村人は当然と言うように、

村「あの雌狐から盗まれる事はあっても盗むなんて事は無かったからよぉ！」

どうやら我狼が少年からペンダントを取ったと思い込んでいるらしい。

我「勘違いしている様だが…このペンダントは奴が落とした物だ。」

盗人と思われるのも困るので一応弁解しておいた。

村「そうだったのかい。」

弁解はできた。

我（たかが盗人だったのか…）

我（…俺の当て外れだったか…。）

我狼が諦めようとしたとき村人が声をあげた。

村「だが不思議な物でよぉ…。」

我「…？」

視線で聞くと…

村「盗む物は決まっててよ…食事位しか盗んでいかねぇんだ。アクセサリーもお前さんが持ってるペンダントくらいだしなぁ…。」

我「これか…？」

我狼がペンダントを揺らすと村人は頷き続ける。

村「もしかしたら…辛い生活なのかもなぁ…。」

我「…情報提供感謝する。」

我狼が言うと、

村「良いって事よ！」

と言って村人は去ってった。

乱入（前書き）

どうも（＾ｏ＾）／

作者です。

この駄作小説を見ていて下さる方々へ。

この小説のキーワードにギャグ？ってあるんですが…

ギャグ性が少なくなっています…（汗）

そこで皆さんにアンケートです！

短編でこの小説のギャグ編を書くか、書かないでこのまま、ちょっぴりギャグ性をいれた小説を書き続ける。

どちらがいいでしょうか？（，・ω・）？

アンケートに答えてくれる方はお手数ですが、感想の所に考えを書いて下さい。

長々とすいませんでした。

でわ本編へ～♪

乱入

ドガッ！

とある小屋から響く人を殴る音。

薄暗い小屋の中で、人影は４つ。

１つの小さな影はうずくまっている。

少「ぐ…ぅ…。」

小さな影の正体は我狼が捜していた少年。

だが昨夜とは違い、顔や体のあちこちに赤黒いあざがある。

山「へへへ…。」

残る３つの影はこれもまた昨夜の山賊達。

そう。少年のあざの原因はこの山賊達。

山「なぁ～そろそろ諦めないかぁ～？」

怪しい笑みを顔に貼り付けながら少年に言う、リーダーらしき山賊。

山「お前じゃあ俺達には敵わないんだよ～」

少「うる…さい…！！」

少年が山賊を睨み付ける。

山「チッ…！」

ガッ…！！

少「うっ…！」

すると山賊のリーダーは少年の前髪を掴んで自分と目線を合わせる。

山「このガキ…俺らが盗んだ物を自分の物にしようってか…！？」

山「生言ってるんじゃねぇぞ！！」

山賊が怒鳴り、拳をふるう。

少「ーーッ！！」

殴られる。痛みを覚悟した。その瞬間。

ドギャン！！

何が起こったのか分からない。

だが、宙を舞う木片。　壊れ、吹き飛ぶ扉。

何者かの足に蹴飛ばされ、扉と一緒に吹き飛ぶ自分を殴ろうとした人物。

そして…

少「…何で…アンタがここに…？」

昨夜も自分を助けた銀髪の男。

抜刀

目の前に立つ銀髪の男。

我「言っただろう…お前では勝ち目は無いと。」

少「ぐ…。」

反論出来ない少年。

だが不意に…

少「アンタは敵か…？それとも…味方か…？」

我狼は…

我「…俺を敵味方の基準に当てはめるな。俺はただ…気に入らん奴らを叩き斬るだけだ。」

少「……。」

少年がむやみに返す事も出来ず、黙っていると、

我「だが…」

少「…？」

我「お前のその眼は…嫌いじゃない。」

我狼は山賊から一瞬目を離しフッと笑った。再び我狼が山賊の方に目を向けると山賊達は噛みつくように怒鳴り始めた。

山「てめえ！また邪魔すんのか！？」

我「こいつにも言ったが俺はただ気に入らん奴らを叩き斬るだけだ。」

山賊とは反対に静かに答える我狼。

山「じゃあ口だしすんｎ我「村内の店五軒。」

突然の我狼の言葉に戸惑う山賊達

山「なに…？」

我「村内の民家三軒。」

我「そして…村長の家。」

山「てめえ…それをどこで…？」

山賊が声を圧し殺しながら問う。

そんな山賊を真正面から見ながら、我狼は答える。

我「気づいたか？お前達の被害にあった店、家だ。」

山「お前！！それをどこで知った！？」

山賊は再び怒鳴る。

我「少し情報力に優れた奴が身近に居てな…。」

たいした事無いように答える我狼。

その情報力に優れた奴の正体が分かるのはもう少し先。

我「やはり…お前達は気にくわん。」

我狼の声が低くなる。

山「うるせえ！やっちまえ！！」

我「力で金目の物を奪うなど…外道きわまりないな。」

山賊達がナイフや剣、武器を持って突っ込んでくる。

少「危ない！」

少年が叫び、山賊の武器が我狼に降り下ろされる。

だが、少年は見た。

武器が我狼に降り下ろされる瞬間、我狼の眼が鋭く光ったのを。

バギャン！

カラーン！

鋭い金属音がし、山賊達の腕から武器が引き剥がされる。

少「え…！？」

山「な…に…！？」

我「……。」

無傷の我狼の腕には…

少「太刀…！？」

巨大な太刀が握られていた。

抜刀（後書き）

次回はまた戦闘モードです！

お楽しみに～♪

ｂｙ作者

狼の牙

我狼の腕に握られているのは太刀。

我「あまり時間をついやしたくないのでな…悪いが手加減は無しだ。」

山賊達が身震いする。

ダッ…！

我狼が走り出す。

そして…

ー狼の牙が…奮われる。ー

ー鮮やかに…ー

ーそして…残酷に…ー

少「凄い…」

少年は唖然としながら呟く。

少「片目で…距離感がないのに…。」

なのに何故ここまで強いのか…？

そんな事を思っていたが、ある事に気づく。

少「強い…けど…」

少「苦し…そう…？」

ー狼の力は……ー

ー憎しみの力……ー

ドサッ！

山「た…助け…」

我「……。」

命乞いをする山賊。

だが無表情の我狼。

少「……。」

心配そうに我狼を見上げる少年。

殺させたくない…

それが少年の真意だった。

だが…我狼は、太刀を降り下ろそうとする。

少「…ッ！」

少「止めてくれよ！」

我「…？」

少年が止めると我狼は動きを止め、聞いた。

我「…何故だ？」

少「何故って…殺す事ないだろ！？」

我「…村の金を奪ったやつらだぞ？」

我狼の言葉に一瞬動きが止まった少年だが…

少「でも…！」

少「まだ間に合う！」

少年の力強い言葉。

少「こんなに命乞いだってしてるんだ！きっといいやつになるよ！！」

少年の必死な様子に我狼は負けた。

我「…分からんな。」

そう言って、太刀をおろし、その場を後にした。

狼の牙（後書き）

最近あとがきで書くことがない…（汗）

ｂｙ作者

『俺が行っても…』（前書き）

久しぶりの更新です…（汗）

山口さん、アンケート協力ありがとうございました（＾ｏ＾）／

アンケートはまだまだ受け付けておりますのでアンケート協力お願いします！

『俺が行っても…』

村の金を取り返した少年は真っ先に我狼と共に村に向かった。

だが…。

村の門の前で足を止める少年。

我「…行かんのか？」

少「…なあ。」

少「これ…あんたが届けてくれないか？」

少年が差し出した『これ』は山賊から取り返した村の金。

我「…それはお前が取り返した物だ。俺が行っても意味がない。」

我狼が言うが…少年は顔を曇らせたまま言った。

少「俺が行っても…それこそ意味ない…。」

我「…？」

我狼が理由を問おうとすると…

村「盗人だあ！金色の雌狐が出たぞ！！」

我&少

「！」

村人の大きな声。もう何人かの村人も走ってこちらに来る。

少「まずい！」

我「！　待て！」少年は林の中に逃げる。我狼が追おうとするが村人に呼び止められる。

村「おい！あんた何か盗られなかったか！？」

我「…いや。」

少年が消えた方向を見つめながら我狼は答える。

村「そりゃ良かった。最近村の金を盗られてなぁ。」

村「盗人に警戒してるんだ。…ってそれ！村の金じゃあねえか！！」

村人が我狼が少年から押しつけられた袋を指しながら叫ぶ。

村「あんたが取り戻してくれたのかい！？」

村人は嬉々としながら我狼に聞く。

我狼は…

我「俺より…よほど強い奴だ。」

村「？」

我狼の意味深な言葉に首をかしげる村人だが、

我「すまんが村の金は頼む。」

村「お、おう！」

我狼の言葉に頷く。

村人が返事をすると我狼はすぐに少年が消えた林に向かった。

隠せない心（前書き）

今回は山場です！
作者がらにもなく頑張りました！

隠せない心

少「……。」

ここは村から少し離れた湖。

その湖に足をつける少年。

チャプリと走り続け、火照った足を水のなかに入れれば痛いほど冷たい水がさす。

少年の表情は曇ったまま。

少「…あ。」

少年は気づいた。いつも身につけているペンダントが首に掛かっていないことに。

探しにいこうか迷っている少年。

そこに…我「ここにいたか。」

少「…あ……。」

また現れた銀髪の男。

沈黙が流れる。

だがその沈黙を破ったのは少年だった。

少「…ありがとな。」

我「…？」

突然の謝礼に疑問を浮かべる我狼。

少「あんたのおかげで…村を救えた。」

少「俺1人じゃ…何も出来なかったから…。」

少年の表情は相も変わらず曇ったまま。

そんな少年に我狼は言う。

我「…俺は何をしたのでも無い。」

我「最も…お前が命をかけるほどの村だったのか…？」

少「！」

我狼の言葉に少年の肩がピクリと動く。

我「お前と俺は違うが…」

我「自らの村を救ってもらって、その恩人を追い出す様な所…俺は救う気にはなれんな…。」

尚も続ける我狼の言葉にうつむく少年。

だが…

少「しょうがないんだ…。」

少年の呟き。

少「騙され続けてるのに…信用する事なんて出来ない…。」

少「俺も…普通に生きて、普通に暮らしたかった。」

我「…！」

我狼が少年を見ると今まで見たことの無い寂しそうな顔。

少「俺…昔からずっとそうなんだ…。」

少「ずっと欲しかった物や…やっとてにいれた物を…すぐに無くしちゃうんだ。」

少「記憶も…ペンダントも…」

少年の顔には微笑み。

哀しい…哀しい…

微笑み。

我「お前…記憶が無いのか…。」

少「…ああ。」

少「俺…力が無いから…何も持っていない方が…無くす物がない方が…楽なんだ。」

我「…ならば。」

少「…？」

我狼の呟きにも似た言葉に顔をあげる少年。

我「強くなれ。」

我「大切な物があるのなら…。」

我「逃げているだけでは…奪われるだけだ。」

そう言って突き出した我狼の手の中には…

少「…これ…！」

少年のペンダント。

我「闘うことで、取り戻せる物もある。」

少「…！！」

少年の表情に変化が表れる。

驚きと歓喜。

少「教えてくれ…」

我「？」

少「なんで…あんたはそんなに強いんだ…？」

少年の問いに我狼は…

我「俺は…」

我「俺は…強くなど…無い…。」

我「俺より…弱い奴は…いないだろう。」

我「お前はまだ取り戻せるが…俺はもう…取り戻せない。」

失った左目も…失った心の強さも取り戻せない事は…我狼が1番知っていた。

少「そんなの…。
辛くないのか…？
悲しく…ないのか…？支えて欲しく…ならないのか…？」

少年の声が震えている。

そんな少年に我狼は…

我「辛さ…悲しみ…か。」

我「そんな物…とっくに捨てた…。」

我「それに…支えてもらうなど…

そんな資格…俺には無い。」

今まで沢山の物を奪ってきた。

何をやってもそれは…くつがえせない事だった。

少「そんな事言うなよ！！」

我「！」

少年の怒声。

少年を見ると瞳には涙が溜まっていた。

少「俺は！あんたに助けてもらったんだ！！それなのに、なんであんたがそんなに苦しむ必要があるんだよ！！」

少年の瞳から涙がこぼれ落ちる。

我狼は戸惑いを隠せなかった。

何故…

何故、涙する…

何故、俺にそこまで尽くせる…

何故…？

少「あんたが苦しみを隠すっていうなら、俺は苦しみごとあんたを

支え続ける！！」

少「それでいいだろ！？」

少年の真っ直ぐな瞳に我狼は負けた。

我「…好きにしろ。」

休憩♪（前書き）

ぐふ…前回の更新でギャグ不足で死にそう…です。

と言うことで今回はギャグです！！

ごゆっくりと

（＾ｏ＾）／

ｂｙ作者

休憩♪

翌日、村を出ようとする二人。

だが…

我「…おい。」

少「？」

再び村の門の前に居る2人。

我狼が少年に声をかける。

少「何だよ？」

我「本当に…俺についていく気か…？」

我「俺は日陰者…命を狙われている身だ。」

我「俺の近くにいる以上、命の保証は無い。」

少年はクスと笑って言った。

少「俺も元は日陰者だしかりた恩は返す。だから…引き返す気は無い。」

我「…そうか。」

我「なら、せめて性別と名前くらいはっきりさせろ。」

少「Σ！！」

我狼の言葉にびくっとする少年。

ひきつった笑みで我狼を見る。

少「バレt…我「当たり前だ。」

少「……。」

我「口調もおかしいし、体も男にしては細すぎだ。」

少「～…。」

とうとう観念したのか少年（？）は今まで取ることのなかったフードを取る。

パサッ…フードを取ると長い金色のポニーテール。

我「…やはり、女だったか…。」

少女はうなづく。

我狼は1つため息をつき、聞く。

我「名は？」

リ「リオン…です。」

いつの間にか敬語になったリオン。

我「なぜ男装など馬鹿げた事をやっていた…。」

リ「馬鹿っ…！？」

リ「…女ってだけで色んな不便があるんですよ…。」

不満そうに言うリオン。

我「確かに…な。」

我「なら、女である事を逆手にとればいい。」

リ「え゛…」

少し笑った我狼が凄く怖かったのはここだけの話。

休憩♪（後書き）

はい！

久しぶりのギャグでした！

少年…いやリオンの正体分かりましたね　（笑）

ていうか我狼さん黒い！！

まあ次回もお楽しみに（笑）

ｂｙ作者

遭遇

あれから一年の月日が流れていた。

ガン！

バキン！

ガキャン！

刃と刃が混じりあう音がする。

その音を奏でているのは2人の人物。

銀髪の男と金髪青眼の少女。

男は太刀を使い、少女は双剣を使っている。

そして驚くべき事に男の方は目をつぶっている。

男の名は我狼。

少女の名はリオン。

リオンは必死に打ち込むが我狼は目をつぶったまま全て太刀で防いでいる。

リ「はあああ！」

リオンが2つの刀で我狼に渾身の一撃を放つ。

だが…

我「甘い！！」

リ「…っ？」

バギャン！

巨大な太刀が2つの刀を弾き飛ばす。

それと同時にリオンの体も吹き飛ぶ。

ドシャ！

リオンの体が地面に叩きつけられる。

リ「ぐ…」

だがリオンの眼はまだ死んでいない。

リ「まだ…！」

リオンは体を起こし、我狼に立ち向かおうとするが…

首筋に感じる刃の感覚。

リ「……！」

我「……。」

我狼の太刀がリオンの首筋をとらえていた。

リ「ま…参りました…！！」リ「……。」

ぐで～っと倒れているリオン。

リ「先生。」

我「…なんだ。」

リ「先生は手加減という物を知らないんですか？」

我「十分していたつもりだが。」

リ「…もういいです。」

我「なら早く準備をしろ。おいていくぞ。」

リ「あ！ちょっと先生！待って下さい！！」

2人が出会ってから一年たっていた。

我狼はリオンに『自分の身ぐらい自分で守れ』と双剣を教え、リオンは我狼を『先生』と呼ぶ様になっていた。

ちなみに先ほどのは手合わせで、我狼は手加減をしているがリオンにとってはとてつもない負担である。

リ「次はどこに向かうんですか？」
旅を続ける身なので次の目的地を問うリオン。
我「最近太刀の切れ味が悪い…。」
渋い顔の我狼。
リ「じゃあ、どこかの街の鍛冶屋に？」
リオンが聞くが…
我「いや。どうやらこの太刀は作った者にしか扱えんらしい。」
我狼は首を横に振る。
リ「この太刀を作った人…の所に…？」
我「ああ。」
我狼の言葉にリオンは…
リ「すごい人なんですね」
と言うが、我狼は先ほどよりも渋い顔。
我「確かに…腕はいいが…。」
リ「…先生？」

言葉を濁す我狼にリオンが声をかける。

我「喋り出すと誰よりもうるさい奴だ。」

リ「……（汗）」

我狼のすごい渋い表情と言葉に何も言えないリオンだった。我&リ

「！」

何かの気配を感じ取った我狼とリオン

リ「なにか…」

我「来る…！」

？「ピギャアアアアア！！」

？「グガアアアアア！！」

突然奇声をあげ、現れたのは…

我「合成獣…！？」

リ「それって…！？」

リ「この化け物！？」

リオンの視線の先に、一体目は、鷹の胴体に蛇の尻尾、とかげとも

ワニとも言えない頭を持った獣。

二体目は、馬の形をとどめているものの、足が六本、額には角を持っている。
そして二体共…

我「でかい…！」
とてつもなく巨大だった。

そしてその二匹は我狼とリオンに襲いかかった。

遭遇（後書き）

はい。

一年後です！

今までの話過去になっちゃいました（笑）

今回は少しギャグ入れて見たんですが…分かりますかね（汗）

我狼さん…目をつぶったままとか…ｗｗ

次回もお楽しみに

（＾Ｏ＾）／~~

ｂｙ作者

爪と剣（前書き）

相変わらずの作者です（＾ｏ＾）／

合成獣とか作者の妄想の塊です！！

全く馬鹿馬鹿しい小説ですが…

これからもよろしくお願いしますｍ（＿＿）ｍ

ｂｙ作者

爪と剣

我「おおおお！！」

我狼が相手にしているのは鷹の様な合成獣。

合成獣の胴に一撃を放とうとするが…

合「ピギアアアア！！」

我「ぐ…おっ…！」

その合成獣は羽を羽ばたかせ、強風をおこし我狼を吹き飛ばした。

ズダンッ！

我「かはっ…！」

我狼の体が大木に叩きつけられる。

ヒュッ！

我「！」

ズガン！

我「ぐっ！」

間髪入れず太い尾での攻撃を太刀で防ぐ。

だが…バチン！

カラーン！

我「しまった…！」

尾の攻撃を防いだ我狼だったがその衝撃で太刀が手から引き離される。

合「ギィィィィ！！」

我「くっ…！」

ドギャン！

鷹の足で踏みつけられそうになる所をなんとかかわす。

我（デカイだけ力はあるが…）

我（その分動きが遅い！！）

太刀は我狼がいる場所より離れた所にあるため、取りに行く事は不可能。

我狼が立ち上がり構えたのは…

我「あまり使い慣れてはいないが…」

太刀よりも幾分かは小さいが立派な大剣。再び合成獣が我狼に襲い

かかる。

だが…

我「そこだ！」

我狼が一瞬の隙をつき、合成獣の両翼を斬る。

だが…

合「ギィィィィ！！」

我「！」

ズダンッ！

我「が…は…！」

合成獣の尾が我狼を捕らえ吹き飛ばした。

かなりの衝撃に立つことの出来ない我狼。

そんな我狼にとどめを刺そうと迫る合成獣。

だが…

我「ふっ…。」

不敵に笑う我狼。

合「！？」

何事かというような表情の合成獣。

我「ここが岩場でなければ俺の負けだったな。」

合「？」

まだ意味が分からない合成獣はしきりに目を見張らせている。

我「まだ分からんのか？」

未だ不敵に笑いながら我狼は言う。

我「お前の様な巨体が動き回ったら不安定な岩場はどうなるか？」

ビシッ！

合「！」

合成獣の足元に亀裂が入る。

そして…

合「ピギョオオオ！！」

合成獣の断末魔が響き渡り、岩場が完全に崩れ、合成獣が岩と共に落ちていく。

そして…

まだきちんとした足場に座り込んでいる銀髪の男が居たのは言うまでもない。

爪と剣（後書き）

はい！

我狼さん勝ちましたね（笑）

そしてまさかの第二の武器大剣。

ちなみに我狼、刀類なら何でも使えます（笑）

次回はリオンＶＳ馬型合成獣です。

お楽しみに（＾ｏ＾）／

ｂｙ作者

狐と馬（前書き）

お待たせしました！
リオンＶＳ馬型合成獣です！
どうなりますかね～？（笑）

ま、お楽しみ下さい！

ｂｙ作者

狐と馬

我狼が鷹型の合成獣と戦っていた頃…

リオンもまた、合成獣と戦っていた。

ズガン！

リ「うっ！」

馬型合成獣の突進の衝撃にうめくリオン。

リ（早い…！）

さすが馬。

動きが速い。

リ（でも…負けられない…！）

リ「たあっ！」

双剣で得意の連発を叩き込もうとするが、素早いスピードで逃げられる。

リ「はあ…はあ…」

気づけばリオンは息があがっている。

合成獣はひづめを鳴らし、突進してくる。

リ「！」

ドガッ！

合成獣の突進を何とか左に飛んでやり過ごすが、合成獣があたった木は真っ二つに折れる。

だが…何かに気づくリオン。

リ（待てよ…？）

リ（あの勢いなら…利用できるんじゃ…？）

などを思っていると

リ「！」

バゴン！

リ「がっ…！」

合成獣がすぐ後ろにいて、その後ろ足でリオンが蹴り飛ばされる。

リ「ぐ…！」

転がるリオン。

だが合成獣は容赦なく襲いかかる。

リ（イチかバチか！）

リ「てぇぇぇい！！」

ドガンッ！

合「！？」

リオンが合成獣の腹を蹴りあげる。

合成獣は突進の勢いを殺せず、崖に転がり落ちていく。

だが…

ガキッ…！

リ「なっ…！？」

あろうことかリオンのフードが合成獣の角に引っ掛かり、リオンもろとも落ちていく。

リ「〜〜ッ！」

必死に手を伸ばすが届かない。

リ（落ちる…ッ！）

崖に落ちるのを覚悟したリオン。だが…。

ガッ！

リ「…ッ！？」

ガシッと体が支えられる。

上を見上げると…

我「世話の焼ける奴だ…。」

リ「先生！？」

我狼が太刀を崖に突き刺し片手でぶら下がり、もう片方の手でリオンを抱えていた。

発覚

合成獣2体を倒した我狼とリオン。

だが…

リ「今の何だったんですか！？」

合成獣の存在すら知らなかったリオンは我狼に問う。

我「知らんのか？」

我狼は一瞬驚いた様な表情をしたあと、合成獣について語り始めた。

我「合成獣とはある生き物と別の生き物を合成…つまり合体させたり、合成はさせなくても身体の遺伝子がおかしくなったりして、身体の様子がかわった獣だ。そして…奴らの最大の特徴は…瞳が紅くなる。」

その言葉にリオンは先ほどの合成獣達を思い出す。

確かに瞳が紅かった。リ「じゃあさっきのは…！」

我「おそらく…鷹と…蛇と…とかげやワニ…爬虫類を合成させた獣と馬の遺伝子を変えたものだろう。」

我狼は落ち着き払った声で言った。

対するリオンは驚きを隠せない。

そして…一言…

リ「合成された獣は…元に戻るんですか…？」

我狼の眼が一瞬…本当に一瞬…見開いた様な気がした。

だがいつもの仏頂面に戻ると…

我「一生…戻る事は無い…。」

リオンが悲しそうにうつむく。

我「…奴らはある機関に創られていると聞いた。」

リオンが弾ける様に顔をあげる。

リ「じゃあ…！」

我「ああ…。

俺はその機関とやらを潰す。」

我「必ずな…！」

リ「…！」

リオンは気づいてしまった。

我狼の眼が憎しみに光った事に…。

リオンは覚悟して聞いた。

リ「先生…。」

我「…何だ。」

我狼は先ほどの憎しみの表情をさっぱり消していつもの無表情になって答えた。

リ「貴方のその左眼と…その機関…何か関係があるんですか…？」

我「！！」

我狼の無表情が壊される。

我「…それを、知ってどうする？」

我狼の声が低くなる怒りを抑えているかの様に。

だがリオンは臆せずに言った。

リ「ずっと…何か理由があると思っていました…。」

リ「私は…！貴方の
1番近くにいる者としてその理由を知りたい！」

我「…！」

リオンはそう言ったが結局関係についての話は我狼の口からされる事は無かった。

発覚（後書き）

ど～も～作者です。
（≧ω≦）b

はい。

我狼さんの過去が次回明らかに…！？

→あ、信用できませんよ♪

てなことでまた次回～（^＿^）／~~

雪原

2体の合成獣と戦い、一夜明けた朝。

我狼の過去についてはリオンは深く聞いて来なかった。

何故かは分からないが我狼自身理由などどうでも良い事だったので放っておいた

だが…

我（…何か、変わるものがあるのか…？）

我（こいつに…リオンに話して何か変わるか…？）

我狼自身に迷いが生まれた。

リ「先生！」

我「！」

我「…どうした？」

弟子の言葉に顔をあげる我狼。

顔をあげると…リ「雪ですよ！雪！！」

満面の雪原。

きゃーきゃー言いながらはしゃぐリオン。

そんな姿を見ると１４歳と言うことも納得できる。

我（それにしても…

『狐』じゃなくて

『犬』なんじゃないのか…？）

確かに。

雪原を駆け回る姿は犬に見えなくもない。

リ「せーんせー！！」

我（Σ！！　尻尾が見える！！）

手をぶんぶんふる弟子に確かに犬尾。

そんな弟子に頭を抱え、声をかける。

我「リオン！行くぞ！！」

えー！と言っている弟子を引きずり道を進む。

リ「こんな北方に鍛冶屋はいるんですか？」

リオンがふと尋ねる。

我「ああ。この地にしか採れない材料があるらしくてな。」

我「そこだ。」

リオンが引きずられながら見ると。

立派な鍛冶屋。

雪原（後書き）

はい！

やっと鍛冶屋です！！

次回は新キャラ登場です！！

百パーギャグになると思います（^＿^；）

ま、お楽しみに～

（^o^）／

by作者

協力者（前書き）

ど～も～

はい！

予告どおり新キャラ登場です！！

前々回予告どおりにいきませんでしたので…（｜・｜；）

新キャラは、いわゆる…暴走キャラです☆

むっちゃギャグです！

まあごゆっくりと

（＾｜＾）ｖ

ｂｙ作者

協力者

全てが銀の世界

それがこの地。

雪がほとんどの音をすいとり、静かな世界。

だが、いつもと違う音。

？「おぉ？」

剣と向き合っていた黒髪長髪の男が口の端を歪ませる。

？「客かいな？」

人懐っこそうな顔がニッと笑う。我「……。」

リ「……。」

リ「先生…？」

我「…何だ。」

リ「入んないんですか？」

ドアの前で止まっている我狼にリオンが声をかける。

我「いや…（汗）」

渋っている我狼。

だが…

ドタバタ！

我「Σ！」

リ「？」

突然人が転がり落ちて来ながら階段を降りる音が聞こえる。

我狼はビクッとし、リオンはひたすら
？マーク

我「リオン、ドアが開いたと同時にドアを蹴り飛ばすぞ。」

リ「はい！？」

我狼の意味の分からない言葉。

我「いいな！？」

リ「え…あ、はい！」

我狼に気圧され、返事をするリオン。

すると…

ガチャンッ！

ドアノブが回った。ドアノブが回り、ドアが開く。

？「我ｒ…我「リオン！！」

リ「はい！！」

ドアを開けた人物が我狼の名を呼ぶ前に我狼とリオンがドアを蹴り閉められなかった。

？「が…我狼～？」

？「酷ないか？いくら何でも酷ないか…！？」

まさかのまさか。

２人の蹴りをたった１人で抑えている。

そのおかげでドアは完全には閉まっていない。

我「お…俺の知り合いに２人分の蹴りをたった１人で抑えるゴリラはいない…！」

？「ゴリラちゃうわ！！」

ちなみにリオンが先ほどから無言なのは抑えるのに精一杯だからなのである。我「変わりないな…」

そう言って我狼はドアから足を離す。

リオンもつられるように離す。

？「そうか？」

蹴りの力が無くなったドアは簡単に開き、中から現れたのは…

？「久しぶりやな！我狼。」

黒髪長髪の男。

我「涼雅」

名は神月　涼雅。

協力者（後書き）

はい！

新キャラの説明しちゃいますね（笑）

神月　涼雅
（かみづき　りょうが）

我狼と同じくらいの身長です。
でも最近抜かれたとか…（笑）

→んなわけあるか！
ｂｙ涼雅

髪型は黒髪に長髪です！

下の方でゆる～くまとめて縛ってます！

瞳の色は黒です。

関西弁使ってるけど本当の出身は秘密ｗｗ

暴走キャラですが…よろしくお願いしますｍ（＿＿）ｍ

すれ違い

涼「ホンマ久しぶりやなぁ…って我狼。」

涼雅の目が点になる。

我「…何だ。」

涼「その子誰や？」

涼雅の視線がリオンに移る。

当の本人は『私？』って顔をしている。

我「こいつは…」

我狼が言い終わる前に…

涼「まさかの隠し子か！！？隠し子なんか！！？」

涼雅が暴走し始めた。

涼「なんなんや！？
わいより年下の癖に勝手に大人の階段昇ってんか！？
わいの知らん所でお前はもう大人になって…！！？」

ゴン！！

涼「げふっ！！？」

そんな暴走星人に我狼が一発。

もちろん鞘に納めたまま。

我「話を勝手に進めるな…。」

めんどくさそうに太刀を背中に背負いながら言う。

とことん苦労人である。

話の張本人のリオンは展開の速い会話についていけていない。

我「こいつは…」涼「なるほどな～」

我狼の説明が終わり、ようやく納得できた様子の涼雅。

涼「わいは涼雅言うんやよろしくな。」

リ「リオン…です。」

互いの名前を言い終わる。

涼「わいは鍛冶師なんやけど本業は大魔術師や～！」

やけにテンションが高い。

そこに我狼が冷たい一言。

我「寝言は寝て言えへっぽこ魔術師。」

涼「Σ！」

結構こたえた様だ。

涼「だ～れがへっぽこ魔術師や。」

眉をよせて我狼に言う。

我「お前以外に誰がいる。」

我狼は涼しい顔。

涼「そのへっぽこ魔術師の作った太刀を使ってんのはどこの誰や！？」

我&リ
「あ。」

涼「？」

涼雅の『太刀』と言う言葉にここに来た理由を思い出した我狼とリオン。涼「うひゃ～。」

涼「よくこんなんなるまで使ったなぁ。」

我狼の太刀を見ると涼雅は点検を行う。

涼「刃ボロボロやんか。」

呆れた顔で我狼に言う。

リ「……（汗）」

我「…一年半使っていればこうなる。」

リオンは困った顔。

我狼は当たり前と言う顔。

涼「お前な…。」

我「何日かかる？1週間くらいかかるか？」

我狼が問うと涼雅はニッと笑い、言った。

涼「大魔術師言うたろ？3日や。」

リ「……。」

リオンはポカンとし、我狼は口の端を歪め。

我「助かる。」

そう言った。涼雅が太刀の修理を始めて2日たった。

リ「涼雅さん！」

涼「お！リオンか！」

リオンが涼雅にかけよる。

リオンの手には沢山の工具。

リ「このセットで良かったんですよね？」

涼「おう！ありがとうな。」

どうやら涼雅が工具を持ってくる様に頼んだらしい。

涼雅は工具を受けとると、すぐ後ろにあったレバーに手をかけ、ひいた。

ガコン

という音と共にリオンと涼雅の左横にあった釜が開く。

中は当然灼熱の焔。

リ「Σ！？」

涼「ぅあっちち！」

リオンはほぼ反射的という様に右に跳ぶが、開けた本人さえ熱がっている。

リ「大きい釜ですね…」

リオンが感嘆の声をあげる。

涼「そうやろ？これを使った作業が1番重要やからなぁ。」

そういって我狼の太刀を持ち上げる。

そのまま焔の中に太刀を入れる。

涼「ふぃー。」

熱さに流れる汗を拭う涼雅

リ「集中力がいる作業ですね…」

そんな涼雅に言ったリオン。

実際、弁舌な涼雅が作業を行ってる時は一言も喋らなくなる。

涼「まあそやなぁ。」

特に苦にもしていないというように返す涼雅。

涼「おっと。」

太刀を釜の中から取り出す。

そして先ほどリオンが持ってきた工具で叩き始める。

カンカンカンその音が耳に心地よく響く。

リ「…涼雅さん。」

涼「んー？」

今を逃したらもう聞けない気がして声をかけたリオン。
涼雅は目は太刀から離さずにいるもののリオンの話をきちんと聞いており、相づちを返す。
リ「先生は…私を信頼してくれて無いんでしょうか…？」
涼雅が驚いて顔をあげるとそこには寂しそうなリオンの顔。
リ「何も喋ってくれないんです…。」
リ「いつもそうなんです。」
リ「辛いはずなのに…寂しいはずなのに…何も…私に気づかれない様に…自分の中に溜め込んでいるんです…。あの人は。」
なるほど。見事なすれ違いだ。
そんな事を思いながらリオンの話を聞いている。
涼「リオン。」
名を呼ぶと顔をあげる少女。
まだ幼い。
涼「俺の知ってる我狼はな、ギリギリまで無茶して倒れる様な奴なんや。」
涼「何も喋らんのはリオンの事を信じてないからじゃあ無いんや。」
涼「信じてなければ、傍には置いて無いとおもう。」

涼「あいつは言葉で上手く語れない奴やからな。もうちょっと待ってやってくれや。」

クシャクシャと頭を撫でてやる。

手を離した頃にはリオンの寂しそうな顔は無かった。

すれ違い（後書き）

久しぶりの更新すいません。

風邪をこじらせてしまった作者です…。

ちょいと今回は長めに頑張ってみました！

てか涼雅さん…

まさかの三十路！？

我狼さんより年上はその可能性が…！！

てか隠し子て…（笑）

やりたい事は全てやった作者です。

ごめんなさい。↑遅い

次回は我狼と涼雅のシリアス会話…ですかね？

まあお楽しみに。

ｂｙ作者

訳

涼雅はリオンと話が終わると、我狼のもとに向かった。

涼「我狼。」

我「…涼雅か。」

我狼は窓の前に立ち、外を見ていた。

声をかけると気づいていたのかすぐに振り向く。

涼雅は我狼の傍にあった机に寄りかかる。

涼「お前は俺に変わってないって言うたよな。」

我「ああ。」

目をつむりながら話を聞いていた我狼はうなづく。

涼「お前は…変わったな。」

我「…？」

我狼が眉をよせる。

涼「いっつも1人。一匹狼だったお前があの子を傍に置いた。」

金髪を揺らすリオンが頭をかすめる。涼「他人に心を開いた。それ

だけでお前は十分変わったと思うぞ。」

涼雅の言葉に我狼の隻眼が開く。

そして言った。

我「心を…開いた、か…。」

我「否定は…出来んな。」

窓の外の白と銀の世界を見ながら呟く。

少なくともリオンに出会う前は他人に後ろをとられる事は無かった。

苦笑しながら続ける。

我「此処は良いな。」

我「色が少ないし、何より…」

我「…静かだ。」

我狼は街の中の様にうるさい所より此処のような静かな所を好んでいた。

涼「…そうか」

涼「お前が自分の過去を言えないのは…あの子が…リオンが…」

涼「心無し優奈に似てるからやろ？」

沈黙が部屋を満たす。

その沈黙を破ったのは我狼。

我「…かもしれんな。」

無表情を崩さすに我狼は言った。

我「だが…優奈は、
もう死んだ。」

涼「……。」

部屋を出る我狼の背中が寂しそうに見えた。

そんな我狼に涼雅は何も言えなかった。

訳（後書き）

今回はシリアスでした！

てか涼雅さんの関西弁無茶苦茶（笑）

誰かー！関西弁教えてくださぁぁぁい！！

襲撃

涼「おし！！」

涼雅の鍛冶屋に着いてから3日。

遂に我狼の太刀が修理された。

リ「傷が1つも無い…」

感心しながら太刀を見つめ、リオンが呟く。

涼「やろ？我狼を呼びに行くで！」

リ「はい！」

我狼を呼びに行くため、部屋を出ようとしたリオンと涼雅だが…

リ「！」

リオンが何かに気づく。

涼「？」

リオンの様子に気づいた涼雅。

涼「どうした？」

リ「何か…高速でこちらに向かってきています…。」

涼「なに！？」

我狼のおかげでリオンも少し気配を探れるようになっていた。

リオンは続ける

リ「全部で２つの気配…一つは獣…？もう１つは…」

リ「！？」

涼「ど…どうした！？」

リオンの様子に驚く涼雅。

涼「なんや！？」

涼雅が問うと、リオンは…

リ「これは…人…？」

リ「ま…まずいです！こちらに…突っ込んできます！！」

リオンの叫びと共に

ドガン！！

二人のいた部屋が潰れた。ドガン！！

我「！？」

こちらは我狼。

リオンと同じく気配を感じとり、二人が居る部屋に向かおうとした我狼をかなりの衝撃が襲った。

我「……。」

衝撃がおさまるのを待つ。

しばらく衝撃は長引いたがやっとおさまった。

それと同時にかけだす。

ガチャガチャ！

だが部屋のドアが開かない。

我「チッ…！」

小さく舌打ちをしてドアを蹴破る。

我「リオン！涼雅！」

二人の名を呼ぶが…

？「潰れちゃいましたよ。二人共。」

我「！」

合「グルルル…」

二人の変わりに中年の男と牛型合成獣がいた。

我「貴様…。」

？「私はロント・ビクセン。」

我「…ここに、何の様だ。」

ロ「簡単です。私達の創った合成獣がいとも簡単に倒されている。」

ロ「君は危険なんですよ。

夜月　我狼君。」

我「貴様は何故俺の名を知っている！？」

ロ「上からの情報でね。君を殺せば金が手に入る。」

ロントと言う男の口が弧を作った。

パチン！

ロントが指を鳴らすと、合成獣が突っ込んでくる。

我「チッ！」

我狼が横に跳ぶと、合成獣は向きを変え、再び突っ込んでくる。ロ

「ははは！愉快ですねぇ！」

ロ「人を殺して金が貰えるなんていい仕事ですよ！全く！！」

遂に合成獣が我狼を捕らえた。

ドギャン！

我「がっ…！」

我狼が合成獣の突進によって派手に吹き飛ぶ。

ロ「私もね…魔術師なんですよ」

ロ「だから、動きも封じられるんですよ。」

ピキピキ！

我「なっ…！？」

ロントが手を動かすと我狼の片腕両脚が氷によって封じられる。

我「くっ…！」

腕と脚を動かすが氷は取れない。

そしてどこから取り出したのかナイフを持つロントの姿も。

ロ「私の様な高位の魔術師に殺される事を感謝して下さい。」

ナイフが我狼に降り下ろされ…無かった。涼「おっさん、アンタが

高位の魔術師なんてあり得ん。」

我&ロ
「！？」

そこには長く、黒い髪。

リ「先生！」

涼雅が現れたと共にリオンも現れた。

我「リオンか！」

リ「先生…脚と腕が…！」

我「厄介なのに引っかかってな。」

我狼は苦笑しながら答える。

涼「我狼！」

ポイッと投げられたのは新品同様の太刀。

涼「んじゃま、反撃と行きますか！！」

襲撃（後書き）

涼雅さん、でしゃばりましたね（笑）

次は…
魔術師ＶＳ魔術師
合成獣ＶＳ師弟

てな感じですかね？

最近更新出来なくてすみません。

これからは更新出来ると思うので、よろしくお願いします

ｍ（＿＿）ｍ

でわでわ
ｂｙ作者

魔術師VS魔術師

リ「先生…涼雅さんは…」

我「あいつは魔術師だがそこそこ武術も使える…。あいつの専門は…」

涼雅が武器を構える。

我「薙刀だ。」

涼雅の手には長い薙刀。

涼「我狼！」

我「！」

涼雅が我狼に呼びかける。

涼「こっちのおっさんは任せとけ！その変わり、そっちの合成獣は頼むで！」

我「ああ！」

ー反撃開始ーロ「そこ！」

涼「いっ！？」

ドゴォン！！

ロントの声と共に涼雅の足元が崩れる。

涼「あっぶな…。」

だが涼雅は崩れる直前に足場を変えていた。

ロ「ちょこまかと…！」

涼「甘いでおっさん！！」

ロ「！」

ビッ！

涼雅が素早く薙刀を突き出すがロントの袖をかすっただけだった。

涼「げっ…！」

ロ「……。」

かわされると思っていなかった涼雅は若干焦る。

対するロントはニヤリと笑った。

ロ「捕らえましたよ！！」

涼「まずっ…！」

ズガガッ！

涼雅がロントから離れる前に無数の氷柱が涼雅を貫いた。

涼「…！」

声もあげられずに吹き飛ぶ涼雅。

だが武器を盾にしたのか致命傷は避けていた。

涼「ぐ…。」

ロ「部屋を潰した時にまだ生きていたのには少し驚きましたが…大方防御魔法でも使ったのでしょう…。」

確かに涼雅は防御魔法を使い、自分とリオンの身を守ったのだった。

ロ「分かりましたか？これが君の様な下位の魔術師と私の様な高位の魔術師の違いです。」

膝まづく涼雅に言う。

涼雅は…

涼「ちゃうな。」

ロ「！？」

一言いい、ゆらりと起き上がる。

涼「ただボコボコ氷柱とか出すだけじゃ魔術師とは言えん。」

涼「あんたは二流や。」

涼雅の挑発するような言葉にロントが怒る。

ロ「うるさいな…このまま…殺してやる…！！」

涼「あんたに本当の魔法…見してやる。」

ロントが何か魔法を使う前に涼雅が一言。

涼「ニトロ。」

ロントの魔法とは比べられないほどの爆発が辺りを満たした。

涼「ち～っとやり過ぎたか…。」

涼雅の呟きは空に消えた。

魔術師ＶＳ魔術師（後書き）

涼雅さんの圧勝～！！

魔法使うと最強ですねあの人（笑）

実は涼雅の武術と我狼の武術は同じ人に教わったという裏設定が…！（笑）

次回は合成獣ＶＳ師弟です！

我狼さん大丈夫ですかね～？

合成獣VS師弟

ビュオオオ！

我（…吹雪いてきたな。）

こちらは我狼とリオン。

辺りは吹雪き始め、視界も危うい。

我（早めに終らさなければ…）

白い息を吐きながら我狼は思う。

人間の体にとってこの寒さは我狼とリオンの体力を簡単に奪う。

リ「せ…先生ぇぇぇ！」

リオンの叫び。

我「！？」

それと共にリオンがぶっ飛んでくる。

我「なにっ！？」

動きを封じられた我狼はリオンを受け止めるしか無い。

ガッ！

さすがと言うべきか、片手でリオンを受け止める。

我「何をやっている！？」

リ「ふ…ふき飛ばされました…。（汗）」

体を固定されていて分からなかったが、子供がこの吹雪の中立っているのはそうとうキツい。

特にリオンの様な少女は。

リ「あぅ～（泣）」

結構ショックだった様だ。

我「し…しっかりしろ！」

我狼は内心焦る。

自分が動けない今、頼れるのはリオン只1人。

リオンが折れたら絶対に2人で仲良く死ぬ。我「！」

そして我狼は気づいた。

合成獣が自分たちを見つけた事を。

合「グオオオ！」

我「くそっ！」

悪態を吐き、
リオンを自分の背の後ろにかばいながら氷に固定されていない右腕で襲いかかる合成獣の足を太刀で斬る。

合「ゴオオオ！」

足は斬ったがまだ繋がっている為、動ける合成獣は吹雪の中に消えた。我（姿を消したか…。）

非常に不利な状況になったが、まだ希望は消えていなかった。

我「リオン。」

自分の背の後ろにいる弟子に呼びかける

リ「は…はい！」

返事をしたリオンにとりあえず安堵。

我「よく聞け。一度しか言わない。」
動けない我狼の横に移動したリオンは頷く。

我「俺がーーーなる。そのーにーーはーーーーせ。」

我狼がリオンに耳打ちする。

リオンは最初驚いた様だが最終的には頷いた。

我「出来るな？」

我狼が念のため聞くと、

リ「はい！」

リオンの返事が聞こえた。吹雪は更に激しくなり、我狼の体を固定する氷は取れる気配が無い。

我狼は全神経を耳に集中させた。

我（視界が厳しいのでは…耳に頼るしか無いな…。）

頼りないが仕方がない。

我（何処だ…？）

ドドガッ！

我「右か！」

地鳴りの様な足音が右側から聞こえた。

我「おおお！」

合「グガアアア！！」

我狼の太刀が確実に合成獣の前足を捕らえた。

だが…

前足を失ってもまだ合成獣は我狼に角で襲いかかる。

動けない我狼は串刺しになる。筈だが…

リ「はあああ！！」

ドシッ！

合「グギャアアア！！」

リオンが何処からともなく現れ、合成獣に飛びかかり、合成獣の左目を剣で突き刺した。

左目と前足を失った合成獣は悲鳴をあげ、地に伏した。

合成獣VS師弟（後書き）

はい！

こちらも勝ちました～！

今回ちょっと我狼さんがピンチでしたがリオンが何とかしましたね（笑）

（ギャグも入れてみました～（笑））↑

次回は師弟と魔術師が合流します！

お楽しみに～♪

by作者

合流

リ「と…取れない…！」

我「くそっ…！」

こちらは我狼とリオン。

すっかり晴れた空の下で我狼についた氷を取るため悪戦苦闘する二人。

そんな二人に…

ドカァン！

リ「くあっ！」

我「ぬあっ！」

突然の爆発が起き、二人を吹き飛ばす。当然我狼についた氷も壊れた。

リ「あいたたた…。」

雪を頭に乗せながらリオンがうめく。

我（この爆発…魔法か…？）

対する我狼は黙ったまま考え事をしている。

そこに能天気な声。

涼「無事かー？
我狼！リオン！」

我&リ
「！」

我「…涼雅か」

涼「おう！」

我狼が低い声で訪ねると返事をした。

雪の上でも転がったのか長い髪の毛が少し濡れていた。

リオンは1人悩んでいた。

リ（吹き飛ばされてから…先生の殺気がすごい…（汗））

確かに。

我狼の後ろからオーラみたいのが出てる。涼「いやぁ、ビックリしたか？」

涼「氷ががっちりついてたからなぁ。
こうするしかなかったんや。」

我「……。」

ゴンッ！

涼「いだぁ！？」

必殺鞘叩き。

言葉の通り鞘に入れた太刀で涼雅の頭に一発。

しかも無言。

涼「いだだだ！
何するんや我狼！！」

我「うるさい。もう少しまともな助け方出来んのか」

涙声の涼雅。

我狼はどこ吹く風。

涼「あのなぁ！助けてもらって何やその態度！」

反論する涼雅。

我「さっきのは助けてもらったんじゃない。吹き飛ばされただけだ。
」

軽くかわす我狼。

何も言えなくなり、泣く泣く我狼に反論するのを諦めた涼雅

涼「リオン、無事か？」

リ「あ、はい。」

我狼に反論を諦めた涼雅はリオンの無事を確認。

涼「よかったなぁ。」

涼「我狼の事や、無茶な指示出したんちゃうか？」

リ「ハハハ…」

涼雅の言葉に苦笑いをしながらリオンは言う。

リ「さすがに『俺がおとりになる。そのうちにお前は奴を倒せ』と言われた時は驚きましたけどね」

苦笑を続けながらのリオンの言葉。

涼「昔っからそういう奴やからなぁ。」

同情もかけての涼雅の言葉。

空が綺麗に青かった。

合流（後書き）

はい！

三人合流しました！

我狼と涼雅の付き合いはかなり長いです（笑）

次回は涼雅の鍛冶屋を二人が旅立ちます。

お楽しみに～

ｂｙ作者

一時の別れ

我狼達が合成獣と戦った翌日、我狼とリオンは涼雅の鍛冶屋を去ろうとしていた。

涼「なんや、もう行くんか。」

我「ああ。東部の方から良からぬ情報が入ってな。」

渋い顔で言う我狼。

涼「良からぬ？」

そんな我狼に首をかしげる涼雅。

リ「東部の村で突然村人が全員いなくなったっていう噂があるんです。」

我狼の代わりに説明するリオン。リオンの言葉に眉をひそめる涼雅。

涼「全員…やと…？」

リ「ええ。しかも一夜にして。」

目を見開く涼雅。

そして一言

涼「ありえへん…。」

我「それが実際に起きているか確かめに行く。」

我狼が言う。

涼「無理すんな。いつでも帰ってこいや。」

涼雅は返す。

我「ああ。行ってくる。」

リ「涼雅さん、お世話になりました。」

涼「おう！リオンみたいな子ならいつでも大歓迎や！」

そう笑いながら言う涼雅。

だが急に真剣な顔になりリオンに聞こえないように我狼に呼び掛ける。

涼「我狼。」

我「？」

我「何だ？」

ぐいっと我狼の腕を引っ張り言った。　涼「…あの子だけは…」

涼「リオンだけはちゃんと護ってやるんやぞ。」

涼雅の言葉に一瞬目を見開いた我狼だったが…

我「…最初からそのつもりだ。」

我狼の言葉に安心したのか涼雅はいつもの様に笑い、

涼「…さよか！」

涼「んじゃ、行ってこい！！」

ドン！と我狼とリオンの背中を押した。

それにリオンは笑い、我狼は苦笑いで答えた

我「行ってくる。」

リ「行ってきます！」

一時の別れ（後書き）

涼雅さんと別れちゃいましたね～

個人的に好きなキャラなんですが…

ま、また登場させますけどね！（笑）

次回は東部の村の話です！！

お楽しみに～♪

ｂｙ作者

対面

涼雅と別れ、東部に向かい目的の村に着いた我狼とリオン。

そこには…

リ「人が…いる？」

我「噂はデマだったか…」

人で賑わう村だった。

リ「でもそれらしき噂はこの村でもあるかもしれませんよ？」

我「…そうかもしれんな。」

リオンの言葉にうなづく我狼。

我「2手に別れて聞き込みをするか。」

リ「はい！」

こうして我狼とリオンは2手に別れた。〜リオン視点〜

リ「おかしいな…」

さっきから話しかけてるけど村人が全員無反応だ…。

リ「あの…」

村「……。」

無視してるってより、意識が無いって感じだけど…

リ「先生と合流しようかな…」

先生は確かあっちにいったはず…

ドガン！

リ「なっ！？」

？「ぐあっ！」

誰か吹き飛ばされてきた！？

しかも銀髪…！

リ「先生！？」

我「くっ…！」～我狼視点～

我「…何だ？」

先ほどからでかい何かの気配がする…

我「人か…？いや…獣…？」

何にせよ気味の悪い気配だな…。

…俺が言える事ではないが。

我「……。」

ここの村人は何をしても全員無反応…。

まだ遠いがこの気味の悪い気配といい…

我「この村は、おかしい…。」

？「あ゛…あ゛…」

我「！」

何だ！？

村人…？

いや違う！

さっきから感じていた気配と似ている！

我「貴様…人間じゃないな…」

太刀を構えながら聞く。

村人は…

？「ヴぁあぁあ！！！」

メキメキメキ！

我「な…に…？」

変形…しただと！？

我「熊に…！？」

まさか合成獣…！？

我「成功…したのか…」

人間との合成に…

合「ゴオオオ！！」

我「！！」

ドガン！

しまった…

足場をやられた…

合「グォォォ！！」

避けられない…！！

我「くそっ！」

太刀で威力を削げるか…！？

ズガン！！

我「ぐっ！！」

一撃が重い…！！

吹き飛ばされる…！

ドガン！

我「ぐあっ！」

リ「先生！？」

リオンか…！

だがまずはこの状況を何とかしなければ…！

我「くっ…！」

対面（後書き）

今回は視点を変えてみました。

ま、次回から元通りですけどね（笑）

何か我狼さん合成獣について詳しいですね…。

まあ理由がありますけどまだ秘密。

次回は合成獣と戦います。

お楽しみに～

ｂｙ作者

退避

リ「先生！」

我狼に駆け寄るリオン。

我狼は先ほどの攻撃で腕からかなりの出血をしていた。

我「リオン…話は後だ。とりあえず村から一度離れるぞ。」

腕を抑えながら言う我狼。

リ「村から…！？」

我狼の言葉に少し驚くリオン。

我「ああ。いいな？」

リ「は、はい！」

我狼の言葉に圧され返事をするリオン。

合成獣に気付かれない様に村から出る事のできた我狼とリオン。リ「気付かれてないみたいですね…」

ここは村から少し離れた林。

我「ああ。」

我狼は肩の傷の応急処置をしていた。
リオンが我狼の近くに寄ると我狼は、
我「あの村の村人は全員合成獣だ。」
リ「なっ！？」
我狼の言葉に驚くリオン。
我「村人は全員無反応だっただろう？
合成獣は感情が無い。」
リ「確かに…」
リ「だから村から離れたんですね」
リオンが言うと我狼はうなづく。
我「村の中にいれば殺してくれと言う様な物だからな」
腕にキツく布を巻きながら言う。
そして立ち上がり太刀を背負う。
我「村の中にでかい気配が１つあった。
そいつが親玉だ。」
我「そいつを倒せばこの村の合成獣も散り散りになるだろう。」

そう言って村の方に歩き出す。

リ「私も行きます！」

後を追うようにリオンも走り出した。

アンケート結果発表！！

怜「白銀の狼と金色の雌狐をご覧になって下さっている皆さん！どうも。作者の怜です！」

我「…おい。」

リ「……（汗）」

怜「何ですか？我狼さん。」

我「何故作者である貴様がここにいる？しかも何故俺達と会話ができる？」

怜「会話の件はまあいいじゃないですか！（汗）」

リ「…答えになってない気が…」

我「全くだ。」

怜「う…（汗）」

怜「ま、まあ！何故作者である私がここにいるかと言うと！」

我&リ
「言うと？」

涼「アンケートの結果発表やからやろ？」

怜&我&リ
「Σ!!?」

怜「く…曲者!?」

我「何時代のつもりだお前は…（汗）」

リ「涼雅さん…いつからここに…?」

涼「さっきや!何かおもしろそうな感じやったからな。」

我「で、どうなんだ作者。」

怜「まあ涼雅さんの言うとおりですね。」

涼「ほんじゃ結果が出たんやな?」

怜「はい。じゃあ発表です!」山口さんの意見
『あまりこの作品にはギャグは合わない様な気がします。ギャグは短編で書いた方がいいかも。』

リ「確かにそうですね…」

涼「やな。」

我「この小説はシリアス中心なんだろう?」

怜「はい。基本的にシリアスですね～。」

怜「作者としては番外編でギャグも考えていますけどね～」

我「では次だ。」怜「次の意見！」

『……。』

リ「…あれ？」

涼「なんやなんや？」

我「まさか…」

リ&我&涼
「意見が無い？」

怜「…そうですよ。（遠い目）」

リ「う…わ。」

涼「あちゃ～」

我「いかに人気が無いか分かるな。」

怜「う…グス。」

怜「わかってるよぉぉぉぉ（泣）」

怜「感想が一件だけってどんだけ人気が無いかわかってるよぉ…（泣）」

リ「頑張って更新続けていればその内に感想も増えるでしょう…」

リ「ねえ。先生。涼雅さん」

我「ああ。」

涼「そうやなぁ。」

リ「作者が泣いちゃったんでお開きにしましょうか。」

我「そうだな。」

リ「このアンケートにご協力してくれた山口さん、本当にありがとうございました。」

涼「山口さんの意見にそって作者はこの作品でのギャグは抑えめにする言うとるで。」

我「この作品を読んでくれている人。感想板に感想を書いてくれると作者はスゴく励まされる。よかったら感想を書いてやってくれ。」

リ&我&涼

「これからもこの作品をよろしく。」

怜「お願いします…（泣）」

アンケート結果発表！！（後書き）

題名の通りでしたね。

山口さんの意見にしたがってギャグ性を少なくしていく予定です。

会話ばかりですいません…

まあ次回はおもいっきりシリアスです

お楽しみに～

突破

再び村に向かった我狼とリオン。

我「雑魚をいくら倒しても無駄だな…」

我狼が村の様子を伺いながら言う

リ「じゃあ…」

我「一気に突破する。俺が合図をしたら走れ。」

リ「は…はい！」

我狼はじっと村の合成獣の様子を伺う。

だが…

我「！」

リ「！？」

合「ゴガアアア！！」

背後に合成獣。

我「走るぞ！リオン！！」

リ「はい！」

ダダダ！

走り出す我狼とリオン。

バン！

リ「はあ…はあ…」

我「……。」

たまらず走った先にあった小屋の中に転がりこむ。

我「気配が近い…」

リ「これは…」

我「獣と人が混ざったような気配だな。」

我狼の険しい表情。

リ「…かなり、大きい…？」

我「ああ。親玉だからな。」

そう言って少しだけ開いた扉から様子伺う

合成獣は今の所見えない。

我「よし。行くぞ。」

リ「はい。」

再び駆け出した二人。我「…近いな。」

リ「はい…でも姿がみえませんね。」

我「……。」

ここは村の中枢部。

我（首筋がピリピリする…）

リ「先生！」

我「！」

リオンの言葉で我に帰る。

我「何だ？」

リ「これは…」

我「…祠か」

ボロボロの祠。

リ「村人が大切にしていたんでしょうか…？でも…」

リ「爪痕が…」

祠の傷のほとんどは爪痕。

我「おそらく…」

我「合成獣の仕業だろう。」

リ「被害がこんな所にまで…」

悲しそうなリオン。

我（なんだ…？何かが引っ掛かる…）

我（ここの村の人口はあんなに少なくないはずだ…）

村の中には確かに人の人数が少なかった。

我（では他の村人はどこに…？）

我「……む。」

我狼の見えない左目が疼いた。リ「先生！！」

我「！！」

リオンの叫び声。

リオンの視線の先には…

合「グルルル…」

我「合成獣…！！」

リ「熊…！？いや…！」

白熊の合成獣だった。

突破（後書き）

ども。

作者の怜です。

山口さんまたまた感想書き込みありがとうございました。

山口さんにはいつも助けられてる気がします…

感謝感謝ですね。

m（＿＿）m

物語の方は合成獣をただの熊じゃなく白熊にしたのは…

白熊って凶暴そうじゃないですか（笑）

熊より白熊かなぁ…？って思ったんで、親玉は白熊にしてみました。

次回は白熊さんと戦います。

お楽しみに〜

ｂｙ作者

力と技

リ「白熊…！？」

我「厄介だな…」

目の前の巨大な白熊型合成獣に驚く2人

我「速攻で倒すぞ！」

リ「はい！」

太刀と双剣を構え、突っ込む我狼とリオン。

我「そこだ！」

我狼が合成獣の脳天に向かって太刀を降り下ろすが…

ガキン！

我「…っ！？」

合成獣の爪が邪魔をする。

そしてカウンターという様に鋭い爪が我狼に襲いかかる

我狼は攻撃が防がれた為、避ける事や防ぐ事が出来ない。

我「くっ…！」

直撃するのを覚悟した我狼だが…

タタタン！

軽快な足音と共に我狼の前に現れた金髪。

我「！？」

ドガ！

我「リオン！？」

リオンが我狼と合成獣の間に割って入り、合成獣の攻撃を防ぐが…

リ「く…う…」

バギャン！

リオンの力では合成獣に敵うはずは無く、我狼もろとも吹き飛ばされる。

ドガン！

バササ！

我狼は近くの木に当たり、リオンは林の中に吹き飛ばされる。

我「く…！」

我狼は若干フラフラしているものの、起き上がるが…

我「ぐっ…！」

腕に巻いた布が真っ赤に染まっていた。

我（傷口が開いたか…！）ポタタッ

我狼の傷口から血が滴る。

林に飛ばされたリオンは意識でも失ったのか出てくる気配が無い。

そして目の前には合成獣。

我（この状況ではまず勝ち目がない…）

我狼の頬に冷や汗が流れる。

我（場所を変えるか…）

リオンが吹き飛ばされた逆方向の林に走り出す我狼。

その後を合成獣が追う

合「ゴガアアア！」

だが合成獣は我狼の姿を見失った。

合「グルルル…」

辺りをキョロキョロ見渡す。

だが…

ズバッ…！鮮やかな血が舞い、合成獣が倒れた。

そして太刀を構えた我狼の姿も。

一瞬の出来事だった。

我狼を捜している合成獣は一瞬隙が出来た。
そこに合成獣の背後の林に隠れていた我狼が後ろから合成獣を斬った。

我「戦闘中は気を抜くな…」

傷だらけではあるものの我狼の勝利だった。

接触

リ「…っ」

こちらは林に吹き飛ばされたリオン。

今まで意識を失っていたが目を覚ました。

リ「せ…先生！」

師の安否を心配するが…

？「心配しなくとも良い。」

リ「！？」

突如聞こえた声。

だが我狼でも無く、村人でも無く、ましてや涼雅でも無いこの声。

リ「貴方は…一体…？」

声のする方から出てきたのは茶髪に赤い瞳の中年の男。

男「彼はあの程度で死ぬ様な男ではないだろう。」

リ「先生を…知っているんですか…？」リオンの問いかけに男は口に弧を描き言った。

男「ああ。昔に…な。
もちろん…君の事も知っているよ。
彼の弟子…リオン君。」
男の表情にリオンは氷ついた。
リ（まずい…まずい…。）
おそらく…いや絶対に自分ではこの男に太刀打ちできないだろう。
今この場で戦闘にでもなったら必ず敗れる。
無意識の内に双剣に手をやろうとするが…
男「まあ、落ち着け。今は戦う時では無い。時が来れば君と刃を合わせる時も来るだろう。」
男「その時まで…さらばだ。」
次の瞬間には移動魔法でも使ったのか男の姿は無かった。
取り残されたリオンはこの場で戦闘にならなかった事に安堵していた。

次の目的

我「リオン！」

リ「！」

立ち尽くしていたリオンにかけられた声。

リ「先生！」

リ「合成獣は…一体…！？」

我「倒した。その内ここに居る合成獣も散り散りになるだろう」

リ「そうですか…。」

ホッとした感じのリオン。

だが茶髪の男の顔が浮かぶ。

リ「先生…」

我「何だ？」

男の事を聞こうとするが、我狼が過去を話されるのをあまり好いている訳では無い事を思い出す。

リ「あ…いえ…何でもありません。」

我「…？　何でも無いなら行くぞ。」

リ「どこへ行くんですか？」

我「先ほど隠れていた村人に会ってな。」～回想～

我「リオン！どこだ！？」

リオンを捜す我狼。

そこに…

ガササッ

我「！」

草むらをかき分ける音。

反射的に太刀を構える。

ガサッ！

村「わわっ！？」

我「…？」

出てきたのはリオンより少し歳上の男の村人。

我（合成獣か…？）

我（いや…だが合成獣は無反応の筈だ…）

村「ど～け～ろ～！
ど～け～ろ～よ～！」

太刀をコンコン叩きながら村人は言う。

我（どこかの誰かに似てるな…）

涼「へっくし！」

我「ここの村人か？」

村「そうだけどよ…ここには化け物がいたはずなんだけどな…」

キョロキョロ辺りを見ながら村人は言う。

村「あの男のせいで…」

我「！」

村人の言葉に反応する我狼。

我「あの男…とは？」

我狼が問うと村人は言った

村「この村は元々貧しい村で、祠にお供え物をするような村だった。
」

村「そこにあいつが…！あの男がやって来たんだ！」
村人が悔しそうに歯を食いしばる。
村「あいつがこの村の住人に変な魔法をかけて…！
一度ほとんどの村の人はあいつに西部に連れていかれて…」
我「戻ってきた時には化け物になっていた…と？」
村「ああ…」
村「俺はたまたまその魔法にかからなかったんだけど…」
村人がうつむく。
我（…なるほど。道理で村の人口に合わなかった訳だ。）
この村人同様、逃げ延びた者がいるのだろう。
我（ではその男は西部にいる…？）
我「…ここにはもう化け物はいない。
お前の他にもまだ生き延びている者が居るのだろう？
そいつらと一緒に暮らせ。」
村「倒したのか…！？あの化け物を…！」
信じられないという目をしながら我狼を見る。
本人は黙ったまま林の中に踵を返した。

～回想終了～我「次は西部に向かう。いいな？」

リ「はい！」

再び歩き出した二人だった。

次の目的（後書き）

次は西部ですね～

どうなりますかね～？

ｂｙ作者

侵入

我「ここか…」

ここは西部の端。

病院の様な研究所を前に呟く我狼。

リ「…先生。」

我「ああ。」

リオンの顔色が悪い。

この気配が原因だろう。

リ「これは…」

リ「大量の合成獣…？」

我「…合成獣か、あるいは他の何かか…」

我狼が静かに言う。

我「進むか？」

リ「はい。」

コクリとリオンが頷き先に進む二人。カツカツ…

二人の足音が響く。

我「…！」

リ「？」

我狼が何かに気付く、その視線の先には…

リ「檻…？」

我「…ただの檻ではなさそうだな。」

檻は原型を止めておらず、その檻のあちこちに血痕。

リ「もしかして…これに合成獣を閉じ込めてたり…？」

我「…そうかもしれんな。」

檻を見ながら言う。

残っている爪痕は間違いなく合成獣の物。

我「…行くぞ。」

リ「…はい！」

リオンに声をかける。

再び歩き出そうとした二人に…シュルル！

我「！？」

リ「なっ！？」

二人の脚に触手のような植物が巻き付く。

我「ぐっ！？」

リ「わっ！？」

脚を引っ張られ、体制を崩す我狼。

リオンは触手に持ち上げられ逆さまの状態。

リ「こ…のぉ！」

植物を双剣で突き刺そうとするが別の植物に腕を抑えられる。

我「リオン！」

我狼がリオンを助けるため脚に絡み付く植物を斬ろうとするが…

我「…っ！？」

脚が強い力で引っ張られる。

引っ張られる先には…

我「…！」

凶暴そうな２つの眼。

我（合成獣か…！）

巨大なワニの様な合成獣が鋭い牙で我狼に襲いかかる。

リ「先生！！」

リオンの叫び声。

バキン！

鋭い金属音が響く。

我「く…！」

合成獣の牙を我狼が太刀で防いでいる。

我「おおお！！」

太刀の刃を横に倒し、我狼が力を入れると、合成獣が真っ二つになった。

侵入（後書き）

最近更新遅くてすいません…

風邪をよくひく作者です…（泣）

こんな駄作品ですがこれからもよろしくお願いします…

m（＿＿）m

我狼と双剣

我「ぐ…！」

合成獣を倒した我狼だったが未だに脚に絡んでいる植物に悪戦苦闘していた。

バシン！

我「しまっ…！」

植物に腕を叩かれ、太刀を取り落とした我狼

我「！！」

ズダン！

我「かはっ…！」

植物に全身を叩きつけられる。

我（どうする…？リオンは動けない…だが動けないのは俺も同じだ…）

我（太刀も…）

チラリと辺りを見渡すと太刀は取りに行ける位置には無かった。

その時…リ「先生！」

我「！」

リオンの声。

それと同時に…

カラン！

リオンの双剣が落ちてきた。

我「よくやった！リオン！！」

双剣を受け取る。

そして…

ザンッ！

リ「…ッ！？」

渇いた音が響いたと同時にリオンと我狼の脚に絡まっていた植物がほどける。

ドサッ！

リ「うっ！」

リオンも植物から解放され、落ちる。

我「リオン！無事か？」

リ「は…はい！」

リオンの無事も確認し、安堵の息をはいた我狼だった。

我狼と双剣（後書き）

なんか…

いつもより少ない！！（爆）

すいませんでした…

内容が…少なすぎる…（泣）

蛇（前書き）

久しぶりの更新です。

最近更新速度がどんどん遅くなってる気がします…

でもまだまだ頑張ります！

ｂｙ作者

蛇

植物と合成獣をやり過ごした我狼とリオン。
先に進むと大きな門の様な扉。
そして…
リ「…先生。」
我「ああ。」
我狼とリオンが何かを感じとる。
我「何かが…こちらに向かっている…」
その何かは分からないが危険なのは確か。
リ「近い…ですね…」
我「リオン、構えろ」
我狼が太刀を構え、リオンが双剣を構える
二人の耳に響いた音
カツ…カツ…
何者かの足音。

だんだん大きくなっていくその足音。
現れたのは…リ「人…？」
そう。人だった。
虚ろな目をしているが生きている
リ「何でこんな所に…？」
リオンが考えている中、我狼も考え事をしていた。
我（あの男…妙だ…）
我（こんな所に普通人がいるか…？）
我（…怪しいな。）
すると突然
男「クカカ…。」
我&リ
「！？」
男が笑った。
怪しく口の形を弧にして。

我「リオン！そいつは合成獣だ！！離れろ！」

リ「！」

我狼が気付き、リオンに言うと合成獣から距離を置くリオン。

合「我は…門…番」

合「主の…命…により…貴様…らを…殺す…。」

リ「合成獣が…！」

我「喋った…？」

我（しかも命だと…？やはり…人間との合成に成功したのか…）

パチン！

合成獣が指を鳴らすとどこからともなく不気味な音が聞こえる。

ズズズズ…

何かが這いずる様な音が聞こえてくる。

再び現れたのは…

我＆リ

「蛇…！？」

蛇型の合成獣。

我「リオン、お前はあの蛇を仕留めろ。俺はあの男を仕留める。いいな？」

リ「はい！」

二人はそれぞれの獲物に向かって行った。

蛇VS狐

鋭い牙がリオンを狙う。

それを素早く避けて跳び双剣で斬り上げる。

ガキッ！

リ「なっ！？」

確かに当たった。

だが蛇は効果が無い様子

変わった事といえば硬い皮が少し傷ついただけだ。

ズザザザ…！

着地しながら考える。

リ（全身が硬い皮に覆われている…！）

硬い皮に覆われていればいくら斬り込んでも少しのダメージしか与えられない。

リ（どうする…？）

リ「！」

ズダン！！

リ「くっ…！」

思案中のリオンの真横に挑発と言う様に尻尾での攻撃。

当たりはしなかったが叩かれた地面はめり込んでいた。

冷や汗が頬を流れる。

リ（どうする…？

闇雲に斬り込んでも大したダメージは与えられないし…

それに対してあっちはガンガン攻撃してくる…）

リ（それに牙だって持ってる…多分毒も…）蛇「シャアアア！！」

リ「！」

ドガ！！

リ「ぐっ…！」

直撃。

先ほどの尻尾での攻撃が今度はリオンの横腹に直撃した。

吹き飛ぶリオン。

棚にぶつかりようやく止まる。

ドカン！

ガラガラ…！

リオンがぶつかった衝撃で棚の中や上にあった物が落ちてくる。

リ「く…ぅ…。」

視界がぼやけるが落ちてきた物の１つに目が止まる。

リ（…あれは、ランプ…？）

火の着いたランプ。

この部屋を照らしていたのはこのランプだったらしい。

リ（このランプで蛇に火を着けたとしても皮が邪魔する…）

リオンはあることを思い付く。

リ（そうだ…！）

リ（この方法なら…！）

双剣とランプを持ち、再び蛇に向かうリオン。そして蛇の周りを挑発する様に動く。

ドカッ！

リ「くっ！」

尻尾での攻撃に再び吹き飛ぶリオンだが今度は上手く着地。

リ（まだか…）

蛇を睨みながら思う。

蛇「キシャァァ！！」

とうとう我慢出来なくなった蛇がリオンに牙で襲いかかる。

リ「来た！！」

この時を待っていたかの様にリオンも蛇に飛びかかる。

リ「はっ！」

ズトッ

蛇「キィィィ！？」

大きく口をあけて攻撃してきた蛇の口の中に双剣を押し込み向きを縦にして口を閉じられない様にする。

リオンは着地し、あるものを蛇の口の中に投げ入れた。

あるものとは、そう。

火の着いたランプ。蛇「ギィィィ！！！」

蛇に火が着く。

蛇が火だるまになり倒れた。

完全に火が消え、残ったのは炭となった蛇の身体。

そしてその側に転がる双剣。

リオンは双剣を拾い、我狼を捜しにその場を後にした。

蛇ＶＳ狐（後書き）

リオン…エグい！！！

火を着けるってどんだけだよ！？

お前さんまだ１４歳なはずだ…

次回は我狼ＶＳ謎の合成獣です

お楽しみに～

ｂｙ作者

狼VS大蛇

ガン！

我「くっ…！」

こちらは我狼と合成獣。

合成獣が繰り出した拳を太刀で受け止める。

我（重い…！）

合「ククク…」

我「！」

我狼が攻撃の重さに怯んでいると合成獣がまた笑い出した。

我（まずい…！）

直感的に悟り、距離を置こうとするが…

合「お…そい」シュルッ！

我「！？」

合成獣の何かが我狼の首に巻き付く。

ギギギ…

我「ぐ…」

決して小柄では無い我狼の身体が持ち上がる。

我「なる…ほど…」

合成獣の何かに首を締め付けられながら我狼は言う。

我「蛇との…合成獣…か…」

合成獣を見ると右腕が一匹の蛇になっておりその胴体で我狼の首に巻き付き我狼を締め付けている。

我「ぐ…あ…」

カラン！

首を締め付けられ、我狼の手から太刀が落ちる。

合「ククク…」

合「ここ…まで…だな…」

合成獣の言葉に我狼は不敵に笑う。

我「どう…かな？」我「ここで…死ぬ気は…無い…！」

次の瞬間、我狼が合成獣のこめかみに蹴りをいれる

ドガッ！

合「ク…カ…」

いきなりの蹴りに合成獣が首を締める力を少し弱める。

すると我狼は足下に落ちていた太刀を素早く拾い…

ズバッ！

合成獣の蛇であり右腕を斬る。

合「ギ…ギ…」

我「ゴホッ…」

蛇から解放され再び構える我狼。

合成獣は左手を蛇に変化させ我狼に向かってくる。

ザンッ！

我狼が一太刀を放つと…

ドシャ…

合成獣が倒れた。

狼ＶＳ大蛇（後書き）

我狼ＶＳ大蛇でした。

いやぁ…

話が進まない！！！

泣きたくなってきました…（泣）

困りますねぇ

次回はかなりの進歩があるかも…。↑

まあ次回もお楽しみに～

ｂｙ作者

門の先

我（やはり…）

地に伏している合成獣を見ながら我狼は考える。

我（こいつは人間と蛇の合成獣だった…）

我（人間との合成に…成功したのか…。）

リ「先生！」

我「！」

そんな我狼にかけられた声。

我「リオンか…」

声の先を見るとリオンがいた。

無事の様だ。

リオンの無事に一安心する我狼。リ「この先に…」

我「少なからず何者かはいるだろう。」

門の様な扉を見ながら言う。

我「行くぞ。」

リ「はい！」

ギィィー…

門が開き、その先にいたのは…

？「久しぶりだな。

夜月我狼。」我「！！」

リ「！？」

リオンが以前出会った茶髪に赤い瞳の男。

？「十年ぶりか？」

我「……。」

リ「先生…？」

男が話していてもまるで変化の無い我狼の様子にリオンが我狼の顔を見ると…

リ「…！！」

我「……。」

笑みが、あった。

だが、その笑みは憎しみと怒りに満ちた笑みだった。

我「リオン。」

普段より低い声。

我「さがっていろ。」

我狼に気圧され、後ろにさがるしかできなかったリオンだった。

門の先（後書き）

我狼さんキレましたね↑

我狼と赤い目の男は過去に色々あったんですけどね…

→の事は次回公開します。

次回はかなり山場になりますよ～

お楽しみに～

ｂｙ作者

阻止

？「ククク…」

我狼の様子に心底おかしそうに笑う赤い瞳の男。

我「ギロル…！」

我「ギロル・アルド！！」

ギロルと呼ばれた男に太刀を降り下ろす我狼だが、どこからか槍を持ち出したギロルは我狼の太刀を受け流す。

ギ「まあ、待て。」

ギ「面白い客も来ている所だ。」

ギロルの瞳がリオンを捕らえる。

ギ「ゲームをしようじゃないか。」リ「！？」

我「ゲームだと…！？」

我狼の顔が怒りに歪む。

ギ「ああ。」

ギ「ここに、ある装置がある。」

ギロルが自分のすぐ後ろにある装置を示す。

ギ「この装置から流れる電波は各地に散らばっている合成獣の凶暴性を高める電波だ。」

リ「っ…！？」

我「なに…！？」

驚く我狼とリオン。

ギ「これが動き始めるのは１５分後だ。」

ギ「さあ…お前達はどうする？」

ギロルが笑う。

我狼が動いた。

我「叩き壊す！！」

太刀が装置に降り下ろされる直前…

ガキン！

ギ「では俺は邪魔をするか。」

槍が太刀を跳ね返す。

我「チッ！」

舌打ちをしながら後ろに跳ぶ我狼。

ギ「さあ、ゲームの始まりだ。」今まで気づかなかったがギロルの後ろにあるモニターが１５分と言う少ない時間を記している。

リ「先生！」

リオンが我狼に指示を仰ぐ。

我「時間が無い！速攻で行く。必ずあの装置を叩き壊す！！」

我「俺が奴を抑える。その内にお前は装置を壊せ。」

リ「はい！」

リオンが返事をするとギロルが邪魔をするように言った。

ギ「お前達が二人に対して俺は一人か…対等じゃないな。」

そして何か考える素振りをし、指を鳴らす。

パチン！

すると奥の方から何かがゆらりと姿を現した。

リ「合成獣…！？」

虎型の合成獣。

ギロルは相変わらずの笑みを顔に貼り付けたまま。

モニターの時間が動き出した。

阻止（後書き）

何かタイトル微妙ですね…（汗）

良いタイトルが浮かばなかったんです…（泣）

大体タイトル命名の神様が私の頭に舞い降りるんですけどねー↑ぇ

最近舞い降りてくれないんですよ…

まあそれはおいといて。

次回は凄く山場です！！

かなり戦闘ですね。

そしてあの人が…！！↑

的な事が起きそうなので次回もお楽しみに～

ｂｙ作者

限界（前書き）

やってしまった…！！！

（。д。；；；）

前々回予告通りに行かなかった…（泣）

すいませんでした…。

ｂｙ作者

限界

ガキャン！

太刀と槍がぶつかり合う。

我「退け！」

ギ「そうはいかんな。」

横薙ぎに太刀を振るが、避けられる。

ギロルを相手にしていては時間が掛かる。

相手にしているうちにもう5分経っている。

我（残り１０分…！リオンは…！？）

チラリとリオンを見るとリオンも虎型の合成獣に苦戦していた。

合「ガァッ！」

リ「このっ！」

バキン！

合成獣の鋭い爪をリオンがなんとか弾く。

我（キリが無いな…）

ギ「考え事をしている場合か？」

ヒュッ！

我「！」

ギロルの槍が我狼を狙う。

ガキン！

が太刀で防ぐ。

ギ「残り時間も気にしたらどうだ？」

我「なにっ…！？」リ「残り…5分…！？」

我「くっ…！」

その時…

我「！」

我狼が何かひらめいた。

ダッ！

ギロルの方を向いていた我狼は方向転換し、合成獣の方に向かった。

そして…

ザンッ…！

合「ガルル…ッ！」

合成獣を攻撃。

合成獣は一撃では倒せなかったものの、攻撃されたことから狙いをリオンから我狼に変えた。

タタッ…！

我狼の横を走り抜ける影。

リオンだった。

遠くでギロルが舌打ちする音が聞こえた。

だがすぐにその表情は笑いに変わった。

ギ「我狼…リオン…お前達にある罠を仕掛けていたのを忘れていた。」

我&リ

「！？」ー残り時間ー

ー1分ー

ゴォッ！！

我&リ
「なっ…！？」

残り時間が1分になったとたんに装置の周りが火に包まれる

当然装置に向かっていたリオンの足も止まる。

ギ「残り時間が1分となった時、装置の周りが発火するように仕向けておいた。」

ギロルの笑みが濃くなる。

我「貴様…！最初からそのつもりで…！！」

合成獣と対峙しながら我狼が吠えるが、もう遅い。

諦めかけたその時…

タッ…！

軽快な足音。

そして焔の中に消えた金髪。

ギ「な…に…？」

我「…！」

我「リオン！！」リオンは焔の中に自ら飛び込み、装置を狙う。

残り時間
１３０秒ー

ギ「その男はいい！あの少女を追え！！」

ギロルが合成獣に命じると合成獣はリオンを追う。

残り時間
ー１０秒ー
だが
我「もう遅い！」
リオンが焔を纏いながら双剣を奮う。
リ「貰ったぁ！！」
ドキャン！！
装置が…止まった。ガシャン！
装置の破片が落ちる。
リ「やった…」
装置は完璧に壊れた。

…だが

リ「なに…？」

我「まさか…！？」

この建物全体を揺らす地響き。

その原因が何らかの唸り声だと気づく二人。

ギ「ククク…」

ギ「ハハハ！！」

ギロルが笑い出す。

ギ「驚いた。まさか本当にこの装置を壊すとは。」

ギ「だが…」

ギ「あと一歩…間に合わなかったな。」

リ「……！」

我「やられた…」

モニターが示す時間は残り時間０秒。

あと一歩の所で装置が作動してしまった。

先ほどの唸り声は合成獣の凶暴化が始まった事からだろう。

リ「そ…んな…」

カラン！

リオンの手から双剣が落ちる。

そして…

トサッ…

リオンが倒れた。

限界（後書き）

やってしまった…！！！（本日二回目）

リオン倒れちゃったよ…！！

まあ確かに炎の中に入ってったら倒れるわな←

次回はちょびっと我狼の過去に触れます。

あー。

リオンどうしよう…←ォイ

まあ次回もお楽しみに～（＿▽＿）／～～～

ｂｙ作者

撤退

リオンが倒れた。

我「リオン！！」

我狼も焔の中に飛び込む。

ギロルは無表情。

我「おい！リオン！」

リオンは気絶している様で返事が無い。

両腕の火傷が酷い。

早く手当てをしなければ命も危ういだろう。

そこに…

我「！」

合「ガアッ！！」

合成獣が攻撃してくる。

我（クソッ…！）

リオンが後ろにいるため、避ける事が出来ない。

ガッ…！
我「ぐっ…！！」
我狼はリオンを庇い、合成獣に左腕を噛みつかれる。
合「ガルルル…」
我「…ッ！」
我「邪魔だ！！」
ドゴッ！
合「ガルッ…！？」
ズダン！！
我狼が合成獣を蹴り飛ばすと合成獣は吹き飛び、壁にぶつかる。
ポタポタッ
我狼の左腕から血が滴る。
この分だと左腕はもう使えなさそうだ。
我「チッ…！」
我狼は舌打ちをしながらリオンを抱え、焔の外に飛び出る。

焔の外に出ると…

ギ「生きていたのか。」

ギロルが待っていた。

リオンを見ながら言うギロル。

我「……。」

そんなギロルに対して我狼はリオンを一旦降ろし、太刀を無言で構える。

ギ「一度退いたらどうだ？我狼。」

我「何だと…？」

ギ「そのまま戦っても俺は構わんが…」

ギ「片手で俺に勝てると？」

ギロルが我狼の左腕を見る。

服が赤く染まる程、出血している。

ギ「それに…」

ギロルがリオンを見る。

ギ「その少女…そのまま放っておけば確実に死ぬぞ。」

我「…！」

我狼にも分かっていた。

このまま放っておけばリオンは必ず死ぬ。

それほど酷い傷だった。ギ「妹に似ている少女を殺したくは無いだろう。」

我「！！」

ギロルが笑いながら言う。

ギ「それとも…妹と同じ殺し方をして欲しいか？」

我「黙れ！！」

我狼が叫ぶ。

ギ「確か…優奈と言ったな。お前の妹は。」

ゴッ…！

太刀がギロルの首目掛けて振られる。

だがギロルは避ける。

我「貴様があいつの名を呼ぶな！！」

ギ「そう言うな。今俺が人間と動物の合成獣を作れるのは彼女のおかげだ。」

ギ「本当に感謝しているよ。…お前達兄妹には！！」

我「…ッ！！」

ギロルが槍を突き出す。

ギリギリで避ける我狼だが動きが鈍い。

やはり腕の出血のせいか。

そして…

バキンッ！

我狼の腕から太刀が引き剥がされる。

我「…！」

ギ「退け。我狼。今のお前では俺の相手にはならん。」

我「く…！」

我「必ず…俺が貴様を殺す…！」

我狼はそう言い、リオンのいる後方に飛び退き、リオンを抱える。

そして太刀を拾い、駆け出した。ギ「我狼…。」

ギ「お前に噛みついた合成獣の牙には合成獣としての本能と力…この2つを高める薬を塗っておいた。」

ギ「さあ。お前の中に流れる狼の血は…どう反応するかな？」

ギロルは我狼の走り去った方向を見ながら不気味に笑っていた。

撤退（後書き）

遅くなりました…（汗）

とりあえず撤退しましたね我狼。

優奈と我狼は兄妹でした。

リオンは優奈に似ていると言うことで…

以前涼雅にも言われていましたね。

次回はまたあの人が登場！

作者のお気に入りキャラです（笑）

報告

ここは涼雅の鍛冶屋。

カンカンカン！

涼「ふー。」

いつもの様に涼雅は刀を叩く作業を行っていた。

一息つこうかと作業を中断した時…

ガタッ…

涼「！」

何か物音がした。

空耳では無い。

この雪が音を吸いとる街ではそんな大きな物音はしない。

涼（…誰や？）

玄関の方から音がした。

念のため薙刀を手に持ち、玄関に向かう。キィ…

用心しながら扉を開けると…

涼「！」

涼「我狼！？」

我狼がいた。

そしてその腕の中には…

涼「リオン…！？」

ボロボロのリオンがいた。

涼「どうしたんや！？ボロボロやないか！？」

我「リオンの両腕の傷が酷い…手当てをしてやってくれ。」

涼雅が我狼を見ると明らかに疲労の色が見える。

涼「とりあえず中に入れ。」

我狼を部屋に残し、リオンを隣の部屋に運ぶ。

リオンの腕を見ると応急処置がしてある。

だが未だに熱を持っている。

このまま放って置けば腕が動かなくなるだろう。

なのでリオンの腕に薬を塗り、熱が無くなる様に冷やし、ベッドに寝かした。

涼「さて…と。」

涼雅は我狼の居る部屋に向かう。

我「…リオンは？」

部屋に入ると我狼が聞いてくる。

涼「今は寝てる。」

それに応え、我狼に歩みよる涼雅。

我「？」

訝しげに涼雅を見る我狼。

涼雅は素早く我狼の左腕を引っ張る。

我「っ！！？」

顔をしかめる我狼をよそに服をまくし上げる涼雅。

現れたのは…涼「…どういう事や？」

血だらけの我狼の左腕。

こちらは応急処置もなにもされていない。

我「……。」

何となく罰の悪そうな顔をしている我狼。

そんな我狼にため息をつく涼雅。

涼「お前とリオンにこんな怪我負わせるのは1人しかおらんな。」

涼「いたんやろ？ギロルが。」

我「…ああ。」

涼「何があったんや。説明しろ。」

我狼の左腕の手当てをしながら涼雅が言う。

手当てをして貰いながら我狼は涼雅の鍛冶屋を出てからの事を語り始めた。涼「合成獣が凶暴化…！？」

我「ああ。」

涼「ホンマかいな…」

唖然としている涼雅に我狼は自分の左腕を軽く上げる。

我「それを阻止しようとした結果だ。」

我狼の左腕は手当てが終わり、包帯が巻かれている。

我狼が言った次の瞬間。

ドゴン！！

我「！！」

涼「何や！？」

二人を襲う衝撃。

我狼は窓の外を素早く確認する。

我「チッ…。思ったより早かったな…。」

舌打ちをした我狼の視線の先には…

涼「合成獣…！？」

鳥の形をした合成獣の姿。

我「凶暴化した合成獣だ。人を襲ったり家を襲ったりもするだろう。」

そう言いながら立ち上がる我狼。

涼「戦うきか！？」

涼雅が驚き、声をあげる。

我「見たところ相手は合成獣一匹。片腕で充分だ。」

我「リオンを頼む。」

そう言い、太刀を持ち我狼は合成獣に向かっていった。

報告（後書き）

涼雅さん再登場～！！

作者が個人的に好きなのでテンション上がります（笑）

ここで少し補足を。

涼雅は我狼の妹…優奈の事を知っています。

幼い時から涼雅は我狼と優奈と仲良かったので、妹みたいに思っていましたね。

なのでギロルが優奈を殺したと言うのを我狼から聞いて涼雅も激怒しました。

そして太刀を作り、その太刀を我狼に与えるなど、我狼の復讐に協力しています。

さて、次回はリオンが目覚めます。

そして驚くべき物を見てしまいます。

お楽しみに（笑）

（^▽^）／~~~

ｂｙ作者

異変

涼「……。」

我狼に頼まれた通り、涼雅はリオンの眠っている部屋にいた。

リオンはまだ目覚める様子は無い。

涼（なんや…？なんか…嫌な予感がする…）

彼の第六感がそう告げていた。

涼（我狼…死ぬなよ…）我「そこだ！」

ザン！

合「ピィィィ！！」

こちらは合成獣と戦っている我狼。

さすが凶暴化しているだけあって、以前より手強く感じる。

合「ギィィィ！」

我「！？」

ドガッ！

我「ぐおっ！？」

合成獣の羽根に吹き飛ばされる。

ズガン！

壁にぶつかり、止まるがかなりの衝撃に動けない我狼。

我「くっ…！」

合「ピギィィィ！！」

我「！」

そんな我狼にとどめをさそうとする合成獣。

我（しまった…！）

鋭い爪が我狼に襲いかかる。その時…我狼の眼が変わった。

ズドン！

合「ピ…ギ…」

合成獣の腹に太刀を突き刺す。

返り血が我狼の頬に飛ぶ。

ザンッ！！

そのまま合成獣を切り捨てた。

ドシャ…！

合成獣が崩れ落ちる。

我「……。」

立ち上がった我狼だがすぐに地面に膝をつき咳き込む。

我「ゴホッ…ゴホッ…！！」

我（何だ…？手が勝手に…！？）

改めて自分の手を見る。

我「……。」

合成獣の血にまみれた右手。

そしてその直後。

我「…ぐっ！？」

激しい頭痛。

我「ぐ…ぅ…あ…！」頭痛の中で蘇る過去。

涼雅と優奈と自分。

幼い頃から仲が良かった。

だがその平穏は突然壊された。

『丁度良い実験台じゃないか。あの兄妹。』

突然やって来た茶髪の男。

『実験台として…役に立って貰うぞ…。

夜月我狼に夜月優奈。』

『兄さん！兄さん！！』

数人の大人に連れていかれ悲鳴をあげる妹。

『優奈！！』

そんな妹に向かって手を伸ばすが届くハズも無い。

『合成失敗…か。』

頭に響く茶髪の男の声。

あちこち体をいじられた記憶があるが、それどころでは無かった。

『優奈…？』

目の前には動かなくなった妹。

唯、怒りが込み上げた

『あああああ！！！』

ズバッ…！

茶髪の男に襲いかかった覚えがある。

その結果…自身の左眼を失っただけだった。ー憎いー

ー優奈を殺したアイツがー

ー憎い…！！ー

凄まじい憎しみの中、我狼の意識が途絶えた。ズガァン！！

涼「！？」

一際大きな轟音。

涼「我狼…？」

不安が煽られる。

涼「あの馬鹿…！」

顔をしかめながら涼雅は薙刀を持ち、部屋を飛び出した。ダダダ…！

廊下を走る。

バン！！

そして扉を開け、叫ぶ。

涼「我狼！！」

だが…そこで見たのは…

涼「！？」

ボロボロの鍛冶屋。

しかも鍛冶屋を攻撃したのは…

涼「我狼…お前…！？」

鍛冶屋を攻撃したのは我狼。

だがいつもの我狼では無い。

傍には合成獣の死体が転がっており、その合成獣の血であろう返り血を頬につけていた。

それに眼がいつもの我狼では無かった。

見馴れた筈の隻眼はいつもより鋭く、近寄りがたい獣の様な雰囲気を出している。

そして何よりその隻眼が紅く染まっている。

完全に合成獣の眼になっていた。ヒュッ！

涼「！」

目の前に我狼の太刀。

涼「このっ！！」

バキン！！

なんとか薙刀で防ぐ。

涼「我狼！どういうつもりや！？」

我「……。」

涼雅が叫ぶが我狼は全く無反応。

ダッ…！

再び我狼が動く。

獣の様な速さで。

ドガガガ！！

次は連撃。

涼雅も薙刀を駆使して防ぐが…

ドゴッ！

涼「ぐあっ！」

不意打ちの蹴り。

防ぎきれずに吹き飛ぶ涼雅。

ズガンッ！

壁まで一気に吹き飛ぶ。

涼「ぐ…！」

涼「この…阿呆が…！」

顔を歪めながら悪態をつく涼雅。

吹き飛ばされた際に斬ったのかこめかみから血が流れている。

このまま防戦していては自分がやられる。

涼雅は１つ深呼吸し…

涼「ニトロ！」

と唱えた

ズガァン！！

爆発が辺りを満たした。リ「……。」

瞼を上げるとどこかで見たことのある天井。

身体が重いが何とか起き上がる。

大きな釜が見えた時何となくだが察した。

リ「ここ…涼雅さんの鍛冶屋…？」

立ち上がろうと両腕に力をいれると鋭い痛み。

リ「痛…」

両腕を見ると綺麗に手当てがしてあり、包帯が巻いてある。

涼雅が手当てしてくれたのだろうと思いながら両腕を見ていると…

ズガァン！！

リ「！？」

突然の爆発音。

リ「え…？」

合成獣が凶暴化した事を思い出す。

リ（まさか…！）

廊下に飛び出し、駆け出し始めるリオン。タタタ…

廊下を走るリオン。

窓の外をちらりと見ると見馴れた銀髪が少しだけ見えた。

リ「先生…！」

廊下を走り、玄関までたどり着く。

だが…

ガチャガチャッ！

リ「開かない…！？」

何かが扉の前にあるようで開かない。

そんな扉を開けようとしていると…

涼「止めるんや…！リオン…！！」

リ「！！」

リ「涼雅さん！？」

涼雅の声。

だがその声は酷く苦しそう。

涼「絶対…出てくるんやないで…！」

そう言う涼雅。

涼「っ！？」

ガキャン！

そして薙刀と何か刃物が交わる音。

涼「ニトロ！！」

ズガァン！！

派手な爆発音。

リ「涼雅さん！？涼雅さん！！」涼雅の名を呼ぶが無反応。

リ「〜〜ッ！！」

出てくるな。と言われたがそうは行かない。

窓を探す。

リ（あった…！）

窓が見つかる。

心の中で涼雅に謝り、窓に蹴りを放つ。

バキャン！！

見事に割れた窓。

そこから外に出る。

そこでまず目に入ったのは…

リ「涼雅さん！！？」

倒れている涼雅。

そして…

リ「え…？」

倒れている涼雅に刃を向けている人物。

だがその人物が涼雅に刃を向けるなどあり得ない。

そのあり得ない事が今目の前で起こっている。

その人物は…

リ「先…生…？」

紅い隻眼の我狼だった。

異変（後書き）

ぐふ…

真面目にいっぱい書きすぎた…（死）

てか我狼が合成獣化しちゃったよ…

涼雅さーん！

涼雅がぁぁぁ（泣）

ぐす…（涙）

次回は我狼ＶＳリオン＆涼雅

…かなぁ？

涼雅さん出せないかもしれません…

お楽しみに（Ｔ＿Ｔ）／～～～

暴走

リ「先…生…？」

目の前には紅い隻眼の我狼。

困惑しているリオン。

そこに…

ビュッ！

リ「！」

リオンに我狼の太刀が振られる。

リ「っ…！？」

反応が出来ないリオン。

我狼の太刀がリオンに当たる瞬間。

ガキン！

リ「！？」

リオンの前に１つの影。

その正体は…リ「涼雅さん…！？」

ボロボロの涼雅。

手に持っている薙刀で何とか我狼の太刀を防ぐ。

涼「このアホ我狼…！」

涼「リオンにまで手を出すとはどういう事や！！」

ブンッ！

涼雅が薙刀を横に払うと、我狼は後ろに跳ぶ。

それと同時に涼雅が地面に膝をつく。

リ「涼雅さん！」

涼雅にかけよるリオン。

涼「リオン…よく聞けや…。」

リ「！？」

涼雅がリオンに言う。

リオンは涼雅の話に耳をかたむける。

涼「今の我狼は正気じゃない。」

涼「我狼を正気に戻すために…少し強力な魔法使わなあかん。」

涼「その魔法を使うには少し時間がかかるんや。」

涼「それまでの時間…稼げるか？」

涼雅が問うと…

リ「…はい！」

リオンが頷き、我狼に向かい走っていく。リ「先生！」

我「……。」

リオンが呼び掛けるも我狼は無反応。

次の瞬間再び我狼の太刀が振られる。

ビュッ！

リ「っ！」

だが今度はリオンも負けずに紙一重でかわす。

続けて素早い太刀の突き。

ガキン！

今度は双剣で弾く。

だが…

ガッ…！

リ「なっ…！？」

ブンッ！

双剣を持ったリオンの手を我狼が掴み、そのままリオンを投げる。

ズダンッ！

リ「うっ！」

地面に叩きつけられ、うめくリオン。

リ「！」

地面に倒れたリオンを狙う太刀

リ「くっ！」

ズドッ！

なんとか体をよじり、太刀をかわす。

そして

ガンッ！

太刀が地面に刺さるのを狙い、
我狼に蹴りを放つ。
左腕で防がれたものの蹴りが我狼に当たる。
だが…
リ「…！」
リオンは気づいてしまった。我狼の左腕に巻かれている包帯から血が滲んでいる事に。
それだけではない。
リオンの攻撃はろくに受けていないが、何故か身体中が傷だらけだ。
涼「リオン！！」
涼雅の叫び声。
それと同時に我狼の太刀がリオンを狙う。
リ「っ！」
ガキャン！！
瞬時に双剣を盾にしたものの太刀の威力を防ぎきれず吹き飛ぶ。
ドンッ！

リ「うっ！！」

壁にぶつかりそのままうつぶせに倒れるリオン。

リ「く…」

よろよろと起き上がり、再び我狼と向き合うが…

ドサッ

また倒れる。

リ「…っ」

我「……。」

そして我狼がリオンに止めを刺そうと太刀を降り下ろす。

その時

リ「先…生…」我「！」

一瞬…本当に一瞬。

我狼の動きが鈍った。そしてその時を狙ったかの様に、

涼「そこまでや。我狼。」

我狼の懐に飛び込んだ涼雅。

この距離では太刀も使えない。

涼「おおおお！！」

ズガンッ！

我「…！！」

涼雅が我狼に掌底を打ち込む。

しかしただの掌底では無い。

合成獣の凶暴化を抑える効果の魔法でもある。

ドカン！！
我狼が吹き飛び壁にぶつかる。
木片が舞う。
涼（どうや…！）
これで決まらなければボロボロの涼雅に勝ち目は無い。
ガラッ
涼「！！」
我「……。」
瓦礫の中から我狼が起きあがった。
涼「くそ…。」
涼雅が片膝をつく
だが…
ドサッ…
我狼が倒れた。
涼「…よく考えてみれば…合成獣として暴走すれば…身体的にも…
保つはずなかったんや…」

涼雅の声が虚しく響いた。

暴走（後書き）

わぁぁぁ！！

放置ごめんなさぁぁぁい！！！（泣）

作者は最近忙しく更新できません…（泣）

これからは1週間に一度とか…2週間に一度の更新になるかもしれません…

みっ…見捨てないで下さぁぁぁい！！！（泣）（叫）

目覚め

どこまでも広がる闇。

その中に只1人たたずむ銀髪の男がいた。

我「ここは…何処だ…？」

ー夜月我狼ー見渡す限り闇。

確か自分は合成獣の相手をしていたはず。

だが途中から記憶が無い。

そこに…

『……さん…』

我「！？」

自分以外誰もいないはずの空間に何者かの声。

そして闇の中に新たな色。
黒を超えた…漆黒。
『にぃ…さん…』
再び聞こえた声。
たがその声がもう聞く事の出来ない声だと気付く。
我「何故だ…」
我狼の灰色の瞳が揺らぐ。
我「何故、お前がここにいる…！」
『兄さん…』
我「優奈…！」
漆黒の闇の中から現れたのはもう存在するはずの無い妹だった。『何故…？』
優奈が近づいてくる。
我「…ッ！」
反射的に優奈と距離を置こうとする我狼。

だが…

ガシッ

我「なにっ…！？」

闇が我狼の足に絡み付く。

ほどこうと暴れるが一向にほどける気配が無い。

そんな事をしている内に優奈が自分の目の前にいた。

『何故…私を助けてくれなかったの…？』

我「…！！」

我狼の頬を冷や汗が流れる。

逃れられない。

目の前の妹から。

そして妹は…自分を憎んでいる。

『ねぇ…』

優奈が我狼の瞳を覗く。

『ドウシテ…？』

薄れゆく意識の中で妹の瞳が見えた。我「……。」

我狼が目を覚ますとそこは闇の中では無く涼雅の鍛治屋だった。

身体中が痛む。

だが包帯が巻いてある所を見ると手当てをしてもらってある様だ。

なんとか上半身を起こす。

すると…

我「！」

我「リオン…？」

自分の座っているベッドに突っ伏す様に眠っているリオン。

リオンも怪我をしている様だが手当てされている。

その事に安心していると…

ガチャ…

我「！」涼「我狼！起きてたんか！？」

我「…涼雅か。」

扉が開き、涼雅が現れた。

目覚め（後書き）

うわ微妙ｗｗ

微妙な所で切ってすいませんｍ（＿＿）ｍ

我狼病んでますねぇ。

次回は来年の更新に　なると思います。

来年もよろしくお願いしますｍ（＿＿）ｍ

手合わせ（前書き）

リアの友人から指摘を受け、書き方を少し変えて見ました。

急ですみませんがよろしくお願いしますm（＿＿）m

手合わせ

「涼雅か…。」

「大丈夫か？」

涼雅が心配そうに我狼を見る。

「ああ…。」

涼雅も所々に包帯を巻いている。

我狼は分かっていた。

リオンも涼雅も自分が傷つけた事を。

「…すまない。」

「我狼…。」

「…すまない。」

我狼はただ謝る事しか出来なかった。

沈黙の中、リオンの寝息だけが静かに響いた。「とんだ誤算だな。」

場所は変わり、西部の研究所。

1人椅子に座り呟く茶髪の男がいた。

男の名はギロル・アルド。
合成獣の研究者でもあり、人間との合成に初めて成功した人物でもある。
「魔法使いか…見落としていたな。」
その男が考えていたのはある合成獣。
夜月我狼。
ギロルが創り出した合成獣。
合成獣としての力を引き出す為に仕掛けを施したが、ギリギリの所で魔法使いである者に阻止された。
（だが…あの娘…どこかで…。）
ギロルの頭には我狼が連れていた少女が思い浮かんでいた。
（…ああ。）
ギロルの口の端が歪む。
「思い出した。」
（なら…あの娘を使うか…。）
ギロルの瞳が妖しく光った。「せ……ぃ」

「せんせ…」

「先生！」

「！」

我狼が顔をあげるときょとんとした顔のリオン。

「…どうした。」

我狼が問うとリオンは言う。

「準備出来ましたよ！」

我狼の前には双剣を持ったリオン。

「そうか…では…」

我狼も太刀を持つ。

怪我の療養に日にちを当てていた2人は5日も経つと怪我もほとんど治った。

そこで手合わせをする事になったのだった。辺りの空気がはりつめる。

我狼とリオン両者とも一定の距離を保っていたが…

ダッ…！

先に仕掛けたのはリオンだった。

「はぁっ！！」

双剣を我狼の頭上に降り下ろす。

だが我狼も太刀で受け止める。

ガキャン！！

鋭い金属音。

双剣と太刀が重なる。

ブンッ！

「！」

双剣を受け止めると今度はリオンの蹴り。

それは空いている左手で防ぐ。

バシッ！

蹴りの反動を生かし、後ろに大きくリオンが飛ぶ。

タンッ！

そして体制を立て直す。

（…強くなった。）

戦いながら我狼は思う。

思えば最初リオンは双剣の持ち方すら知らなかった。

『お前はこれで身を守れ。』

『……。』

双剣を手渡すと何も言わずにじっと眺めている。

『…？　どうした？』

『これ…どうやって使うんですか…？』

『……。』

『……。』

『…まずは持ち方からだ。』

『…はい。』

その持ち方すら知らなかった少女が今自分の攻撃を受け止めている。

まだおぼつかない所や甘い所もあるが…

（リオンももう…立派な剣士か…。）

ガキン！

再び双剣と太刀が重なる。

「考え事…してていいんですか…！？」

「…何の事だ。」

ギギギ…

双剣と太刀が重なり力比べとなる。

力の差なら我狼の方が圧倒的に有利のためリオンは息があがっているが我狼は全然余裕だ。

「くっ…！！」

一旦離れるリオン。

再び一定の距離を保つ。

（体力的にももうリオンは限界なハズだ…。ならば…。）

（ズルズル長引かせても先生の方が体力的に有利…。なら…。）

2人とも考えている事は同じの様だ。

（（次で決める…！！））

ダッ…！

リオンが再び駆け出す。

そして双剣を我狼に突き出す。

我狼は太刀で双剣を弾こうとしたが…

「…！！」

向かってくるリオンが、優奈に見えた。

我狼の動きが…一瞬鈍った。ビッ…。

首筋に鋭い刃物の感覚。

太刀をくぐり抜け、我狼の首筋には双剣。

ビュウ…

一陣の風がふく。

「…強く、なったな。」

我狼が呟く様にリオンに言う。

「…本気の貴方に、勝たなければ意味がありません。」

リオンもまた、呟く様に応える。

「あの程度の速さだったら太刀でも双剣を弾けたハズです。
けど貴方の動きが一瞬鈍った。」
キッと我狼を睨む様に見つめるリオン。
「先生…貴方は…何に怯えているんですか？」
「…！」
正直驚いた。
リオンの真っ直ぐな眼に全てを見抜かれているんじゃないかと。
だが…その眼は優奈とは違う何かを見透かした様な眼だった。
我狼は思った。
（やはり…優奈と、コイツは違う。）
我狼の中で何かの区切れがついた。「さあな…。」
「！！」
リオンの眼が見開く。
「だが本気の俺に勝ちたければ…」
ガッ！
リオンの双剣を持つ手を我狼が掴み…

ブンッ！

そのまま投げる。

先ほどまでとは違い、キレのある動き。

ドサッ！

「うっ！」

受け身をとる前に地面に叩きつけられる。

ビッ…！

「止めを刺す前に、気を抜く様なマネはするな。」

今度はリオンの首筋に太刀。

何か吹っ切れた様子の師匠を見上げながらリオンは満足そうに笑って言った。

「やっぱり敗けた…。」

リオンの呟きが響いた。

手合わせ（後書き）

我狼さん病み期抜け出しましたね。

少しずつこの小説も終わりに近づいています。

次回は我狼の過去が全て明かされます。

次回もお楽しみに～

（^＿^）／~~

優しさ（前書き）

ぬおおおおおおおおおおおお！！！

長らくの放置申し訳ありませんでしたぁぁぁ！！！（スライディング土下座）

本当にすいません…テスト前というのもあり…いえ！言い訳は致しません！！

予告どおり今回は我狼の過去です。

優しさ

涼雅の鍛冶屋の外に大きな木があった。

そこに一羽のカラスがいた。

実はそのカラスはギロルに飼い慣らされている魔法獣だった。

魔法獣とは魔法使いが飼い慣らす動物であり、その魔法獣が見た映像を主人である魔法使いが見ることも出来る。

だが魔法獣には攻撃性はあまりないので主に偵察様に飼い慣らされている。

その魔法獣がじっと双剣の手入れをしているリオンを見ている。

魔法獣が中の様子をうかがおうと鍛冶屋に接近しようとする。

だがその時一羽の鷹が飛んできた。

鷹がカラスを攻撃し、追い払う。

カラスが逃げ飛んで行った後、鷹が鍛冶屋の入り口にいる黒い影に飛んでいく。

その黒い影の正体は涼雅。

鷹は涼雅の肩にとまる。

そして鷹は涼雅の魔法獣だった。

リオンの様子をうかがう魔法使いなどいないが、心当たりはある。
カラスが飛んでいった方向を見ながら涼雅が呟く。
「ギロル…魔法まで使う様になったのか。」
いつものチャラけた様子の涼雅とは違い、低い声。
「だが…」
「簡単に…情報収集を出来ると思うな。」
涼雅の肩にとまっていた鷹が空に飛んで行った。「よし…」
双剣の手入れをし終わったリオン。
そこに…
「リオン！」
涼雅の声。
「あ、はい！」
返事をして涼雅の所に行く。
そこには涼雅と我狼もいた。
「リオン。よぉ聞ける…」

「ギロルの居場所が分かったんですか！？」
涼雅が言い終わる前にリオンがたずねる。
涼雅の代わりに我狼が答える。
「ああ。さすがの情報力と言った所だな。」
「やろ？」
得意そうに涼雅が言う。
ギロルの居場所は涼雅の魔法獣が調べあげた。
以前、我狼がリオンに初めて会った村でも涼雅の魔法獣が山賊に襲われた場所を調べた。
「で、場所なんやけどな…」
涼雅が言うにはギロルは以前戦った場所にはもう姿は無く。
「ギロルは…南にいるんや。」
ギロルが南に向かうのを涼雅の魔法獣が目撃した。
「じゃあ…これで…」
リオンが呟くと我狼も言った。

「ああ…。決着が着く。」

「リオン…」

我狼と二人で部屋を出ると、我狼が話しかけてきた。

「？　どうしたんですか？」

首を傾げるリオン。

「お前に話しておく事がある。」

「？」

「俺の過去…。そして正体…。」

「俺は…」

「失敗作の合成獣だ。」

「……！」

少しかたむき始めた太陽が二人を照らした。我狼はもともと４人家族で暮らしていた。

父親、母親、妹の優奈と我狼。

涼雅とはその頃からの顔馴染みで俗に言う幼なじみと言う存在だった。

我狼の父は武術に長けており、我狼は剣術、涼雅は薙刀を教えてもらっていた。

余談だが涼雅の両親は母親が魔法使い、父親が凄腕の鍛冶師であったが早くに病で死んだ。

涼雅は母親が残した魔法の資料を使い、独学で魔法を使える様になった。

我狼が１８の時…事件は起きた。

雨の日だった。

我狼が家に帰ると部屋が真っ暗だった。

不信に思い、電気をつけた。

すると…

両親が血塗れになって息絶えていた。

何故…？

自分と涼雅が二人で組んで挑んでもかなわない父が何故…？

そして気づいた。

優奈がいない。

そして聞こえた足音。

カツコツ…

現れたのは茶色の髪と瞳の男。

そして血塗れの手。

『君が…夜月我狼か。』

笑った男を見て、直感した。

こいつが殺した…

『貴様っ！！』

近くにあった自分の剣を抜いて斬りかかった。

だが…

バシッ！

『…！？』

我狼の刀が止められた。

しかも…

『こんな物か…。』

素手で。

『だが実験台としては良い方か。』
1人納得した様に呟く茶髪の男。
『くっ…！』
掴まれた刀が動かない。
ゴッ…！
『かはっ！』
逆に掴まれた刀の柄で鳩尾を叩かれる。
『ぐ…』
『私の名前はギロル・アルド。一緒に来てもらおうか。夜月我狼。夜月優奈…彼女もいる。』
連れて来られたのは研究所。
研究員同行で廊下を歩いていると…
『嫌！離して！！』
『優奈！！』
別室に連れていかれる優奈がいた。

『兄さん！！』

叫ぶ優奈に向かおうとするが研究員に押さえつけられる。

『離せ！！』

暴れるが拘束は解かれない。

『兄さん！兄さん！！』

『優奈！！』

伸ばした腕は…

届かなかった。そして生きている優奈を見たのは…これが最後だった。

優奈を見てからしばらく我狼は監禁された。

食事もろくに与えられなかったがなんとか生き延びた。

監禁されて数日経ったある日。

数人の研究員達がやってきた。

そしてその手には注射器。

身の危険を感じたが拘束されている身では逃げられるハズもなかった。

研究員によって左腕を晒される。

『や…めろ…！』

精一杯殺気を飛ばすが無情にも注射器の針が近付く。

『う〝っ！』

『あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝！！！』

薬を注入された直後我狼を襲った激しい苦痛。

身体が何かに侵食されていく感覚。

意識が途絶えそうになるのを何とか耐える。

ようやく苦痛がおさまると研究員達が感嘆の声をあげていた。

『拒絶反応を乗りきったぞ！』

『ギロル様に報告だ！』

『新たな試作品が完成した！』

そんな会話が聞こえてくる。

その中にいた1人の研究員が我狼に言った。

『おめでとう。君が初の成功例だ。』

その言葉を聞いたのを最後に我狼の意識は途絶えた。薬を注入されてから数日が過ぎた。

薬を注入された日から我狼の身体に異変が起きていた。

定期的に訪れる左腕の痛み。

そしてその痛みが続き、腕の感覚が無くなって来て自分の意思とは裏腹に動き出す。

そんな左腕の異変と戦いながら時間は過ぎていった。

ある日…

『部下から報告があった。調子はどうだ?』

『…貴様。』

ギロルが現れた。

『…俺に何をした。貴様の部下は成功例だの拒絶反応とか言っていたが。』

『…私は、あるものを創りたいんだ。』

我狼の問いには直接答えずにギロルは言った。

『そのあるものは…合成獣…。最終的に私が目指しているのは主の命令を忠実に実行する力と知力を持った合成獣。』

『だが獣と獣を合成させても力は良いとしても知力が発達していないんだ。』

『悩んだよ。』

ため息をつくギロル。

『だが私はある答えに行き着いた。』

『知力を持った人間と力を持った獣。その2つを合成させたら…？』

ギロルの瞳が怪しく光る。

冷や汗が我狼の頬を伝った。

『だがこれにも問題点があってね。』

『合成させる時に人間の身体がもたないんだ。』

『君が初めてだ…。』

『狼の遺伝子を混ぜた私の薬の拒絶反応に耐えたのは。』

『…なるほど。俺の左腕の異変はまだその拒絶反応が残っているからか。』

『そうとも言うな。だが私の薬も完全とは言えないんだ。その内効果が薄れてしまうかもしれない。だが安心なのは薄れる事はあっても消える事は無い事だな。』

苦笑するギロル。

『貴様は…何がしたい？』

『合成獣など創って何をする気だ…！』

我狼が言うとギロルは応えた。

『創作意欲。私を動かしているのはそれだけだ。』

『目指している物を創れるのならいくら他人が犠牲になろうと構わないんだよ。』

狂気的な笑みを浮かべたギロルに…

戦慄を覚えた。

ギロルが我狼の拘束を解いた。

『…？』

『君に見せたい物がある。』

『ついてくるか？』

嫌な予感がしたが黙ってギロルの後に続いた。

そしてある部屋の前に着いた。

扉を開けると…
見慣れたハズの優奈がいた。
だが優奈は…
死んでいた。
『どう…いう…事だ。』
なんとか声を絞り出す。
するとギロルはクスクス笑いながら言った。
『拒絶反応に耐えられなかったんだよ。』
『君は拒絶反応に耐え抜いたから妹であるこの子も耐えられるかなと思ったがな。』
『全く…使えん実験台だ。』
『…!!』
目の前の男が…
ただ憎かった。
カラン!
ギロルが剣を投げる。

足元を剣が転がる。

『私が憎いか？』

『ならばその剣で私を斬ってみたらどうだ？』

迷いは無かった。

『貴様ぁぁぁ！！！』

剣を鞘から抜き、ギロルに斬りかかる。

しかし何処からか槍を持ち出し我狼の剣を受け止めてギロルは言った。

『どうした？そんな物か？』

反論出来ない我狼を横目に呟いた。

『やれやれ…感情というものは厄介だな。』

『私の目指している合成獣には感情などいらないんだ…。』

茶水晶の瞳が我狼をとらえた。

『君が拒絶反応に耐えたまでは良かったが…獣としての力を出し切れていないな。瞳の色も変わらない…。』

『所詮君も…失敗作か。』

刹那。
我狼の視界左半分が…深紅に染まった。
そして凄まじい激痛。
思わず左目を押さえると押さえた手の間から流れる真っ赤な血。
『失敗作は必要ない。君も、君の妹も。』
『だが…君達のおかげで私の完璧な合成獣に近づけた。』
『これから改良を続ければ完璧な合成獣が完成する。』
去り際に残したギロルの言葉が何度も頭に響く。
1人残された我狼に残っているのは…
『俺は…』
『無力だ…。』
絶望と憎しみだけだった。しばらく経つとギロルから我狼は解放された。
『失敗作は必要ない…か。』
笑ってみたが憎しみだが積もるだけだった。

帰る場所も無かった。
だが行かなければいけない場所はあった。
『我狼…！！？』
幼なじみの元へ。
直ぐに涼雅の元に向かう気にはなれずに会うのは数年ぶりだった。
涼雅には全てを話した。
『これから…どうするんや？』
『今の俺では…ギロルには勝てない。』
『各地に散らばったギロルの合成獣を倒しながら腕を磨く。』
『後悔…せぇへんか？』
『…奴を…ギロルを殺せるのなら…何だってする…。』
『俺には…それしか残っていないからな…』
『…さよか。』
おもむろに涼雅が立ち上がり何か布に包まれた長い物を持ってきた。
布を剥がすと現れたのは太刀。

『…これは？』

我狼が問うと涼雅は答えた。

『親父が打ってたの思い出しながら俺が打ったんや。丸腰じゃあ合成獣とは戦えへんやろ。』

『お前…』

『優奈が殺されたんや…俺も憎いに決まっとるやろ…。』

滅多に見ることは出来ない涼雅の怒りの感情。

『我狼…お前の復讐に俺も付き合ったる。これが…俺に出来る事やからな。』

『…すまない。』

それから我狼が合成獣狩りの旅に出た。

リオンと会うのはそれからさらに数年後になる。「これで…全てだ。」

過去を話している間に空は赤く染まり始めていた。

我狼が顔をあげると目に入るリオンの顔。

「何故…お前が泣いている。」

「…すみません。」

リオン自身も分かっていた。

泣くべき者は自分じゃない。

けれど改めて見た我狼の左目の傷痕が余りにも悲痛で我慢出来なかった。

「全くお前は…」

「！」

困った様な声と頭に乗せられた手。

「泣き虫なのは…会った時から変わらないな…。」

「…っ」

我狼の優しさに余計に涙が流れた。

優しさ（後書き）

ほんっとに放置申し訳ありませんでした…

1ヶ月！？1ヶ月だよねジョニー！！？↑ぇ

すいません本当にすいません。

お願いします見捨てないでくださいぃぃぃ！！！

更新速度がかなり低下しております…

もしかもしたら1ヶ月に一度になるかも…イタッ！すいません！石投げないでっ！！

次回は我狼と涼雅の会話です。

ちょびっとギャグ…？

でわでわm（＿＿）m

by作者

侵食

バキンッ！

ガキンッ！

「おおお！」

「遅い！」

決戦に向けて調整とも言える手合わせをしていた我狼とリオンだが…

ベキンッ！！

「うおっ！？」

「わわわっ！？」

「なんや！？」

我狼とリオンの奇声（？）を聞いた涼雅が鍛冶屋から飛び出す。

すると…

ビュン！！

「ぎゃあああああああああ！！！」

何かが顔に向かって物凄い速さで飛んできた。

ズドン！

「……（汗）」

頭をかすり鍛冶屋の壁に突き刺さったのは…

「太刀が…折れた…（汗）」我狼の唖然とした声。

自分の頭の上の折れた太刀の刃。

折れた太刀…自分が打った太刀…

「我狼の…我狼の…」

（まずい…（汗））

（涼雅さんが…！）

涼雅からなんか黒いオーラが出てる。

ダッ！！

そのオーラが出始めた瞬間我狼がダッシュで逃げた。

「我狼の阿呆ぉぉぉぉぉぉ！！！」

「いっ！？」

ズドォン！！

涼雅の爆発魔法。

「ぐお！」

吹き飛ばされる我狼。

だが着地する所はさすが。

だが一発で終わるはずもなく。

ズドドドォン！！！

「うおおおお！！？」

「私知りません…。何も見てません…。先生の悲鳴が聞こえるとか気のせい気のせい。」

目の前の出来事を直視出来ないリオン。〜1時間〜

「最悪や…わいの魂が…」

ズモモモと黒いオーラを放出し続ける涼雅。

「…はあ…。」

戦いの前にボロボロの我狼。

「お疲れ様でーす」

現実逃避をして何事も無かった様に爽やかな笑顔で水を渡してくるリオンが恨めしい。

「大体手入れもせずにあんな風に使っとったらそりゃ折れるわ…」

「「……（汗）」」

相変わらずブルーな涼雅。

「涼雅…」

「なんやー（泣）」

「直すとしたら何日かかる？」

「根元から折れとるから1週間はかかるでー。直そうとも思わへんけどなー（泣）」

「1週間か…。」

「先生。涼雅さん復活する気配ありませんよ？」

心配そうなリオン。

「それは心配無い。」

「へ？」

言い切った我狼。

不思議に思うリオン。

「涼雅。」

「なんやねーん（泣）」

「煮干し1パックでどうだ。」

「乗ったぁぁぁ！！！」

涼雅即復活。

（ええぇぇぇ～…）

リオン、顔がひきつってる。

「いいんですか…？あれ…」

「あいつは煮干しがあれば何でも出来る。」

「…ああいう人って人生幸せそうですね。」

「ひゃほぉぉい！！」

「…人生幸せに生きた奴が勝ちだ。」

「…そうですね。」

切にそう思ったリオンだった。「直ったでー！！」

数日後涼雅が太刀を持ってきた。
かなりご機嫌で。
「ご苦労様でーす」
「煮干し！煮干しどこや！？」
「……。」
我狼が黙って煮干しのパックを差し出す。
「煮干しっ！」
煮干しを受けとる涼雅。
「…本当に幸せそうですね。」
「…それが奴の取り柄だ。」
「煮干し美味っ！」
「「……。」」
我狼が呆れた目で涼雅を見ている中…
（本当に美味しいのかな…？）
涼雅の煮干し好きに密かに感染されつつあるリオンだった。その日の夜。

「なあ、我狼。」

「…なんだ。」

リオンが涼雅の与えた自室に戻った時涼雅が我狼に話しかけた。

我狼は月を眺めていた。

「お前ギロルを倒したらどうするんや？」

「倒したら…か…。」

「無計画かいな…（呆）」

「倒せるかどうかも…分からない状態ではな。」

苦笑する我狼に涼雅は言う。

「ネガティブっちゅうか…悲観的っちゅうか…そんなんやから幸せ逃げるんやで～。」

「…お前が楽観的すぎる。」

「悲観的よりはいいと思うんやけど。」

「言ってろ。関西人被れ。」

「…わい泣きそう…（泣）」

そんな涼雅にため息をつきながら我狼は立ち上がった。

「少し出てくる。」

「なんや？満月見ると血が騒ぐんか？狼だけに。」

「斬るぞ。」

「ゴメンナサイ。」

無表情で殺気を飛ばす我狼は物凄く怖い。

背中を向けた我狼に今度は何も言わずに見送った涼雅であった。我狼はリオンと涼雅に嘘をついていた。

『これで…全てだ』

「ぐ…おお…！」

リオンと涼雅に言ってなかった事がある。

誰にも見つかる事の無い林の中で左腕の痛みに耐える。

「…ッ」

「この…化け物の左腕も…隠しきれなくなってきたか…。」

我狼1人だけが分かっていた。

ギロルに再会し、戦った時、虎の合成獣の牙に塗ってあったのは自

分の中の狼の力を強くする薬…。
現に1度狼に意識をもっていかれ合成獣となりリオンと涼雅を傷つけた。
リオンと涼雅に言っていなかったのは…
自分の中にいる狼の力を抑え、自分が合成獣になるのを耐えている事。
そして今も我狼の左腕は異様な形をしている。
獣…いや、本人の言うとおり化け物の様な左腕。
狼に左腕が侵食されているのが分かる。
爪は鋭く伸び、狼によって自分の意思とは裏腹に動かされる。
「〜〜〜!!」
定期的に訪れるこの時間。
だが今回はいつもと違った。
「侵食が終わっても元に戻らない…か。」
いつもは侵食が終わると人間の腕に直るのだが…
我狼の左腕は化け物のままだった。

満月が綺麗に輝いていた。「……。」

こちらは鍛冶屋のリオン。

リオンも満月を眺めていた。

（これで…ギロルを倒したら…）

（先生と涼雅さんと…3人で暮らせたらいいな。）

自然と口元に笑みが浮かんだ。

だが…

「！！」

ビッ…！

リオンの首筋には冷たい刃。

「…我狼だったら私の首筋にも刃を当てていただろうが…。僅かに発した殺気に反応するとは…さすがだな。」

「…何故貴方が…。」

リオンに刃を向けたのはギロル。

リオンには何故ここにギロルが居るのか分からなかった。

「フッ…気配を消しながら来た甲斐があった。」

「……。」

「リオン…自分の過去を知りたくないか？」

「何故貴方がそれを…！？」

自分が記憶喪失だと言う事は我狼と涼雅しか知らない。

「少し…な。自分の過去が知りたければ私についてこい。」

「…素直に着いていくとでも？」

鋭い眼差しのリオン。

「君が必要だ…。我狼を殺すために…。」

「素直に着いて来ないなら…連れていく。力づくでな…。」

リオンの蒼い瞳にギロルの赤い瞳がうつった。（…なんだ？）

鍛冶屋に戻り、左腕を隠すため包帯を巻いていた我狼だったが…

（…嫌な予感がする…。）

ガタン！

「！」

突然の物音。

しかも物音がしたのはリオンの部屋。
リオンはもう寝ているハズだ。
まさか。
（…まさか…！）
「リオン！リオン入るぞ！！」
ドアを開ける。
そこは…
荒れた室内。
そしてリオンとは違う茶色の髪の毛。
「クソッ…！！」
リオンがギロルに連れ去られたのは明らかだった。

侵食（後書き）

作者の怜でございますはい。

予告通りにならなくてすいません。

前半はギャグ。後半はシリアスにしてみました。（上手く出来たか分かりませんが…。）

ここで捕捉的な物を加えておきますね。

我狼の左腕は獣の様な形ってありますけど肉球はありませんからね！！↑

肉球あったら物掴めませんから！！

悠輝さんがリクエストしてくれた我狼とリオンの一年前の話はこの小説が終わった後、最終話の後に投稿しようと思います。

それまですいませんがお待ち下さいｍ（＿＿）ｍ

今回はおまけもありますよ～（＾ｏ＾）／

～おまけ～

涼「我狼！どういう事や！？」

我「…なんだ。」

涼「この煮干し…！！」

我「その煮干しがどうした。減塩タイプだぞ。」

涼「ちゃうんや…！！この煮干し…ッ！！」

涼「国産や無いんやぁぁぁ！！（叫）」

我「……。」

涼「……。」

我「国産かぁ…。」

涼「国産や。」

我「輸入品じゃ駄目なのか…。」

涼「駄目や。」

我「…そうか。」

涼「次回から頼むで。（バリボリ）」

我（輸入品でも食ってるだろ…。）

我狼さんはもう涼雅さんの煮干し好き過ぎる症を諦めてれば良いと思います（笑）

金色の雌狐（前書き）

地震の被害にあった方々大丈夫ですかぁぁぁ！！？

私は長野なので余り被害はありませんが…

心配です…。

早くおさまると良いですね…。

金色の雌狐

「クソッ…！」

荒れた室内。

「どうしたんや！我狼！？」

部屋に駆け込む涼雅。

「…！」

「…何や。これ…。」

涼雅が気づかなかったのも無理は無い。

この部屋と涼雅が居た部屋はかなり距離がある。

「リオンが…連れて行かれた。」

「何やて！？」

「部屋の中にあいつのと違う色の髪…茶色の髪があった…。」

「ギロルだ…！！」

そう言うと我狼は太刀を背負う。

涼雅が問う。

「行くんか？」

「当たり前だ。」

我狼が即答する。

「せやけど！」

「…危険すぎるで…。」

涼雅が俯く。

涼雅もリオンの身を心配しているのだろう。

最後の方は声が小さい。

「……ぃ。」

我狼がボソリと呟く。

「？」

涼雅が顔をあげる。

「リオンを…優奈と同じ目にあわせる訳にはいかない。」

我狼の鋭い隻眼。

告げたと同時に走り出す我狼。

「待て！我狼！！」

涼雅の咎める様な声が聞こえたが立ち止まる訳には行かなかった。

「ここか…。」

我狼の目の前には涼雅が言っていたギロルがいると言われる建物。

（…似ている。）

かつて自分が合成獣にされた研究所に。

それに確か自分が合成獣にされた研究所もこの辺りだったはず。

「チッ…」

扉の前で小さく舌打ちをして開ける。

「…？」

おかしい。

人の気配がしない。

（…何故だ？研究員がいるはずだが…。）

すると…

コツ…コツ…

「来たか。」

「…ギロル。」

現れた茶髪の男。

「意外と早かったな。」

「…リオンは何処だ。」

ギロルの言葉を無視して問う。

「…会わせてやる。」

「…なんだと？」

パチンッ！

ギロルが指を鳴らした瞬間。

ビッ！

「…っ！？」

腕に鋭い痛み。

腕を見ると何か刃物で斬りつけられた傷口。

ズバババッ！

「ぐあっ！！」

何かが高速で移動し我狼を攻撃する。

「何だっ！？」

傷口は浅いため、そこまでダメージは無い。

だが目に見えない、攻撃者に警戒する。

ヒュッ！

「！　そこか！！」

ブンッ！！

殺気を感じ、右に太刀を振る。

だが…

トン…ッ

「…！？」

太刀の上に人影。

ザンッ…！

我狼の肩が引き裂かれる。

「ぐっ…！」

人影の正体は…

「…その姿は何だ。」

「…リオン。」

９つの狐の尾と紅い瞳をしたリオンだった。「どういう事だ！ギロル！！」

「ククク…」

おかしそうに笑うギロル。

「覚えているか？我狼。ここはお前が合成獣になった研究所を改装した所だ。」

通りで。最初に思った通りだった。

「今となっては昔話だが…お前がここから居なくなった後、何人か実験台を連れてきた。」

「お前が狼と合成された時、疑問に思った。すでに合成されている合成獣と人間を合成したらどうなるか…。そのための実験台だ。」

「そしてその中に１人、面白い少女がいてな。」

ギロルの口が弧を描く。

「まさか…」

我狼がリオンを見る。

「そのまさかだ。」

「少女の名は…」

「望月鈴音」「…！！」

我狼の目が見開く。

「鈴音が初めてだったよ。合成獣である九尾の狐との合成に成功したのは。」

「だがやはりもとからの合成獣と合成したことで負担が加わった。」

「お前と同じ様に感情を持ち、そして…記憶を失った。やはり、もとからの合成獣との合成は無理があったと言うことだ。」

ため息をつくギロル。

「では…鈴音の記憶は…貴様が…。」

「ああ。そうだ。お前と同じくこの研究所を去ったが生きていたとはな。」

「…1つ、質問がある。」

静かに言う我狼。

「なんだ？」

「鈴音の家族は、どうした。」我狼の隻眼がギロルを捕らえる。

ギロルは笑って言った。

「全員殺した。両親と…兄が居たな。」

「…ッ！！」

「その事を知った時の顔は見物だったな。」

「話したのか…！？」

「ああ。」

『嘘だ…ッ！！』

「そう泣きながら言って聞かなかったがな。」

「…貴様ッ！！！」

我狼がギロルに斬りかかる。

ガキンッ！

「鈴音！？」

だが鈴音が2人の間に割って入り、我狼の太刀を防ぐ。

「鈴音も不完全だが合成獣だ。薬を注入すれば後は良く言うことを聞く。」

満足そうに笑うギロル。

「くっ…！退け鈴音！！」

「……。」

我狼が叫ぶが鈴音は冷たい紅い瞳で我狼を見るだけ。

「私を殺したいならまず鈴音を倒す事だな。お前に鈴音を倒せるとは思えんが。」

ギロルがそう言い部屋を後にする。

「待て！ギロル！！」

追うとしようとすると鈴音が立ちふさがる。

「鈴音…。」

苦い顔で太刀を握る我狼だった。

金色の雌狐（後書き）

今回も少し捕捉を…

リオンの本名は望月鈴音でした。

鈴音はリオンと読みますよ～。

すずねじゃないですよ～（＾ｏ＾）／

で、鈴音も実は合成獣でした。

今までそんな素振りは無かったんですが、我狼と同じ薬を注入された事で合成獣になりました。

次回は我狼ＶＳ鈴音です。

…うわ～。

泥沼ですね（爆）

←おまけ☆

～おまけ～

我「鈴音、お前合成獣だったのか？」

鈴「はい。狐の尻尾ありますよ。」

我「…重くないか？」

鈴「…若干（汗）」

我「よくあんなに走れるな。」

鈴「めっちゃ体力使うんです。バテバテですよ。」

我「…そうか。」

鈴「はい。（ユラユラ）↑尻尾揺らし」

我「Σ（。д。；；）」

我（…動かせるのか…？）

狼ＶＳ九尾狐

ガキャンッ！

太刀と双剣がぶつかる。

「くっ…！」

戦っている我狼だが相手が鈴音と言う事もあり防戦一方。

「鈴音！俺だ！我狼だ！！」

呼び掛けるも無反応。

（気絶させるのが１番だが…気絶させられるかも分からない…）

肩からポタポタと流れる血。

ヒュンッ！

「！」

横に振られた双剣を伏せて避ける。

だが伏せた我狼に鈴音が蹴りを放つ。

ガンッ！

それを太刀で防ぐ。

ブシュッ！

「ッ！！」

しかしそのせいで肩から血が吹き出す。

そこにもう一発鈴音が蹴りを放つ。

ガンッ！

「ぐあっ！！」

ドカッ！

壁にぶつかる我狼。

蹴られた際に切れたこめかみから血が流れる。

「くそっ…！」

鈴音の紅い瞳が静かに我狼を捕らえていた。ーお前は合成獣だー

茶髪の男から発しられた言葉。

何故？

自分に思い当たる事は１つも無い。

そして次の言葉はもっと自分を困惑させた。

ー自分の名を覚えているか？…本当の名をー

自分はリオン。

だが本当の名…？

思いだそうとすると突然頭痛。

ーお前の本当の名は…ー

頭痛の中、頭に浮かぶ知らない人間。

そしてその中に優しく笑う金髪の青年。

『鈴音』

その金髪が一瞬正反対の銀髪に見えた気がした。

ー望月鈴音ー

目の前の男が口にしたその名を聞いたとたん、全てを思い出した。

兄は…両親は…この男に殺された。

嘘だ…

嘘だ…

『嘘だ…ッ！！』

兄の最期は…

ギロルの槍から自分を庇って死んだ…。

涙が零れ落ちた。

そして腕に少しの痛みを感じ、意識が暗転した。目の前には銀髪の男。

仕切りに何かを叫んでいる。

誰だか知っている気がする。

だが確実には分からない。

兄の事で心に穴が空いた。

この男を…殺そう。

この男を殺したらこの穴が塞がるかもしれない。鈴音の攻撃は止まらない。

ガキャキャン！！

双剣の連撃を太刀で流す。

息切れをしている我狼。

その身体はボロボロだった。

（殺す訳にはいかない…。）

だが、鈴音が再び双剣を振った時…

バチンッ！

「…ッ！？」

我狼の手から太刀が引き剥がされた。

そして鈴音の双剣が我狼を狙う。

「鈴音…！！」

「…！！」

鈴音の動きが止まった。私が…何をしたんだろう…？

何故…兄さんや父さん、母さんが殺されなきゃいけなかったんだろう？

何故…私は…こんな化け物になったんだろう…？

なんで…私だけ…生き残ったの…？

兄さん…。

『……。』

兄さん…？

『……ん』

違う…。

『り…ん』

誰だろう…？

『鈴音…！！』

先生…。「く…ぅ…」

双剣を持つ手がカタカタ震える。

兄さんは…もう…

イナイ…。

「っく…う…！！」

「鈴音…！？」

突然鈴音が苦しみ出す。

「っあああああああああああ！！」

ーなんで…ー

ーなんで兄さんが…ー

ーなんで父さんと母さんが…ー

双剣を持ち直し、突きを放つ鈴音。

その頬には涙が伝う。

合成獣として暴走した事で鈴音の身体は傷だらけだった。

我狼が鈴音に出来ることは…ただ1つだった。

「…すまない。」

ドガッ！

我狼の重い一撃。

ズドン！

双剣の一本が地面に刺さる。

ドサッ…！

倒れる鈴音。

「…な…んで兄さ…ん達が…」

「な…んで…！！」

「……。」

絶え絶えに鈴音の口から零れる悲痛な言葉。

ガリ…！

双剣を持っていない片方の手で地面に爪を立てる。

「兄…さん…。」

カタン…

鈴音の手から双剣が落ちた。

狼ＶＳ九尾狐（後書き）

はい。泥沼な話です（爆）

今回もまたまた捕捉を…↑多すぎだろ。

金髪の青年君は鈴音の兄さんですよ～。

一瞬銀髪に見えたってのは、我狼に見えたってことです。。

分かりづらくてすみませんｍ（＿＿）ｍ

おまけなり。。

～反抗期な弟子とその師匠～

我「いい加減にしろ！鈴音！！」

鈴「うっさい！私の好きにさせて下さいよ！！（怒）」

我「だれがうるさいだ！！（怒）」

ギャーギャー！

鈴「何も知らない癖に口出ししないでくださいよ！！（怒）」

我「なんだと！？（怒）」

鈴「私知ってんですかんねー（ー＋ー）」

鈴「ぶっちゃけ先生前回まで私が合成獣って気づかなかったんでしょー。」

我「Σ（。д。；；）」

鈴「ハッ！これだから大人は…（∀）」

我「黙って聞いていれば言ってくれる…（一言一）」

鈴「Σ（・o・；；）」

我「お前の為を思って言って無かったが…暴露してやる！！」

我「実は鈴音はわさび入りの寿司を食べられｎ…鈴「すいませんでしたぁぁぁ！！！」」

我「その歳になって珍しい…なぁ１４歳！！（黒笑）」

鈴「ひっく…（T＾T）」

我（勝った…）

鈴（負けた…）

終わっとけ。

ぶっちゃけ鈴音、辛い物全般が食べられｎ…（双剣刺さり）ふぶべっ！！

最終的にはやっぱ我狼さんが勝ちます。

怖い大人には逆らっちゃ駄目だｙ…（太刀刺さり）うぎゃあああああああ！！

…マジで終わっとけ。（、・∀・）

別離（前書き）

早い時間に投稿してみました（笑）

皆さんごゆるりとお楽しみ下さい（＾ｏ＾）／

別離

鈴音との勝負に勝った我狼。

だが…

「…なんだ！？」

沢山の気配。

「ガルルルル…」

「チッ…」

現れたのは沢山の合成獣。

しかし数が半端では無い。

１００、１５０それ以上いるだろう。

（ギロル…最初からそのつもりで…！）

（どうする…！？）

「ガウッ！！」

「くそっ！」

合成獣が我狼と鈴音に襲いかかる。

鈴音を後ろに庇いながらその合成獣を切り捨てる我狼。
だが背後に忍び寄った別の合成獣が我狼を襲う。
「ガアッ！」
「くそっ…！」
その時…
「だーから待てって言ったやろ。馬鹿我狼。」
「！！」
ズドォンッ！！
突然の爆発。そして爆煙の中から現れた人物に悪態を吐く我狼。
「ずいぶん遅かったな。」
「お前なぁ…」
「来たからには手伝ってもらうぞ。…涼雅。」
「…しゃーないな。最後まで付き合ったるわ！！」
ニッと笑ったのは涼雅。
「…！」

「…リオンか？」

鈴音の姿を見て、驚く涼雅。

「ああ。話は後だ。本当の名は望月鈴音。それだけ言って…置く！！」

近くにいた合成獣を斬り付けながら言う我狼。

「…分かった。」

「にしても凄い数やなぁ…。」

飛び込んで来る合成獣を薙刀で叩き落としながら背中合わせの我狼に言う涼雅。

「当たり前と言えば当たり前だな。一応ここは敵の本拠地だ。」

「…（・□・；；）」

→の様な表情の涼雅。

「…知らないで来たのか？」

呆れを通り越して可愛そうな物を見る目で涼雅を見る我狼。

「わい帰っていい？」

バッ！と効果音が付きそうな速さで我狼に振り向きながら聞く涼雅。

そんな涼雅を…

「駄目だ。」

一刀両断。

「ですよね～（泣）」

「良いと言うと思ったか？それにお前さっき最後まで付き合うって言っただろ。」

淡々と涼雅に事実を話す我狼。

「あーあーあー分かった分かりましたー。」

もはや自暴自棄な涼雅。「でもこんなちまちまやっててても減らんやないか。」

「一理あるな…。」

先ほどから戦いながら喋っているが一向に合成獣が減らない。

「我狼…」

「何だ。」

「派手にいくで

（ー＋ー）ニヤリ」

「！！」

ニヤリと笑った涼雅に悪寒を覚える我狼。

「んじゃいっくでー。」

「ちょっと待て。」

シュビッと魔法を放とうとする涼雅を手で制す。

「何や。」

「お前の派手にいく宣言は危険過ぎる。俺と鈴音も巻き込まれかねない。」

実は過去に我狼は涼雅の魔法で痛い目にあった事がある。

その魔法を撃とうとしているのだ涼雅は。

「あれだけは絶対撃つな。絶対に。俺はあれに巻き込まれて数日動けなくなった。」

「あっはっは。そうやったっけ？」

笑い飛ばす涼雅に軽く殺意を覚える。

敵に囲まれながらのんきな2人。

ぶっちゃけ我狼はそうじゃないが。

そんな二人に…「グオオォォォ！！！」

「「……。」」

今まで戦ってきた合成獣とは比べ物にならないほどの大きさの合成獣が襲いかかる。

「前言撤回。撃て。」

「へーい。」

我狼即前言撤回。

ダッ！！

涼雅が返事をした瞬間二人で走り出す。

「「う…おおおおおおおおお！！！」」

本気と書いてマジなダッシュ。

ズザザザ！！

ギロルが消えたドアの向こうに滑り込む。

「「「ガアアアァァァ！！」」」

当然巨大な合成獣も普通の合成獣も二人を追いかける。

だが合成獣達の前に涼雅が立ちふさがる。

「ごくろーさん。…でも、残念やったな。」

涼雅がドアを閉め、我狼と一緒に耳を塞いだ次の瞬間。

ズガァァァン！！

「っ！？」

「（―△―）」

我狼は今までと比べ物にならない震動に驚くが涼雅はいたって無表情。

パラパラ…

部屋を覗くと一面真っ黒。

焦げ臭い。

だが…

ガラッ…

「ギャオオオオ！！」

「なっ…！？」

「なんやて！？」

あの巨大な合成獣だけが生きていた。

「マジかいな…。」

「チッ…！」

鈴音を壁に寄りかからせ太刀を構える我狼。

「…戦うんか？」

「ああ。ギロルはこの先にいる。奴を今回で倒す…！何があってもな…！！」

「…さよか。」

我狼は気づかなかった。

我狼にとって死角である左横で涼雅が満足そうに笑ったのを。ドガッ！

「ぐあっ！！」

涼雅が我狼をドアの向こうに蹴り飛ばす。

そして素早くドアを閉め、薙刀で鍵をする。

「っ…何をする！？ここを開けろ！！」

ドアの向こうで叫ぶ我狼。

「我狼…行け。」

そんな我狼に低い声で言う涼雅。
「！？」
「何を…言っている…！！」
ギリッ…と歯ぎしりをする我狼。
「今回で何があってもギロルを倒すんだろう？」
「ならこんな所で体力消耗させる訳にはいかないだろうが。」
はぁーとため息を吐く涼雅。
「だが…！！」
「大丈夫だ。鈴音は俺が守り抜く。例え俺が死んでもな。」
「…涼雅。」
「ほら。早く行け。早くしないとギロルが逃げちまうぞ？」
悪戯っぽく笑う涼雅は…覚悟を決めている。
それに我狼は気付いた。
「…死ぬなよ。」
「そっちこそ。」

ダッ…！！

「…さーてと。」

我狼が走り去ったのを確認すると薙刀を取り、そして…

「お前の相手はわいや。」

目の前の巨大な合成獣に向かって構えた。

別離（後書き）

涼雅さんが漢（おとこ）になった…！！

（。д。；；）

わぁ～びっくり～（笑）

関西弁じゃなくしただけなのにあんなに漢になった～ｗｗ

いつもあーゆーキャラだからびっくりですよ私。。

関係ありませんが…今日我狼さんと鈴音と涼雅さんを書いてみました（笑）

感想…我狼さんが若くなった（爆）

感想その２…鈴音髪型チョームズい（汗）

感想その３…涼雅さんチョー童顔（笑）（一応童顔設定なんだから良いんだけど…度が過ぎた（笑））

感想その４…みんな身体が無いｗｗ

結果…私には絵の才能が皆無！！！

誰か書いてくんないかなー。。

おまけアルヨー！←なに

涼「わいがカッコいい！！（喜）」

我「やっぱり関西人被れなんだな。」

涼「Σ（。д。；；）」

我「やっちまったみたいな顔するな。標準語ベラベラだぞお前。」

涼「てへっ☆（≧≦ω≦≧）」

我「気持ち悪い。いくら童顔でも３０代のおっさんには無理がある。」

涼「ガー（。д。；）ーン」

鈴「作者死ね…作者死ね…作者死ね…作者死ね…作者死ね…作者死ね…作者死ね…作者死ね…（エンドレス）」

涼「り…鈴音が…」

我「…出番が無いのと前回から反抗期なんだ。あいつ。」

鈴音ひどいっ！！

そして涼雅さんやはり被れ…（笑）

鈴音の反抗期はいつ終わるのでしょうか我狼さん悩み所ですね（笑）

衝突

巨大な合成獣と交戦中の涼雅。

その正体は猪。

だがただの猪では無い。

目玉が全部で４つ。

牙が普通の猪の何倍もの大きさ。

（さっきの魔法でだいぶ弱ってるはずや…！）

「ガァァァ！！」

「うおっ！？」

ズガァンッ！！

猪が突進してくるのをギリギリで避ける。

猪はそのまま壁に激突。

だが猪はダメージが無いように再び涼雅に向き直る。

「こッ…んの！！」

バギッ！！

涼雅が渾身の力を込めて薙刀で猪を殴る。

（どうや…！？）

一瞬猪の動きが止まる。

だが…

「グォォォ…！！」

再び涼雅に向かって突進してくる。

「やべっ…！！」

攻撃をした為、体制が崩れ防御出来ない涼雅。

「こんにゃろ！！」

バンッ！

だが地面に勢い良く手をつく。

すると…

ドゴンッ！！

「グガッ！！」

猪の真下から柱が現れる。

その柱が猪の腹に直撃した。
悶えながら猪が倒れた。ドガンッ！！
「何処だ！？ギロル！！」
扉を蹴破り叫ぶ我狼。
「ほう。鈴音とあの合成獣の群れを突破してきたか。」
そこに響いた声。
我狼が声のした方を向くとそこには…
「驚いたな。」
ギロルがいた。
「もう少し合成獣を創って置けば良かったか？
…いや材料が足りないな。」
「…あれだけの数の合成獣…材料となる動物は何処から手にいれた？」
静かに問う我狼。
ギロルはいつもの様に笑って言った。
「あれらは全て人と動物の合成獣の失敗作だ。材料は…ここの研究

員だよ。全員…な。」
「外道が…！」
これで納得がいく。
自分が合成獣にされた頃は研究員が沢山いた。
だが、その研究員達がギロルの実験の材料にされたのだ。
「さあ、始めようか我狼。」
ギロルが槍を構える。
「殺し合いを。」
ヒュッ！
「！」
ギロルが言った瞬間。
槍が我狼の目の前にあった。
「くそっ！」
ガキンッ！
なんとかその槍を太刀で弾く。

だが…

ヒュンッ！

「っ！？」

思わぬ方向から再び槍の刃が我狼を襲う。

（2本！？）

ギロルの手には2本の槍。

「くっ…！」

なんとか紙一重で避ける。

ザッ！

一度ギロルと距離を取る我狼。

「どうした？その程度か？」

クルクル槍を回すギロル。

「疼くんだろう？その左手が。」

ギロルが我狼の左手を見る。

「いっそのこと解放してしまえばどうだ？」

「…なに？」

我狼が怪訝そうな顔をする。

「お前の中の狼の力を解放し、合成獣として私と戦えば私に勝てるかもしれないぞ？」

妖しく笑うギロル。

「誰が…！！」

断固としてその提案は受け入れない我狼。

「ならば…私に殺されろ！！」

再び槍が我狼を襲った。「ふー…。」

目の前で倒れている猪を見下ろす涼雅。

（我狼の所に援護しにいくか…それとも鈴音を安全な場所に避難させるか…）

カツ…

「？」

考えていた涼雅の足に当たったのは…

「鈴音の双剣…？」

だが変だ。
確かに鈴音の双剣だが赤い血がべったり付いている。
（…まさか。）
涼雅の頭によぎる嫌な予感。
だが…
「グゥゥゥ…！！」
「！！」
「鈴音！！」
生きていた猪型の合成獣が鈴音に向かって突進している。
確実にあのままでは鈴音は合成獣の牙で串刺しだ。
（くそっ…！！）
ズガンッ！！
合成獣の牙が何かに当たった鈍い音がした。ガキンッ！！
太刀と槍がぶつかる。
ギギギ…！

太刀と槍の刃が交わり力比べとなる。

「…どうやら。」

ギロルが口を開く。

「お前の動きが鈍いのは…左手のせいだけでは無いようだな。」

「！！」

ギロルの言葉に目を見開く我狼。

（気付かれたか…！！）

脇腹から滲む血に。

スパンッ！

「ぐあっ！！」

ドサッ！！

足払いを仕掛けられ倒れる我狼。

ガンッ！！

「ぐっ…あああああ！！」

ギロルが血が滲む脇腹を踏みつける。

「鈴音にやられた傷か…下らん情に流された結果だな。」

冷たい目で我狼を見下ろすギロル。

「だ…まれ…っ！！」

ヒュッ！！

太刀をギロルに突き出すが避けられる。

「ゴホッ…」

「情などに流されたお前が私に勝てるか？」

「……。」

無言で再び太刀を構えた我狼だった。「…ぅ。」

ゆっくりと瞼を持ち上げる鈴音。

目眩がするのを耐えながら辺りを見回す。

1番最初に見えたのは猪型の合成獣。

「合成獣…！？」

そしてその牙は真っ赤に染まっている。

そして次に眼に入ったのは…

「…え？」

「…よォ…鈴音…目ぇ…覚めた…か？」

血塗れの涼雅。

「涼…雅…さん？」

涼雅の身体が傾き始める。

ドサッ…！

「涼雅さん！！」

カラン…

涼雅が倒れ、血に濡れた薙刀が転がった。

衝突（後書き）

はい。作者です。

後先考えずに書いたので後戻り出来なくなった結果です。はい。

薙刀が飛んでくる前に逃げようと思います。はい。

お…おまけ…（怖）

涼「うし。んじゃそろそろ行くか。鈴音。」

鈴「はい！（・∀・）ゞ」

我「…薙刀と双剣持って何処に行く。」

鈴「へ？」

涼「そりゃあ…」

涼&鈴「「作者を殺しに。」」

我「……。」←大体分かってた人。

我「何故だ。」

涼「お前もう分かっとるやろ。」

我「…一応確認だ。」

鈴「とりあえず私は日頃のストレス解消と、久しぶりの出番なのに1ページしか出番が無い事です。」

我「…次（まだ反抗期終わって無かったんだな。）」

涼「わいは言わなくてももう分かってると思うんやけど、死亡フラグ建てた上に見事に期待を裏切らない作者を殺しにいこうかと。」

我「……。」

涼「浮かない顔やなぁ。作者を殺した方がこの小説の為になると思うで。」

我「何故だ？」

涼「ぶっちゃけた話すると悠輝はんが書いてくれた感想見て「うわやべ読まれてるぅぅぅ！！」て作者が超叫んでたんや。」

我（…最悪だ。）

涼「1回死んだら作者も予想外の小説書けるんやないか？」

我「…そうだな。」←折れた

鈴「と言う訳でいってきます！」

我「鈴音！涼雅！」

鈴&涼「「？」」

我「せめて生殺しにしておけ。」

鈴&涼「「気が向いたら。」」

我（…作者確実に死んだな。）

鈴音と涼雅に怯えた日々を送ってます…（泣）

豹変

「涼雅さん！！」

涼雅に駆け寄る鈴音。

かろうじて息はしているが腹部からの出血が酷い。

「ガゥゥゥ！！」

「！」

止血をしている暇も無く合成獣が突進してくる。

「…ッ！！」

双剣の片方を盾にするが止められるか分からない。

その時…

ドンッ！！

「うわっ！？」

「ガァッ！？」

突然の爆発。

「鈴音…ボサッとしてる…場合やないで…。」

爆発の正体は涼雅の魔法。
だが弱っているせいか魔法の威力も弱い。
現に今も薙刀を支えになんとか立っている状態。
「涼雅さん！」
「ゲホッ…。いいか？鈴音。わいが魔法撃てるのは後1回が限界や。」
「けど当てられるか分からん…。だからあいつの動きを止めてくれ…。それができない限り…あいつには勝てへん…！」
ボロボロの涼雅にこれ以上負担はかけられない。
「…はい！」
鈴音の紅い瞳が光った。ガキンッ！！
「はっ…はっ…」
ギロルと戦っている我狼。
だが、ギロルの操る二槍に圧され気味。
（どうする…？このままでは…）
（奴の武器は間合いが長い…懐に潜り込めば…勝機はある。）

（…賭けてみるか。）

ヒュンッ！

ギロルの槍が我狼を狙う。

我狼が左に顔をずらす。

ビッ！

我狼の右頬が斬れる。

（捕らえた…！）

ギロルのもう片方の槍が我狼の首を狙う。

ブンッ！！

「なにっ…！？」

槍が宙を切り、ギロルの視界から我狼が消えた。

（何処だ…！？）

突然の事に同様するギロル。

「下だ。」

すぐ下から我狼の声。

「！」

ギロルが気付いた時には太刀が目の前にあった。

ザンッ！！「本当にあれが鈴音かいな…。」

涼雅が見たのは獣の様な速さで合成獣を攻撃している鈴音。

（…身体中が痛い。）

だが鈴音は合成獣の力を使っていながら自我を保っている。

その事で身体は傷つき、精神は自らの中の九尾狐に取り込まれない様に必死な状態。

（この合成獣を倒すまでは…！！）

今の鈴音はこの思いで身体を突き動かしていた。

「ガァァァ！！」

「っ！」

ガキンッ！

「うわっ！？」

合成獣に突進され双剣を盾にしたものの吹き飛ばされ、転がる鈴音。

「いっ…た…」

起き上がろうとした時。

「なっ…！？」

目の前には合成獣の牙。

ガギンッ！

「く…！」

ギギギ…

双剣で牙を防ぐがこのままでは押し潰される。

「…っおお！」

ガンッ！

「ガァ！？」

合成獣を蹴り飛ばす。

思わぬ反撃に合成獣が体制を崩す。

（今だ…！）

ダッ…！

駆け出し合成獣に攻撃しようとする鈴音だが…

ブシュッ！！

「っ…！！」

「鈴音！！」

とうとう身体が負担に耐えきれずに双剣を持つ左手から血が吹き出す。

だが…「こんな…所で！！」

鈴音の戦意は失われなかった。

「おおおお！！」

ザンッ！！

「ギャオオオオ！！」

双剣が合成獣の前足を切り裂く。

「よおやったな。鈴音。」

そこに涼雅の声。

タッ！

鈴音が後ろに下がる。

「終わりや。」

ズドォン！！

爆発が合成獣を襲う。

「ギャアアアアアア！！」

「うっ…く…」

凄まじい爆風。

「ギ…ギ…」

ズドン！

薙刀が合成獣の脳天に突き刺さる。

「また動かれちゃたまらへんからな。」

ズダァン…

遂に合成獣が倒れた。

「は…はっ…」

未だに荒い息をしている鈴音。

ガクッ…

「涼雅さん！」

だがすぐ隣で涼雅が膝をつく。

「あ〜〜〜。血ぃ流しすぎた〜。」

のんきに言っているが顔色が悪い。

「待ってて下さい。今止血を…」

それなりの被害はあったがなんとか合成獣を倒した鈴音と涼雅だった。カラン…

ギロルの折れた槍が転がっている。

そして我狼の太刀はギロルを斬って…いなかった。

「…殺さないのか？」

太刀がギロルの首筋にぴったりとくっついている。

「…貴様の事だ。戦いを楽しむ為に合成獣の…獣の力を抑える薬を用意してあるんだろう？」

「良く分かったな。」

ギロルがポケットに手を入れて出したのは小さな瓶。

中には液体が入っている。
「それを寄越せ。貴様を殺すのはその後だ。」
我狼の隻眼がギロルを射抜く。
それにギロルは笑う。
「使うのか？…いや。」
「鈴音か。」
ギロルの口は弧を描いたまま。
「お前は使わないのか？」
「俺が使った所で…俺はもう人間には戻れないだろう。」
包帯の下の左手が頭に浮かぶ。
「確かにお前はもう人間には戻れない。鈴音は…時間の問題だな。」
「ならば早く寄越せ。」
ギロルがクックッと笑いながら言った。
「ならば奪ってみたらどうだ？まあ、貴様には不可能だとは思うがな。」
「なに…？」

我狼が怪訝そうな顔をした時…ズガァン！！

「がはっ！！」

凄まじい力で壁に叩き付けられる。

「ゲホッ！ガハッ！」

大量の血を吐く我狼。

傷がある右脇腹と反対の左脇腹に鋭い痛みが走る。

あばら骨が折れていた。

（何だ今のは…！？魔法か…？いや違う！！）

「なる…っほど…！！」

「貴様も…合成獣…！！」

「そう。私…いや我こそが成功作…。気付くのが遅かったな。愚か者よ…。」

メキメキ…！

ギロルの身体が異様な形になっていく。

その姿は…

「ライ…オンとの合成獣…か…！」

まさにライオン。

「我が…名は…ギロル…足掻いて…見せろ…。」

（…人格が変わっている。）

そこにギロルの姿はもう無い。

「愚かは…どっちだ…！！自我を…獣に喰われた奴が…！！」

我狼が再び太刀を構えた。

豹変（後書き）

あい。作者でございます。

ギロル本性現しましたね（笑）

再びここで捕捉を。。

ギロルは我狼と優奈と鈴音の研究結果から生み出したライオンの遺伝子が入った薬を作り出して自分に投与しました。

結果あんな化け物になっちゃった訳ですはい。

それと裏話ってほどでもない裏話。↑

この小説書いてて気づいた事。

てか読者の皆さんに言って無かった事。

あれ？ここの小説の登場人物ってみんなギロル以外名前漢字じゃね？ヤバくね？

ってなったので負け惜しみじみた設定を書きます。

我狼さんと鈴音と涼雅さんは全員国籍日本です。

何故髪の色や眼の色が銀や金とか青や灰？と言うと…

それは遺伝子です。はい（爆）

まずは鈴音。

ぶっちゃけハーフですはい。

父親が日本人。母親が金髪に青眼の外国人

んで母親の遺伝子を受け継いで外国人みたいに…

でもバリバリ日本人ですはい。。

んで鈴音の兄ちゃんは母親の金髪に父親の茶色の眼を受け継ぎました。。

長くなっておまけが入らなくなりそうなのでとりあえずここまで。。

次回は我狼とかその他の方々の設定載せます。。

でわでわm（＿＿）m

おまけぇ～↑

鈴「～♪（≧ω≦）」

我「偉く機嫌が良いな。」

鈴「そうですか～？えへへ～♪」

我（やっと反抗期が終わったか…。）

涼「～♪（≧ω≦）」

我「…何かアウトだぞお前。」

涼「なんでやねん！！」

我「１４歳の鈴音はストライクゾーンの読者はいるだろうが３０代のお前は何か奇跡が無い限りボールゾーンだ。」

涼「…わいでも傷つく事あるんやで。」

鈴「切実っ！！」

涼「てかスゴくないか！？わい！！死亡フラグくぐり抜けたで！！」

我「そこは認める。確実に死ぬと思ってた。」

鈴「作者を襲撃しにいった甲斐がありましたね♪」

我「やっぱいったのか。」

鈴「はい。勿論。」

我「そして俺の相手は何だ？つけか？お前らが襲撃にいった当て付けか？」

涼「血ぃ吐くとかエグいな。」

鈴「そしてまさかの化け物相手。」

涼&鈴「ファイト！ｐ（＾－＾）ｑ」

我「……。」

我狼さんファイト～ｐ（＾－＾）ｑ

ライオン

ドンッ！！

「くっ…！！」

ギロルと戦闘中の我狼。

だがその力は圧倒的なもの。

相手は武器を持っていないと言うのに確実に圧されている。

ブンッ！

「！」

ギロルの拳が我狼を狙う。

ガキンッ！！

「っ…ぐお！？」

ズダン！

太刀を盾にしたのにも関わらず壁に叩きつけられる。

ギロルの力に壁がへこむ。

「ぐっ…！？」

目の前にはギロルの拳。

「っ！！」

ドガンッ！！

咄嗟に下へ伏せる。

ギロルの拳が壁に激突する。

ギロルが拳をどけると壁に穴が開いていた。

「やはり…愚者は貴様だ…我狼…。」

「なに…？」

「貴様は…成功作に歯向かう愚かな失敗作だ！！」

その言葉と共にギロルの拳が伸びる。

今度は避ける事も防ぐ事も出来なかった。

ズガンッ！！

「がっ…！！」

今度は床に叩きつけられる。

「ぐ…あ…」

叩きつけられた衝撃に動けずにいる我狼に聞こえる声。

「力を求めろ！！求め、獣となり我に歯向かってみせろ！！失敗作よ！！」

「貴様の様な化け物になるくらいなら…失敗作の方がマシだ…！！」

我狼がギロルを睨みながら言った瞬間。

ドン！！

ベキバキ！

ギロルが我狼の右腕を踏む。

骨が砕ける音がした。

「…っあ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛！！」

「利き腕を潰されては太刀を握れんだろう…。」

ギロルの拳が我狼に迫った。「…止血終わりましたよ涼雅さん。」

「おう。ありがとうな。死ぬかと思ったで～。」

ほ～とため息を吐く涼雅。

ズガァン…！

「わ。」

「…またか。」

先ほどから震動が続いている。

（これだけの震動が続いてたらその内絶対にこの建物は崩れる…。我狼連れてさっさと逃げるしかない…。）

（無事ならええんやけどなぁ…。あいつの事やどこかしら怪我してるやろ。）

（…何だろう？凄く…凄く嫌な予感がする…。）

鈴音がそう思った時…ドガシャン！！

「っ！？」

「何や！？」

瓦礫と共に何かが吹き飛ばされて来た。

それは…

「先生！！」

ボロボロの我狼。

気絶している様で反応が無い。

そして奥の方からゆらりと現れたのは…

「あれは…ギロル…？」

「何やて！？」

涼雅が驚くのも無理は無い。

そこに居たのはもはや人間の面影も無い化け物。

身の内のライオンに自我を喰われ、力に執着し獣そのものに成り下がった化け物。

そこにギロルの姿は無く、まさに二本足で立ったライオン。

鋭い爪と牙に巨大な身体。

そしてその腕で我狼の頭を掴み持ち上げる。

我狼の腕が力無く揺れる。

「我狼！」

「ク…クク…」

不気味に笑いながらギロルが拳を振り上げた。ブシュッ！！

辺りに血が飛ぶ。

「鈴音！？」

我狼の頭を掴んでいる腕に鈴音が双剣の一本を刺した。
鈴音の頬に血が跳ぶ。
「こ…のぉっ！！」
鈴音の赤い瞳がギロルをとらえる。
九つの尾が揺れる。
「我に攻撃を当てるとは…九尾の力が開花しているな…」
びくともしないギロル。
だが我狼を掴んでいる腕の力を緩める。
それと同時に地面に倒れる我狼。
「先生！」
我狼に駆け寄る鈴音。
「師弟もろとも…葬ってやろう…」
そこにギロルの拳が振り降ろされる。
「…ッ！！」
「死ね…」ガンッ！！

拳と何かがぶつかる音。
「これは…防御魔法…」
「え…」
ギロルと鈴音達の間には見えない壁。
その壁がギロルの拳を防いでいる。
「鈴音！下がるんや！！」
「涼雅さん！？」
鈴音の横には涼雅。
「二度はもたん！！」
涼雅が我狼を抱えて後ろに跳ぶ。
鈴音も同じように下がる。
ピシピシッ…
バギャンッ！！
「うおっ！？」
「うわっ！？」

ギロルの拳に壁が壊される。

「グオオオォォォ！！」

吼えるギロルはもう獣そのものだった。

ライオン（後書き）

あい。作者でございます。。

前回の設定の続きです。はい。

我狼さんです。

最初の方に書いてあったと思いますけど生まれつきです（爆）

灰色の眼は生まれつきですが銀髪は父親の遺伝です。。

あ、ハーフとかじゃないですよ。

両親二人とも日本人です。。

では何故？と言うと…

我狼の父さんの突然変異（又は生まれつき）と言い切る！！

うん分かってるよこの設定には無理があるwwなんや突然変異て…ww

涼雅さんはバリバリ日本人（笑）

黒髪だし（笑）黒の眼だし（笑）なにより関西弁だし（爆笑）

ギロルは外国人です。

まあ最初は茶髪に茶色の眼だったんですけど合成獣になって眼の色が赤になりましたはい。。

でもこの小説の舞台はどこ？って言われると何処ともいえません。すいません。。

以上ーどうでも良い設定でしたー。。

おまけぇぇぇ！！！↑

我「グロッ！！」

鈴「エグッ！！」

涼「ギロル怖っ！！」

涼「…今回それしか言う事ないで。」

我「待て。まてまてまて！」

鈴「今回はいつもにましてエグいですね。」

涼「我狼ー腕の骨砕けてっぞー。」

我「しかも壁突き抜けて転がってくるって…普通は内臓破裂だぞ。」

鈴「気絶だけで済む所はさすがですね。。」

我（…嬉しくない。）

涼「てかもはやギロルじゃないやん。」

我「ライオンだな。」

鈴「あれどうやって倒すんですかね？」

涼「作者は無計画や言うてたで。」

我「…アウト過ぎるな。」

やっちまいました
（´∀｀）ゞ

激戦

「グオオオォォォ！！」

「このっ！！」

ズドン！！

涼雅の魔法がギロルに直撃する。

だが…

「こんな物か…。」

「！」

爆風の中から現れた拳。

「っ！」

「涼雅さん！！」

ガンッ！！

薙刀を盾にするが…

バキバキッ！！

薙刀が折れた。

そしてその勢いのまま、壁にぶつかる。

ダンッ！

「ぐあっ！」

「ぐ…。」

立ち上がろうとすると脇腹に激しい痛み。

（傷口が…開いたか…。）

服に滲む赤い血

「終わりだ…魔術師よ…」

「くそ…」

ギロルの拳が涼雅に迫る。

だが涼雅に拳が届く寸前の所でぴったり止まる。

「…なんや？」

ギロルの視線の先には…

「おおおおお！！」

「鈴音…！！」

鈴音がギロルに双剣を向けている。
双剣の刃は一直線にギロルの首筋を狙っている。
しかし…
ザンッ！
双剣が突き刺したのはギロルの手。
「なっ…！？」
血が流れ、床に垂れているが本人は気にしている様子も無く言った。
「我に二度同じ手が通用すると思うな…。」
ゴッ…！！
「っ…ぐ…ぅ…！！」
ズザザ…！
ギロルの拳が鈴音を襲う。
双剣で防ぐが力負けして背中が壁にぶつかる。
だが拳の勢いが止まる事は無く、鈴音の身体が壁にめり込んでいく。
「っ…あああああ！！」

「鈴音！！」

「か…は…！」

自分で骨が軋んでいるのが分かる。

「く…そぉぉぉ！！」

鈴音を助けだそうとするが涼雅の身体は限界を越えていて動かない。

涼雅がギロルを見ると不気味に笑っている。

「…お前ッ！！」

怒りに涼雅が叫ぶがどうにもならない。

ギロルが鈴音を押し潰そうと力を入れる。

「鈴…！！」その時だった。

ダッ！

地を蹴り、ギロルの前に現れたのは…銀髪。

「…我狼！？」

左手の太刀でギロルの肩を刺す。

ザクッ！

そしてそのまま上に斬り上げる。

ザンッ！

「ぐ…おお…！！」

さすがに怯むギロル。

それと同時に拳の力から解放される鈴音。

「ぅ…ゴホッ！ゴホッ！」

辺りを見回すと倒れていたはずの人物が太刀を支えに立っている。

「…先生！？」

「…くそ。目眩がする…。」

気絶から目覚めた我狼だった。

「鈴音！涼雅！生きてるな！？」

「はい…！」

「死んでは…無いで。」

2人分の返事が聞こえる。

「こうなったらもう作戦もなにも無いんやないか？」

涼雅の声。

「…そうだな。お前もそこから動けないんだろう？」

苦笑しながら言う我狼。

我狼の言う通り涼雅の身体はボロボロで動けそうにない。

「か～。情けね～。」

悔しそうに答える涼雅。

「そう思うなら援護してもらえると助かるんだがな。」

「おう…。」

「聞いた通りだ鈴音。動けるのは俺達だけだ。」

「はい！」

ダンッ！

地面を蹴る音。我狼と鈴音がギロルに向かっていく。

（あいつは腕で攻撃、防御をしている為腕の耐性が異様に高い…。）

（だから腕以外…肩を攻撃した時に怯んだ。ならば狙うは…）

ヒュンッ！！

（腕をくぐり抜けた先だ！！）

我狼の太刀がギロルの腕をくぐり抜けた先を狙う。

バキンッ！

だがギロルの腕が太刀を叩き落とす。

（やはり簡単には狙わせてくれないか…！！）

ズザザ！という音と共に後ろに下がる我狼。

「はあああ！！」

ギロルが我狼に気をとられている間に鈴音が素早いスピードでギロルの右横から攻撃を仕掛けた。

鈴音が九尾のスピードで移動したせいか鈴音がギロルの右横にいたのは誰も気づかなかった。

我狼も涼雅ももちろんギロルも。

だが…

「こざかしい雌狐が…！」

鈴音の左横に黒い影。

「鈴音！横だっ！！」

それに気づいたのは我狼だけ。

「え？」

鈴音が気づいた時には遅かった。

ドコォン！！

その黒い影に叩き付けられ、吹き飛ぶ鈴音。

バリィンッ！

鈴音が吹き飛んでいった方向にあったガラスが割れる音がする。

その黒い影の正体はギロルの尻尾。

「鈴音！！」

涼雅が叫ぶ。

「こざかしいのが一匹消え…」

ズドンッ！！「…がっ！？」

「我狼！？」

涼雅の驚いた声。

我狼がギロルの腹に太刀を刺していた。

「貴…様ァ…！！」

ギロルが怒り、声をあげるが…

「遅いっ！！」

我狼が叫び脚を振り上げる。

そして回し蹴りをギロルのこめかみに放つ。

「ぐがっ…！！」

ドガンッ！

「うおっ！？」

我狼の蹴りによって涼雅のすぐ横に吹き飛ばされるギロル。

「まだだ！！」

太刀を持ち、ギロルに止めを刺そうとする我狼だが…

ズキンッ！

「ッ！？」

左腕に異様な痛み、そして侵食が始まった。

（こんな時に…！！）

身体の中の狼に精神を侵される。

「ぐっ…がっ…！」

（頼む…！後少し…待ってくれ…！！）

我狼は精神だけではなく身体もボロボロだった。

今まで感じなかった痛みが今になって感じる。「ガアアアア！！」

我狼が侵食に耐えている中、ギロルが吼える。

「我が何故…！？何故！？」

疑問を口走りながら我狼に拳を放とうとする。

ガチッ！！

だが我狼に放とうとした左腕は壁に固定され動かなかった。

「なにっ…！？」

ギロルが狼狽え、左腕を見る。

左腕は氷によって壁に貼り付けられていた。

そしてそのすぐ横には壁に手をつけた涼雅。

そう。ギロルの左腕の氷の正体は涼雅の魔法。

「グ…ガアアアア！！」
だが諦めるギロルでは無い。
右腕で再び我狼を狙う。
ズドンッ！！
「グッ…ガ！！？」
また右腕が動かない。
涼雅は横にいるし我狼は目の前にいる。
もう自分の邪魔をする者はいないハズ…。

「つかまえた…ッ！！」ガラスで切った額から流れる血を舐めながら鈴音が言った。
九尾のスピードでここまで来て双剣をギロルの手首に刺し、固定したのだ。

「じゃ…邪魔だァァァァァ！！」

ドガンッ！

「うあっ！！」

「うおっ！！」

ギロルが叫び、尻尾で鈴音と涼雅を吹き飛ばす。

だがもう間に合わなかった。

目の前には銀髪。

両腕を塞がれていて防ぐ事も、避ける事も出来ない。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

ザンッ！！

ギロルの左肩から右脇腹を我狼の太刀が切り裂いた。

「…ッガァァァァァァァァァ！！」

ギロルが叫び声をあげ、ずるずると床にずり落ちていく。

「何故だ…何故我が…。」

呟く様にギロルが言う。

そんなギロルの前で我狼が告げた。

「終わりだ…ギロル！！」

激戦（後書き）

はい。作者です。。

ギロル打ち負かしましたね（´・∀・）

あと2話くらいで最終回かなぁ…？

まだ分かりませんが。

最後までお付き合いお願いしますm（_ _）m

おまけだょ。。

我「最近作者が生意気にこの小説の続編を考えているらしい。」

涼「まじかいな。どういう話になるんや？」

鈴「それがまだ何も話してくれないんです。」

我「脅しにいってくるか。」

涼「いやいや。あいつの性格からしてムキになって余計話さなくなるで。」

鈴「…確かに。」

我「だが、一応番外編の話は作り始めてるらしい。」

鈴「どういうのですか？」

我「詳しい事は言えんが…霊退治？」

涼「何故に疑問系？」

我「いや、よく分かんなくてな。」

涼「駄目やん。」

我「言うな。」

鈴「……。」

→黒オーラ放出中

涼「…鈴音、まさか霊が苦t…」

鈴「シャラァァァプ！！！（叫）」

涼（…駄目なんや。）

鈴「いやホントマジで勘弁してくれよジョニー。」

我&涼（キャラ崩壊してる…（。д。；；））

鈴「ハッ！この際作者を殺せば…！！」

我「待て。」

ズベシッ！←チョップ炸裂。

鈴「痛いじゃないですか

別れ（前書き）

作者です（ˊ・ω・）ゞ

今回再び皆さんにアンケートを受け付けたいと思います！

え？アンケートするほど人数がいないんじゃないかって？

……（ˊ・ω・）

え～…アンケートの内容は…

この《白銀の狼と金色の雌狐》の続編を書くか書かないかのアンケートです。。

もし1人でも見てやるよ！って言うお優しい方がいたらその方の為書きたいと思います！！

ではみなさんご協力お願いしますm（_ _）m

別れ

「終わりだ…ギロル！！」

我狼がギロルに告げる。

「……だ…」

ギロルが何かを呟く。

「？」

我狼が怪訝そうな顔をするが…

「…ッ」

身体が限界を迎え膝をつく。

「先生！」

それに気付いた鈴音が駆け寄る。

それと同時に…

ドォンッ！！

「うわっ！？」

「何だ…？」

突然の轟音。

「まずいで我狼！」

涼雅がこちらに寄ってくる。

「多分暴れ過ぎてどっかの柱が折れたんや。」

「このままじゃここは崩れるで！」

「…そうか。」

涼雅の言葉に立ち上がる我狼。

「先生！涼雅さん！火が！！」

「何やて！？」

声がする方を見ると、先ほど我狼が吹き飛ばされて来た為開いた穴から火が見える。

我狼とギロルが戦った際に機材から火が上がったのだろう。

「これはさっさと逃げるのが得策やないか？」

涼雅が言うが…。

「…まだ逃げられない様だぞ。」

太刀を構える我狼。
我狼の視線の先を追うと…。
「ガアアアア！！」
両腕の拘束を解いた…
「ギロル！？」
鈴音が驚いた声をあげる。
「なんや。ここにいる奴らはみんなしぶといんか？」
呆れた様な声を出す涼雅。
…そんな中、我狼だけが静かにギロルを見ていた。
「何故だ！！？何故我が！！」
喚くギロル。
「涼雅。」
ふーっと息を吐き、小さいビンを涼雅に投げ渡す我狼。
「？」
「何や？これ。」

受けとると中の液体が揺れる。

「薬だ。帰ったら鈴音に与えてやってくれ。」

それはギロルが持っていた合成獣としての働きを弱める薬。

攻撃を受けている中、ギロルから奪っていた。

吹き飛ばされた時もビンが割れない様にこれだけは守っていた。

「…先生？」

不安になり我狼を見上げれば少し乱暴に頭をぐしゃっと撫でられる。

それに余計不安になった。

「…我狼？」

涼雅も怪訝そうに我狼を見る。

「さっきの仕返しだ。」

そう我狼が不敵に笑いながら言うと同時に蹴り飛ばされる。

ガンッ！！

「ぐあっ！！」

蹴り飛ばされたのは涼雅と…

「うわっ！？」

鈴音。

「先生！？」

我狼の所へ行こうとした次の瞬間。

ズドォンッ！！

「ッ！？」

瓦礫が落ちてきて行く手を阻む。

「先生！？」

「我狼！？」

鈴音と涼雅が瓦礫の隙間から叫ぶ。

そこに…「…鈴音。」

決して大声をあげている訳でも無いのに自然と通る我狼の声。

「前に進め。過去を振り返るな。」

「お前なら…俺の様に復讐に捕らわれずに生きていける。」

瓦礫の隙間から見える我狼が微笑う。

「先…ッ！！」

「涼雅。鈴音を頼む。」

「我狼！！」

それだけ言うと振り向き、燃え広がった炎の中に入っていく我狼。

「待って下さい！！」

「先生！！」

瓦礫の隙間から手を伸ばす鈴音。

ーまだ…伝えて無いことがあるのに…ー

ー伝えなきゃいけない事があるのに…ー

「鈴音！ここは崩れる！！行くで！！」

想いは虚しく…

「先生ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

伸ばした手は…届かなかった。

「ギロル…！！」

炎の中目の前の敵と向き合う我狼。

「ガルルルル…！！」

「ギ…ロル…様…。」

「！？」

突然聞こえた第三者の声。

ギロルの部下だったであろう合成獣の声だった。

涼雅の魔法で怪我をしているのかズリズリと這いずりながらギロルに近寄ってくる。

「ギ……ルさ…」

合成獣がギロルの足にすがった瞬間。

ズガンッ！！

「なっ…！？」

合成獣をギロルが蹴り飛ばす。

「が…は…っ…！！」

合成獣は血を吐き、動かなかった。

「ギロル！！」

我狼が怒りに叫ぶ。

「…何だ。」

ギロルは平然としている。

「…仲間じゃ…ないのか…！！？」

「仲間の命など…ただの実験材料だ…。」

「貴様っ！！」

我狼がギロルに斬りかかる。

ギロルは拳で防ぐ。

「なにも護れない奴が命を語るな！！！」

我狼が太刀を操りながら叫ぶ。

ギロルも黙ってはいない。

「黙れ！！それは貴様とて同じ！！貴様は護っているのではない！！すがっているのだろう！！！」

だが両者共に我狼は脇腹の鈴音に刺された傷が、ギロルは我狼に斬られた傷が痛むのであろう。

動きが鈍い。

ポタポタと両者の傷から血が滴る。

「何故だ…！？」

ギロルが再び言う。

「何故、失敗作の貴様が成功作の我と対等に戦っている！！？」

「……。」

我狼は俯いたまま黙っている。

「…貴様は。」

我狼が呟く。

「俺に狼の力を解放し、合成獣になってみろと言ったな。」

「貴様はライオンの力を解放し、化け物になった。」

「だが…俺は違う。」

「貴様…まさか…」

ギロルが狼狽える様に呟く。

「これが…肉親を殺され…悲しみと苦しみを知った…」

「命の重みを知っている者と知っていない者の違いだ！！！」

我狼が顔をあげて叫ぶ。

その隻眼は…紅色。

我狼は合成獣になっていた。「合成獣になって…何故普通でいられる！？」

「普通などでは無い…今も…っ狼に意識を持っていかれそうだ…！！」

先程までは鈴音達が居たため、力不足を補えたが今は我狼一人の為、どうしても狼の力を解放し、合成獣になるしかなかった。

狼の力を解放した今、我狼の自我は今にも狼に侵されそうな状態。

早くギロルとの決着を着ける必要があった。

「認めん！認めんぞぉぉぉぉぉ！！」

合成獣の力のせいか今までは受け止める事も出来なかったギロルの拳を太刀で弾き飛ばせる。

すると…

ブシュッ！！

ギロルの拳から血が吹き出す。

「ぐ…おおお…！！」

呻くギロルを見る我狼。
「所詮…貴様も…」
その紅い瞳は…
「失敗作だったか。」
哀れむ様な瞳だった。
「な…に…？」
「貴様にとっての完全な合成獣は…感情を持たないんだろう？」
「貴様は感情を持ち、今の状況に動揺している。」
「動揺は…強き者も弱くする。」
「黙れっ！！」
「…言っても分からないか。」
1つ深呼吸して太刀を構える。
ダンッ！！
どちらかともなく地面を蹴る。
ザンッ…！！

「……。」

「……。」

沈黙。

その沈黙を破ったのは…

「言い残す事は…あるか？」

我狼。

「ある訳…無かろう。」

その後ろでギロルが倒れた。「…ッ！！」

突然、我狼を襲った目眩と違和感。

立っていられなくなり、倒れる。

どくどくと鈴音から受けた傷から血が流れているのに痛みも苦しみも無い。

だが明らかに自分の身体がおかしい。

「…時間か。」

無意識に呟いていた。

時間。

自分が人間でいられるまでの時間。
それが終わろうとしている。
だが自分でも驚くほど落ち着いている。
否、当然かも知れない。
「もう…充分だ…。」
あの時…合成獣にされた日…自分はもう死んでいたのかもしれない。
狼に自我を喰われ、化け物になっていたのかもしれない。
だが今まで死ぬ事も無く、化け物になる事も無く仇をとる事が出来た。
それだけで充分だった。
チラリと左側を見ると包帯が解けかけ、太刀を握った化け物の左腕が見えていた。
我狼は満足そうに微笑って左腕の力を抜いた。
「もう…充分だ…。」
もう一度呟いたと同時に我狼の意識は途絶えた。
焔が全てを包んでいった。ダダダッ！！

ひたすら無言で走り続ける。

前方にいる涼雅も無言。

やはり我狼の安否が気になるのだろう。

それは鈴音も同じ。

本音を言うと心配で堪らなかった。

今からでも引き返したい気持ちでいっぱいだが先程から震動が止まらない。

崩れる前に我狼がこの建物…研究所から出て来るのを願うしか無かった。

「鈴音！出口や！！」

涼雅の言葉に顔をあげると確かに出口があった。

外に出た瞬間。

今までに無い大きな揺れ。

研究所が崩れていく。

「ッ！！」

その光景を見て鈴音の目が見開く。

「先生！！先生！！！」

「鈴音！！」

叫びながら研究所の中に入ろうとする鈴音を涼雅が止める。

ズガァン！！！

研究所が完全に崩れた。

我狼は…現れなかった。

「…ぁ…ぁ…」

後に残った物は…

「わああああああああああああああああああああああ！！！」

何も無い。

泣き叫ぶ鈴音の声が空に響いた。

別れ（後書き）

あい。作者です。

決着着きましたね。

そして残された鈴音は…！？

次回で最終回です。。

その後番外編をちょびっとやらしていただきたいな…と。。

ではではm（＿＿）m

おまけー（＾Ｏ＾）

涼「我狼死んだな。」

鈴「死んじゃいましたねー。」

我「ちょっと待て。」
鈴「あれ？いいんですか？出てきて。」
我「作者の都合と言うことにしておけ。」
涼「テキトーやな（笑）」
我「ここで（おまけ）まで死んだと言うことになったら存在感無さすぎるぞ俺。」
涼「まあいいんやないか？出てきても。」
鈴「で、次回が最終回ですね。」
涼「長かったなぁ。」
我「半年と少しの連載だったようだ。」
涼「作者にしてはよお頑張った（笑）」
鈴「ですねー。」
我「最終回どうやって作者がまとめるかが見物だな。」
涼「クレームの嵐を覚悟しとかな。」
鈴「ですね…（汗）」
我&涼&鈴

「…不安だ（汗）」

が…頑張ります！！（汗）

旅立ち（前書き）

最終話です！！

いや…なんか…すいませんでした…（汗）

ごゆっくりお楽しみください…（汗）

旅立ち

カツカツ…

廊下を歩いている黒色長髪の男。

ある部屋の前で立ち止まる。

ふーっと息を吐き、ノックをする。

「鈴音、入るで。」

キィー…

ドアを開けるとベッドに腰かけ窓の外を見ている金髪の少女。

「鈴音。」

「涼雅…さん」

最初の涼雅の声に気付いていなかったのか少しだけ驚いた顔の鈴音。

眠れなかったのだろう。

眼の下の隈が目立つ。

そんな鈴音に話すべきか迷っていると鈴音の方から話しかけてきた。

「先生の…遺体…見つかりました…？」

「…それがな。」

ギロルと戦ってから数日が経った。

あの研究所に我狼とギロルの遺体があるはず…

そう思った涼雅は魔法獣を使い、我狼とギロルの遺体を捜させた。

だが…見つかったのはギロルの遺体だけで捜しても捜しても我狼の遺体は発見出来ていない。

まだ瓦礫の中に埋まっているかそれか…

もう1つの可能性は涼雅が自ら否定した。

あの重傷では動けない。

それに自分は見た。

最後まで我狼は研究所から出て来なかった。

あの重傷の身体で研究所が崩れる前に逃げ出せるはずはない。

その事を鈴音に話す。

すると…

「そう…ですか…。」

と言って俯いた。

そんな鈴音に涼雅は覚悟を決めて聞いた。

「鈴音…お前これからどうするんや？」

「わいはここで暮らしても全然ええと思っとるけど…」

涼雅が言うと…

「どうすれば良いか…分からないんです。」

語尾が震えた鈴音の声。

「先生が…ギロルと決着を着けに行った時も…ただ…手を伸ばす事しか出来なかったんです…。」

「……。」

黙って鈴音を見つめる涼雅。

「…涼雅さん。」

鈴音が顔をあげる。

「願ったら…」

「…？」

「願ったら…傍に戻って来てくれるでしょうか？」

その蒼い瞳は涙に濡れていた。

「…鈴音。」

「掴めなかったんです…！！」

ポタポタと鈴音の握った拳に涙が落ちる。

「あの時…！！」

炎の中に消えていく我狼の腕を…掴めなかった。

「先生を…連れ戻す事が出来たら…ッ！！」

クシャッと自分の前髪を掴む鈴音。

「鈴音。」

涼雅が鈴音の名を呼ぶ。

「いくら悔やんでも過去は変えられへん。」

「我狼も言ってたやろ？振り向くなって。」

鈴音を見つめる涼雅。

その目はどこまでも黒く、全てを見透かしている気がした。

「我狼は…自分の道を見失う事はせえへんかったで。」
鈴音の肩がピクリと動く。
我狼は確かに立ち止まった事はあったかもしれない。
しかし自分で道を切り開いた。
自分の信じた道を進み続けた。
我狼を思うと…自分はちっぽけだ。
でも…
「私は…先生や涼雅さんが思ってるほど…強くなんか…ないです。」
自分が信じる道が分からなかった。
踏み出さなければ信じる道が分からない。
けれど…踏み出す勇気も無かった。
我狼の様には…師の様には…なれない。
「…さよか。」
鈴音の心情を察したのか困った様に笑う涼雅。
「けど、これだけは言っとくで。」

「大事なのは…」

トン、と鈴音の胸を突く涼雅。

「お前の意志や。」

「…！！」

鈴音の目が見開く。

確かに誰が…

誰が我狼の様になれと言っただろう。

我狼や涼雅は我狼の様になれなどとは一言も言っていない。

あくまで鈴音自身が憧れ、目指し、追いかけていただけだ。

やっと今実感した。

自分の前に我狼は…

「もう追いかける事は…出来ないんですね…。」

もういない。

『前に進め。過去を振り返るな。』

我狼が言った言葉の意味が分かった気がする。

俺はもうお前の前にはいられない…

だからといって過去を振り返るな。

過去に俺がいたとしても何も語らない触れる事も出来ない。

どれだけ時間がかかってもいい。

何度立ち止まってもいい。

だから…

少しずつでいい、前に進め。

俺が信じた道を追いかけるのではなくお前自身が信じた道を進め。

俺といた過去が…お前の道を邪魔をするなら…俺の事も…忘れてくれ。

我狼の声が聞こえた気がした。

ポタポタとこぼれる雫。

止めようとすればするほど溢れてくる涙。

「そんなの…無理に…決まってるじゃないですか。」

目の前の少女がやっと…友の言った事を理解した。

１４歳の少女には辛過ぎる言葉かもしれない。

涼雅はそう思いながら目の前の鈴音を見つめた。

自分は…我狼になにも出来なかった。

いつも護ってもらってばかりだった。

せめて…我狼の為に出来る事をしたい。

我狼が望んでいる事はこの部屋で泣いて暮らす事では無い。

我狼が望んでいる事はたった１つ。

自分が…望月鈴音が信じた道を進む事。

「…涼雅さん。」

「…何や？」

鈴音が俯いた顔をあげる。

「まだ…間に合いますか？」

涼雅を真っ直ぐ見つめる鈴音。
その蒼い瞳は濡れてはいたものの…強い光を放っていた。
「…おう！」
その姿を見た涼雅はにっこり笑った。
～数ヶ月後～
「行くんやな？」
「はい。」
鈴音の９つの尾が揺れる。
実は研究所から戻った後すぐに薬を鈴音に与えたが少し遅かったらしい。
紅い瞳では無くなったものの９つの尾が残ってしまった。
だが出し入れが可能らしく鈴音の中の狐も今のところ暴れる事は無いので本人はあまり気にしていない。
「あれだけ捜して遺体が見つからないなら…生きている可能性もあるでしょう？」
鈴音は我狼を捜す旅に出ようとしていた。

我狼が生きている可能性は限りなく少ない。
けれど少なくても可能性があるなら…
それに縋りたいと思った。
「やけどなぁ…」
なんだか渋い顔の涼雅。
不思議に思い聞いてみる。
「何ですか？」
「実はな…この国で戦争が起きてるんや。」
「戦争！？」
驚く鈴音。
自分と我狼が旅している時は戦争が起こっているなんて思いもしなかった。
「いや…。鈴音達が旅している時はそこまで激しく無かったんやけど…最近激しくなってるんや。」
分からなかったハズだ。
「どこと戦ってるんですか？」

「隣の国や聞いたけど…。何でも始まりが隣の国が無差別に一つの村の村民を皆殺しにしたそうや。」

「…酷いですね。」

何が目的でそんな事をしたのかは分からないが酷い事には変わりない。

「やから…わいは心配で心配で…」

げっそりとしながら言う涼雅。

そんな涼雅に苦笑いしながら鈴音は言った。

「大丈夫ですよ。いざとなったらコレもありますし。」

コレ…腰に差した双剣を指差した。

前に使っていた双剣はギロルと戦った時に研究所に置いてきてしまった。

なので涼雅が新しく作ってくれた物を貰った。

「止めても行くんやろうなぁ〜。」

「当然です♪」

にっこり笑いながら答える鈴音。

はぁ〜。とため息を吐きながら涼雅は言った。

「分かった。気をつけて行くんやで。」

「はい！」

「いつでも帰ってこいや。」

「いってきます！！」

金色のポニーテールが揺れる。

涼雅が見えなくなっていく。

（北…東…西…南って回って行こうかなぁ…。）

かつて我狼と一緒に回ったルートなら見つけられる気がした。

しばらく歩いていると見晴らしの良い丘に出た。

「…こんな所あったんだ。」

ここからはこの街の向こうまで見渡せる。

（…先生がいなかったら私は山賊に殺されたかもしれなかったんだ…。）

ふと思い出した我狼と初めて出逢った時。

初めて逢った時から護られてるなぁ…と苦笑する。

ずっと我狼に伝えたかった言葉…

ここからなら我狼に届く気がした。

「…ありがとうございました。」

小さく呟いたその言葉は…

風に乗って空に消えていった。

旅立ち（後書き）

はい。『白銀の狼と金色の雌狐』最終話です。

鈴音はきっと我狼さんが見つかるまで捜し続けるんでしょうねぇ…。

。

そしてまさかの我狼さん行方不明（爆）

生死が不明の状態で終わらしちゃいました（笑）

んでもってこれからの作者の予定は…

とりあえず番外編を投稿したいと思います。

その後でアンケートに答えてくれる方を４月２０日まで募集します。

それで続編を希望してくれる方がいませんでしたら…

山口さんがアンケートに答えて下さったので新作を書き始めたいと

思います。。

でわでわ皆さん。

番外編でお会いしましょう（＾ｏ＾）／

おまけだょ～（＾ｏ＾）／

涼「終わったな～」

鈴「終わりましたね～」

我「終わったな。」

涼「我狼まさかの行方不明（笑）」

我「言うな。泣きたくなる。」

鈴「まあまあ一応私が捜索中ですから（笑）」

我「ていうかもの凄く微妙な終わりだなこの小説。」

鈴「なんでも作者は『我狼さんを鈴音が見つけられるかは読者さんのご想像にお任せしますっ！！』って言って逃げたそうですよ～」

涼「最悪やな。あいつ。」

我（手抜き…。）

涼「んで続編書くようになったらどうなるんや？」

我「主人公が俺から鈴音にバトンタッチするそうだ。」

鈴「ヘッヘーイ♪」

パチンッ！↑ハイタッチ

（〆―・）人（＾―＾）（↑あれ我狼さんのふさがってるのって左目だったっけ？↑ｂｙ作者）

涼「んで鈴音が我狼を捜すと。」

鈴「まあ一筋縄ではいかないみたいですけどね。」

我「当分俺は出番なしか…（暗）」

涼「まあそれなりには出てくるそうやで。。」

鈴「まあ。新作になるかもしれませんしね（笑）」

我「…出番（暗）」

手を抜いたつもりはありませんっ！！（くわっ）

アンケート…よろしくお願いしますm(_ _)m

太陽と月【番外編1】（前書き）

はい。番外編です。。

お楽しみくださーい（＾ｏ＾）／

太陽と月【番外編1】

草木が生い茂る森の中。

草木をかき分け進む音がする。

ガサガサ…

「先生！待って下さい！」

小さな身体でやっと進んで行く金髪の少女。

「待つほど俺は優しくない。」

そう言って先に進む銀髪の男。

金髪の少女の名はリオン。

銀髪の男の名は我狼と言った。

これは彼らが出逢って少し経った時の話…。

「…何だあれは？」

我狼が立ち止まり呟く。

「？」

追い付いたリオンが我狼の視線の先を追うと…

誰かうつ伏せで倒れてる。
しかも何か「タスケテ～」とか言ってる。
体型からして男の様だ。
「……。」
「……。」
「…何故か分からんが。」
「？」
「今猛烈にダッシュであれを通り過ぎたくなった。」
「…奇遇ですね。私もです。」
猛烈に嫌な予感がしたのだ。
もうこの際何故カタコト？とか突っ込んでいる場合では無かった。
あれに関わったら面倒な事が起きる。
倒れている人を放って置くのは良心が痛むがその嫌な予感には勝てなかった。
それからの2人の行動は早かった。

走り出したのだ。
そりゃもう狼と狐もビックリな速さで。
ダッシュでその倒れている人を通り過ぎ様とした時。
「旅人さん達助けて～♪」
ガシッ！
その倒れている人物が我狼とリオンの足を掴んだ。
当然我狼とリオンの足は止まる。
ビッタン！！
バランスを崩し顔面を強打する二人。
「「っおおおおおおおおおお…！！」」
激痛に悶絶する。
「お二人が悪いんですぜ～？倒れて死にそうな人間を無視なんてしていくから。」
すくっと立ち上がり仁王立ちする男。
その男の短い焦げ茶の髪が風に揺れる。
「「……。」」

激しく反論したい気持ちなのを抑える2人。

「…俺達になんの用だ。」

我狼が問う。

「いやあちょっと助けてもらいたくてね～。お2人さんちょっと付いて来てやくれませんか？」

「誰も付いていくとは…」

我狼が異を唱えようとした時…

「付いて来てくれやすよね？」

なんだかにっこりと笑った男から殺気が溢れた気がする。

「……。」

黙る我狼。

（…なんか…悔しい…ッ！！）

なんだか異様にリオンまで悔しくなった。

「あ、俺の名前は東雲疾風（しののめはやて）って言います。」

「んじゃよろしくお願いしますぜ。」

ニコッと笑った男は２０くらいの歳だった。「ここでさァ。」

「…村か？」

「…村ですね。」

疾風に案内され、着いたのは１つの村。

「つってもそんなでかく無いんですけどねー。」

ケタケタ笑いながら１つの家に案内される。

「じっちゃーん。客人ー。」

（（じっちゃん？））

我狼とリオンが同じ事を疑問に思っていると…

「おお。旅人殿。よくぞ参った。」

１人の老人が現れた。

「ワシはこの村で村長をやっとる。東雲茂（しののめしげる）という者です」

「…東雲？」

我狼が疾風を見る。

「うっす。俺の祖父。」

疾風が茂を指差しながら言う。

本人はふぉっふぉっふぉと笑っている。

「疾風さんは助けて欲しいって言ってましたけど…どう言うことですか？」

リオンが茂に訪ねる。

「ふむ…。聞いて下さるかな？」

我狼が嫌そうな顔をするがリオンが咎める様な視線で見ているので嫌々頷いた。

始まりは村の3人の若者が村の外れにある無人の屋敷に悪戯に入った事だった。

若者が考える事だ。

肝試しか何かで入ったのだろう。

時は丑三つ時。

屋敷は当然静まり返っている。

そんな屋敷に若者達は足を踏み入れた。

肝試しの内容は屋敷の中を探索し、戻って来るという簡単なものだったが…

何かおかしい…。

1人の若者がそう思った。

触っていないのに物が倒れたり…カーテンが揺れたりしている。

最初は風かと思ったが…窓はどこも開いていない。

おかしいと思いながら大体の部屋は回り最後に広間に向かった。

だが…

そのおかしいと感じた若者だけが気づいた。

暗闇の中…

部屋のすみに…

何かがうずくまっている…。

それはなにやらゴソゴソと動き…

その怪しい双眼をこちらに向けた。

「ぎゃあああああああああ！！」

「いぎゃあああああああああああ！！」

突然大声を出す茂。

驚いたのかリオンも悲鳴をあげる。

「相変わらずじっちゃん小さい子いじめるの好きだねー」

疾風が言うと…

「ふぉっふぉっふぉ。からかいがいがあるのぉ。」

我狼の後ろに隠れプルプル震えているリオンを笑う茂。

そんな茂とリオンを呆れた顔で見て言う我狼。

「結局何が言いたい。霊がいるとでも言いたいのか？くだらん。」

ばっさり斬り捨てられた茂は『むぅ…』と唸りながら言った。

「実はのォ…。」

「あの屋敷にはもともとある子1人と両親2人の親子が住んでいたんじゃ。」

「じゃがその親子がある日を境に…」

一旦口を閉じる茂。

「突然屋敷から姿を消したんじゃあああああ！！」

「ひいいいぃぃ！！」

「くどい！！」

再び叫ぶ茂とリオンを怒鳴る我狼。

「ふぉっふぉっふぉ。困った事に村人達がそれを崇りじゃなんとかじゃと言ってのォ。」

「今回の若者の事件でそれが明確になったーとか言って村から出ていく者も出てきたのじゃ。」

ふー、とため息を吐く茂。

「それで疾風に助けてくれそうな者を連れてきて来れと頼んだんじゃ。」

「そういえば疾風さん。」

ふとリオンが疾風に問う。

「なんで森の中で倒れてたんですか？」

「あー。あれなー。」

対する疾風はのんきに答える。

「倒れてた方が目立つかなーと思って。」

「「……。」」

呆れを通り越して悲しい物を見る目で疾風を見る我狼とリオン。

本人はいたってのんきに笑っている。

「ということで今夜屋敷に行ってくれんか…「断る。」…むぅ。」

茂が言いかけた言葉を我狼が遮る。

「何故そうなる。俺達は無理やり連れて来られただけだ。こんな事に付き合ってられるか。」

「それにお前達がその屋敷に行けば済む話だ。」

たんたんと事実を述べ玄関にUターンする我狼。

だが帰れる訳も無く。

「だって怖いんですもーん。」

「老いぼれには優しくせーい。」

「だあああ！足にまとわりつくな！！」

我狼の足にまとわりつく村長とその孫。

対する我狼はブンブンと足を振って振り払おうとするがガッチリと掴まれ離れない。

それを見て我狼が盛大なため息を吐いた。

太陽と月【番外編1】（後書き）

はい。。番外編でございまーす。。

番外編は3つくらいに分けて投稿させて頂きたいとおもいます。。

（＊＾＿＾＊）

おまけ

我「番外編だな。」

涼「番外編やな。」

リ「番外編ですね。」

我「そういえばリオンなんで名前がカタカナなんだ？」

リ「一応過去設定という事なんで。」

涼「なるほどなぁ。作者変なとこに力入れとるなぁ。（笑）」

我「というか疾風とかいう奴なんか涼雅に似てないか？」

涼「Σマジでか！？」

リ「あ～。ちょっと分かります（笑）」

涼「番外編でのわいの出番が無いからわいに匹敵する奴を出してきたて訳か…フフフ（黒笑）」

疾「あれ～みなさんこんなトコで何してんですか～？」

我「逃げろ疾風！！」

リ「疾風さん逃げて下さい！！」

疾「へ？」

涼「よぉ～。ちょっと自分こっちきいへんか？（爽笑）」

疾「いいですよ～。初めましてですね～。」

涼「…！？」

我「あ、毒気抜かれた。」

リ「恐るべき天然さ（笑）」

我（天然が天然って言ってる…）

リ「次回に続きま～す☆」

涼「わい…わい…（暗）」

おまけも次回に続きます！！ｂｙ作者

太陽と月【番外編2】

1日が終わる時間…木が何本もある林の中でなにやら作業をしている男がいた。

「はあー。こんな夜中に薪拾ってこいって…じっちゃんも人使い荒いよなー。」

ぶつぶつ文句を言いながら薪を拾う疾風。

「ここ人通りも少ないし怖いんだよなー」

心底嫌そうな顔をしながら渋々薪を拾い続ける。

パキン…

「！」

薪を踏んだ音。

耳が良い疾風はそれにすぐ気づく。

だが人影は無く。

首を傾げる疾風。

「勘弁してくれよぉ〜。」

気付けなかった。

自分の真後ろの木の影に何者かが居たことに。

パキン…

「！！」

再び薪を踏んだ音。

気付いた時にはもう遅い。

「いぎゃあああああああああ！！」

疾風の叫び声が聞こえたとか聞こえなかったとか。

「…ここか。」

時は丑三つ時。

銀髪の男が例の屋敷の前に立っていた。

「…で。」

銀髪の男…我狼が後ろを振り向く。

「何でお前がここにいる。」

「しょうがないじゃないですかぁぁぁ！！」

そこにはリオンがいた。

しかもかなり涙目。

「村長の家で寝てろと言っただろうが。」

はぁー、と何度目か分からないため息を吐きながら我狼が言う。

「あの話聞いたら寝れなくなっちゃったんですもん！！」

「お前は子供か！！」

「１３歳はまだ子供です！！」

怒鳴る我狼と怒鳴り返すリオン。

「…もう知らん。」

なんかもう脱力したらしい。

リオンを放って勝手に進んでいく我狼。

「うわあああ！先生の人でなしぃぃぃ！！」

「何とでも言え。」

「う〝〜。」

このまま立ち止まっていたら完璧に我狼に置いていかれる。

そう思ったリオンは渋々我狼の後を追った。

屋敷の中はかなり暗い。
だが我狼は暗い中壁にぶつかる事も無く進んでいく。
進んでいく内に中庭らしき所に出た。
木が何本かと真ん中に池がある。
もう何日も水を変えてないせいか池の水が濁っている。
「オオオ…オオオ…」
何かが唸る様な音。
「ぎゃあああ！」
ガシッ！
我狼の服を掴むリオン。
「…風の音だ。」
めんどくさそうに言う我狼。
「無理。むりむりむり絶対むりです。」
リオンが無理を連発する。
（無理って5回言った…。）

「知らん。ついてこないと置いていくぞ。」

「うううぅ……」

前を行く我狼を追いかけながら先に進む。

すると…

ドサッ！

「何か落ちてきたぁぁぁぁぁ！！」

木の上から何かが落ちてきた。

リオンは絶叫する。

「……。」

一方我狼は太刀を…

ズドンッ！

木に刺した。

すると…

バサバサッ！

「ピー！ピー！」

「…鳥？」

リオンが？マークを頭の上に浮かべる。

「大方あの鳥が持ってた木の実かなにかが落ちたんだろう。」

「鳥のバカやろー！！」

鳥が飛んでいった方向に叫ぶリオン。

（…うるさい。）

密かに思う我狼。

奥へ進んでいくと。

再び屋敷の中の大きな部屋に入った。

学校の教室の様な部屋のなかには机が３つ。

カタンッ！！

その中の１つの机の上にあった鉛筆が床に落ちた。

「ぎにゃあああああああああ！！」

我狼に引っ付くリオン。

「…ネズミだ。」

「嘘だ！それは嘘だ！！全然それらしき影がありませんでしたもん！！」

「俺には見えた。…それと離れろ。首が折れる。」

現在リオンは我狼の首にぶら下がっている状態。

「ふみ～…」

渋々我狼から離れるリオン。

ここまで来ると本当に何故ついてきたのか聞きたくなる。

気を取り直し再び進み始める我狼。

しばらく歩くとどうやら地下に繋がる階段がある。

階段を降りようとしてふと思いとどまる。

こんな所に降りようものなら全力で泣き叫ぶ者の声がしない。

まさか。

いやーな汗が我狼の頬を伝う。

後ろを向くと…

「はぐれた…。」

いるはずのリオンがいなかった。
もうなんだか精神的に疲れた我狼であった。
「迷ったあああああ！！」
こちらは我狼とはぐれ叫ぶリオン。
こんな所に一人ぼっちは本当にごめんである。
「せんせぇ～」
読んでみるが当然返事は無く。
半泣きになりながら我狼を捜す。
カツカツ…
「！」
足音。
我狼かと思い、振り返るが…
バッ！
「っー！？」
何者かに何か布の様な物が突然口に当てられる。

「むー！！」

抵抗するが甘ったるい匂いが鼻につくと力が抜け、意識が遠退く。

「むぅ…。」

最後に見たのは笑った見知らぬ男の顔だった。

「どうする…」

こちらは我狼。

階段の前でリオンを捜しにいこうか迷っている最中。

「…ん？」

夜目の利く我狼は階段の奥をとらえた。

「…牢屋？」

気になり牢屋の方向に向かう。

そこには…

「おーい。そこの人ー」

「！？」

何者かの声に太刀に手をかける。

用心深く声の方向を見ると…

「だ・し・て☆」

「！！？」

「…何故だ…何故ここにお前がいる…。」

声の主は牢屋の中にいた。

そしてその人物を見た瞬間我狼の身体の全ての力が抜けた。

なんかもうこのまま帰りたいと思ったほど。

「あれー？我狼さんじゃないですかー。てか痩せました？」

「何でお前がここにいる…。疾風。」

のんきに笑っている男は疾風だった。

「いやー。なんか俺巻き込まれたらしくてー」

あっはっはーと笑いながら言う疾風。

「…巻き込まれた？」

「なんか薪拾ってたら誰かに頭殴られて気が付いたらこんなかでびっくりしましたー。ってあれ？どうしたんですか？我狼さん。」

「…お前の頭の中は平和だな。」

がっくり項垂れている我狼。
「お前も同じ目にしてやるよ。」
「！」
気を抜いていて気付かなかった。
我狼の真後ろにはバットの様なこん棒を振り上げた男。
「…ッ！！」
太刀に手をかけるが男のこん棒の方が早い。
「…クソッ！！」
衝撃を覚悟したその時。
「ぎゃあああああ！！」
耳を塞ぎたくなる様な悲鳴。
「！？」
驚いて悲鳴をあげた男を見ると男の両肩にナイフが突き刺さっている。
「…ッ！」

ドカッ！

怯んだ男の頭を太刀で殴る。

「おぉ～当たった！」

のんきな疾風の声。

疾風を見ると手に数本のナイフを持っている。

疾風から男まで結構な距離がある。

（それを当てたのか…？）

コントロールの良さに驚いていると。

「あ～…コイツだ。」

気絶している男に疾風が言う。

「何がだ？」

我狼が問うと疾風が答えた。

「屋敷事件の犯人」

「……は？」

「ハハッ。マヌケな声…ぶふぇっ！」

容赦なく右ストレートを放つ我狼。

「どういう事だ？」

「話すと長くなるんですけど…」

「屋敷の中を探検した若い連中が言ってたんです」

「数人の人の声を聞いたって。」

「と言うことは…」

我狼が倒れている男を見る。

「目撃した黒い影は多分コイツらだと思うんですね。」

「じゃあ…誰かに見られてるっていうのも…」

「コイツらです★」

その言葉に我狼が崩れ落ちたのは言うまでもない。

太陽と月【番外編2】（後書き）

はい。番外編第2話です！

我狼さん疲れてますなぁ～（笑）

てかリオン放置ですか（笑）

次で番外編最終回…かなぁ？↑

～おまけ～

リ「前回のあらすじ！出番が多い疾風さんに涼雅さんが襲いかかる！！だがそこに疾風さんの天然さが炸裂！！二人の決着の行方は！

？」

我「…なんだその本」

リ「セリフ集ですが何か？」

我「……。」

涼（こいつ…！もしやリオンと同等の天然…！？）

疾「？？？」

涼「駄目やわい！！流されたら終わりやで！！！」

我「…何と戦ってるんだお前。」

リ「お腹減ったなぁ…」

我「……（汗）」

涼「諦めたらそこで試合終了やー！！！！」

我「あ〇ざい先生！？」

リ「せんせーお腹減りましたー。」

我「…もう少し我慢してろ。」

疾「あ、リオン。煮干しあるぞー。」

リ「に…煮干しですか…」

涼「のまれるな…のまれるな…わい…」

我（煮干しでも反応しない…！？）

リ「次回に続きまーす（モシャモシャ）」

おまけも次回で最終回！！

太陽と月【番外編3】（前書き）

はい！お待たせしました！！

番外編最終回です！！

太陽と月【番外編3】

「むぐー！うぐー！！」

「うるさい嬢ちゃんだな…。」

「殺っちまうか？」

「顔は良いんだ。殺っちまったら勿体ねえだろ？」

暗い屋敷の中で1人の金髪の少女とその周りに3～5人くらいの男がいる。

金髪の少女…リオンは手足を縛られ、猿ぐつわを噛まされている状態。

我狼とはぐれ、我狼を探している最中何者かに薬を嗅がされ、気づいたらここで縛られていた。

「この嬢ちゃん以外にも侵入者がいたって？」

「ああ。1人な。」

「まああいつが始末するだろう。」

あいつ…さきほど侵入者を始末してくると言って出ていった大柄な男の事だろう。

それにリオンは侵入者という言葉が引っ掛かった。

恐らく我狼の事だ。
我狼の事だ。やられる事は無いと思うが…
「にしたって遅くねぇか？」
「俺が様子見に行ってくる。」
大柄な男の帰りを遅く感じた1人の男が部屋から出ていった。
少しして…
ガチャッ…
扉が開く音がする。
音のする方を見るとさっき様子を見に行った男が立っていた。
「どうだった？」
「……。」
仲間が話しかけているのに男は無反応。
「おい。」
再び声をかけるとゆっくりと倒れていく男。
ドサッ！

「なっ…！？」

「ここが最後の部屋か。」

そして倒れた男の背後に立っていたのは銀髪の男。

「むぅーーー！！（泣）（先生ーーー！！（泣））」

「リオン…お前何をやっているんだ…」

叫ぶリオンに呆れた様な視線を向ける我狼。

「何やってるんだはこっちのセリフだ！てめえ何しやがる！！」

数人いる中の1人の男が叫ぶ。どうやらこの男がリーダーの様だ。

「そこに寝てる奴がいきなり攻撃してきたからそれなりの事をしただけだ。」

倒れている男を見ながら言う我狼。

「ふざけんな！！殺っちまえ！！」

「むぐー…。（最近こんな事があった様な…。）」

リオンの呟き（？）を無視して男達がナイフや剣を手に我狼に飛びかかる。

我狼は太刀で相手の武器を弾き、殺さない程度に蹴り飛ばしたりな

どして気絶させている。

「くっ…そが…っ！！」

「！」

我狼に蹴り飛ばされたものの気絶しなかった男がナイフを手によろよろと起き上がる。

そしてその刃はリオンに向けられる。

「むごぉ！？（私ぃ！？）」

慌てるが手足が縛られている状態では動く事も出来ず。

「死ねえええ！！」

ナイフの刃はリオンに真っ直ぐ降り下ろされる。

だが…

「せいやー♪」

ガンッ！！

「ぐおっ！？」

どこからか疾風が飛び出してきて、男に膝蹴りを放つ。

男は鳩尾に膝蹴りを食らい、倒れる。

「むぐー！！（泣）（疾風さーん！！（泣））」

「お！リオン無事かー？」

疾風は笑い、リオンの手足を縛っている紐と猿ぐつわを解く。

丁度リオンの拘束が解かれた時、

リーダー格の男以外我狼が全員気絶させた。

「あとはお前1人だがどうする？」

我狼がリーダー格の男を見て言う。

「お前達は何が目的なんだ！？金髪のチビなら返す！！見逃せ！！」

プチン！

我狼には敵わないと自暴自棄になり叫ぶ男には聞こえなかっただろうが何か切れる音がした。

その音に首を傾げる我狼と疾風。

「「！！？」」

だがただならぬ殺気を感じとる。

「フフフフフフ…」

殺気の発信源はリオン。
ゆらりと立ち上がる。
（うわぁ…怖い！）
疾風がそう思うのも無理は無い。
我狼でさえも顔がひきつってる。
「誰が…」
ボソリとリオンが呟く。
もはや行動の１つ１つが怖すぎる。
「誰がチビだあああああああああああ！！！」
「ぎぃぃぃぃやあああああああああああ！！！」
リオンの怒声と男の叫び声。
容赦なく双剣で男を叩きのめすリオン。
見て見ぬふりをする我狼と疾風。
「我狼さーん。」
「…なんだ。」

どこか遠い所を見ながら会話する我狼と疾風。
「リオンって双剣の達人だったんですかー？」
「…双剣の持ち方を知ったのがついこの間だ。」
「あれで！？」
黙って頷く我狼。
ドサッ…
何かが倒れる音。
「ふー…すっきりー♪」
リオンの声。
そしてそのすぐ傍にはピクピクと痙攣している男。
死んではいない様だ。
「どうやったらこうなるんだ…」
「嫌だなー先生♪双剣の柄でひたすら殴っただけですよっ♪」
青ざめる疾風。
何か悲しい目で男を見る我狼。

我狼の頭の中ではチビ＝禁句となった

「「「「「「かんぱーい！！」」」」」」

時はちょうど昼。

あの後屋敷にいた男達は村の警備の者達に引き渡された。

警備の者達が屋敷に行けば良かったかもしれないが警備の者達まで怖がっていたらしい。

そして今は茂が村の連中を集め、屋敷の悪者退治と言う名目で宴会中。

村の連中は昼間から酒が飲めれば良いと思っているだけなのだが。

豪華な食べ物や酒がたくさん並んでいる中、リオンと疾風も混じり、酒や食べ物を味わっている。

（そういえば先生いないなぁ…）

モシャモシャと食べ物を頬張りながらふと思うリオン。

「リオーン！こっちにも美味そうなのあんぞー！」

「どこですかー！？」

結局疾風の声につられてしまうのだが。

「…眠い。」

木に背を預けうとうとしているのは我狼。

（何故あいつらはあんなにテンションが高いんだ…。）

徹夜したのは自分だけじゃないはず…だがリオンと疾風はテンションＭＡＸで宴会に出ている。

我狼がここまで眠いのは本来合成獣であることも関係しているのだが。

ザシ…ザシ…

このまま寝ようかなどと思っている中、土を踏む音。

「ふぉっふぉっふぉ。お疲れかな？」

「…誰のせいだと思っている。」

足音の正体は茂だった。

「ふぉっふぉっふぉ。この度は助かりました。」

「…そう思うなら寝かしてくれ。」

「却下。」

「……。」

少しの沈黙。

風が我狼の銀の前髪を揺らす。

「…太陽の様な子ですな。あの娘は。」

茂が誰の事を言っているかすぐに分かった。

「あの娘の言動は周りを明るく照らしてくれる。」

リオンの事だ。

「俺には眩しすぎる。」

我狼の素っ気ない声。

「ふぉっふぉっふぉ。眩しすぎるあの娘に救われておるのでしょうに。」

「…そうかもな。」

我狼の表情は前髪に隠れて茂からは良く見えなかった。

「…我狼殿。」

「…何だ。」

「屋敷にいた親子…となり町に引っ越しただけじゃった☆」

「帰れ。」

そんなやり取りがされていたとか。
次の日の朝、我狼とリオンは村を旅立とうとしていた。
「じゃあな。」
「2人とも元気で！」
「我狼さんリオン元気でー！」
「お2人ともお元気で。」
背を向ける2人に手を振る疾風と茂。
「ああ。我狼殿。」
思い出した様に我狼の名を呼ぶ茂。
「何だ？」
「どうしたんですか？」
振り向く我狼とリオン。
「月は太陽が無くては輝く事が出来ませぬ。」
「そして太陽も又…月を必要としております。」
静かに語る茂。

「…何の事だ？」

眉を潜める我狼。

「「？」」

首を傾げるリオンと疾風。

「ふぉっふぉっふぉ。年寄りの戯言だと思って下され。」

「…なんなんだ。」

1つため息を吐き、再び背を向け、歩き出す我狼。

「行くぞ。リオン。」

「あ…はい！」

その背を追う様にリオンが走り出す。

「ふぉっふぉっふぉ。お主達の旅が…何かを掴む事を…祈っておりますぞ…。」

「？　どうしたのさじっちゃん。」

見えなくなっていく銀髪と金髪を見送りながら呟いた茂の言葉は誰にも届く事はなかった。

太陽と月【番外編3】（後書き）

はい。。白銀の狼と金色の雌狐番外編最終回でございます。。

茂のじっちゃんは実は切れ者設定です（笑）

あー…長かった…本当に…！！

ではこれからの作者の予定を発表しまーす（＾o＾）／

アンケートに答えてくれた方々本当にありがとうございましたm（＿＿）m

んでもってこれからは…新作の意見の方がお二人いたので新作を投稿させて頂きたいと思います！！

ですがぁ！！↑

続編を意見してくださった方が奇跡的にお一人いました！！

なのでその新作が終わったら白銀の狼と金色の雌狐続編を書かして頂きたいと思います！！

では今まで白銀の狼と金色の雌狐をご覧になって下さった皆様本当にありがとうございました！！

…新作と続編も見て頂けたら嬉しいな（・∀・）↑

ーおまけぇ〜ー

リ「前回のあらすじ！煮干しが美味しかったです！！」

我（ツッコミをしたら負けだと思っていいんだろうか…？）

涼「あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛！！！（悶絶）」

疾「終わりましたね～続編（，∀、）」

我「そうだな。」

リ「なんとかなるもんですね。」

我「ていうか実際お前身長何センチなんだ？」

リ「……（怒）」

我「分かった。俺が悪かった。だからその双剣をしまえ。」

疾（…目が…殺る気だった…（汗））

リ「やっと終わった事ですし…挨拶しておきます？」

我「そうだな。」

リ「今まで白銀の狼と金色の雌狐をご覧になって下さった皆様本当にありがとうございました！！」

我「続編と新作も頑張って書くと作者も言っている。良かったら見てやってくれ。新キャラも続々出るぞ。」

リ「では！続編と新作もよろしくお願いします！！」

リ「ばいばい♪」

我「（・＿・）／~~~」

疾「さよなら～♪」

涼「わい空気っ！！？」

～おまけ2～

少し漢字を間違えたらえらい事にｗｗ

1つため息を吐き、再び背を向け、歩き出す我狼。

「逝くぞ。リオン。」

「どこに！！？」

うん。　ただやりたくなったｗｗ

今までご覧になって下さった皆様本当にありがとうございましたｍ

（　　）ｍ←本日三回目

【番外編2】幼少期（前書き）

ちょっと息詰まったので書いてみました。。

我狼さんと涼雅さんの幼少期です！

【番外編2】幼少期

「お前らなぁ…！」

ご立腹な様子の銀髪の男。

そしてその正面に正座している１０歳前後の黒髪の少年と同じく銀髪の少年。

「…足痺れた。」

銀髪の少年…我狼が一言言う。

「これも修行や。」

どこか遠い所を見ながら言う黒髪の少年…涼雅。

「おい。聞いてんのかお前ら。」

青筋をたてる男。

「「イエッサー。」」

二人共声が揃う。

「…涼雅は痺れないのか？」

「まあなー。慣れとるからなぁ…。」

涼雅がしみじみと言う。

「りょ～がぁ～…？」

「ぎゃー！堪忍してや！！剴の大将！！」

「誰が大将だバカ野郎！！お前らあっちこっちで問題起こしやがって！！」

剴と呼ばれた銀髪の男に首根っこを掴まれ暴れる涼雅。

「しゃーないやん！それにわいはちょっと魔法使っただけやし、我狼もちょっと剣術使っただけやん！！」

うんうんと頷く我狼。

「涼雅…。そのちょっとでなにやらかした？」

涼雅を自分の目線まで持ち上げる剴。

「…窓割りました。」

何故か敬語の涼雅。

「大体我狼が魔法避けたのがアカンかったんやー！」

涼雅の言葉にムッとなる我狼。

「じゃあまた歩けなくなれって言うのか…。」

ぎゃんぎゃんと言い合いを始める我狼と涼雅。

バシン！！

「「いって～…」」

「喧嘩両成敗だてめぇら…」

木刀を担いだ剴。

「ったく…息子だからって容赦しねぇぞ？」

「わい大将の息子じゃあらへんもーん」

「わい親おらへんし…。」

ぶーと言う涼雅。

「うっせえ。我狼とお前なんぞ同じ家に住んでるんだから同じ様なもんだろうが。」

だが一刀両断。

「なんぞ…」

少し落ち込む涼雅。

「……。」

無言で涼雅の足を見る我狼。

「？　なんや？我狼。」

「…てい。」

軽く涼雅の足の裏に触れる我狼。

「〜〜〜〜〜ッ！！！？」

声にならない悲鳴をあげる涼雅。

「やっぱ痺れてる…。」

「意地っ張り…」と涼雅を見る我狼。

「がぁぁぁろぉぉぉ！！！」

ククッと笑う剴。

「…やべ。」

ダッシュで逃げる我狼。

「待てやあああああ！！」

ダッシュで追いかける涼雅。

「おい！待…。…もう無理か。」

平和な一日だった。

【番外編2】幼少期（後書き）

はい。幼少期のお二人でした、、

何故か我狼さんが無口な子になったｗｗ

剴さんは我狼さんのお父さんです。

ちょっとワイルドな件についてｗｗ

いやただ私は可愛い二人を書きたかっただけなんだ！！

他にはなにも無いッ！！

感想頂けたら嬉しいです。。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9485n/

白銀の狼と金色の雌狐

2011年7月21日21時49分発行